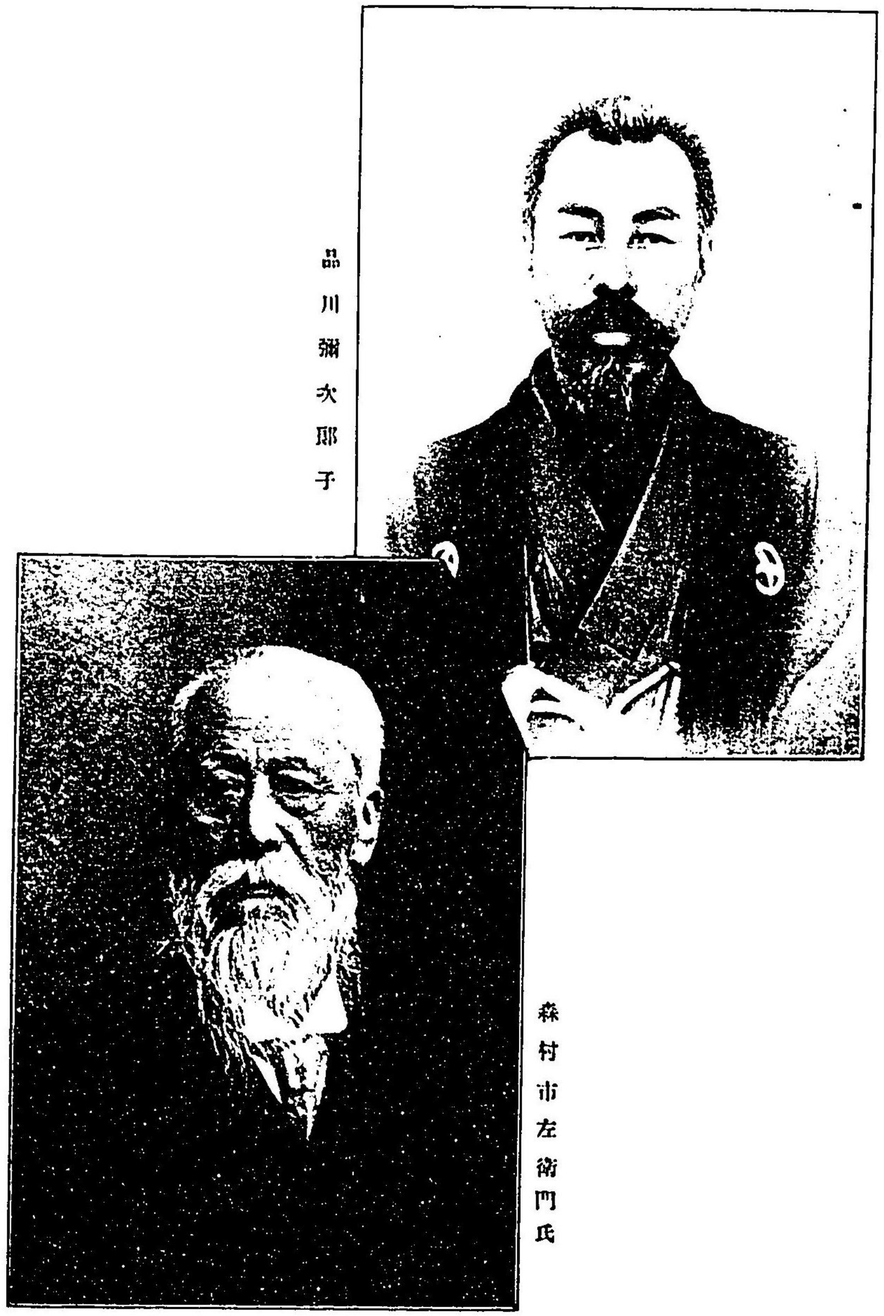
特20
986

一石川千山 寄贈本

明治
43. 8. 31
寄贈



品川彌次郎子

森村市左衛門氏

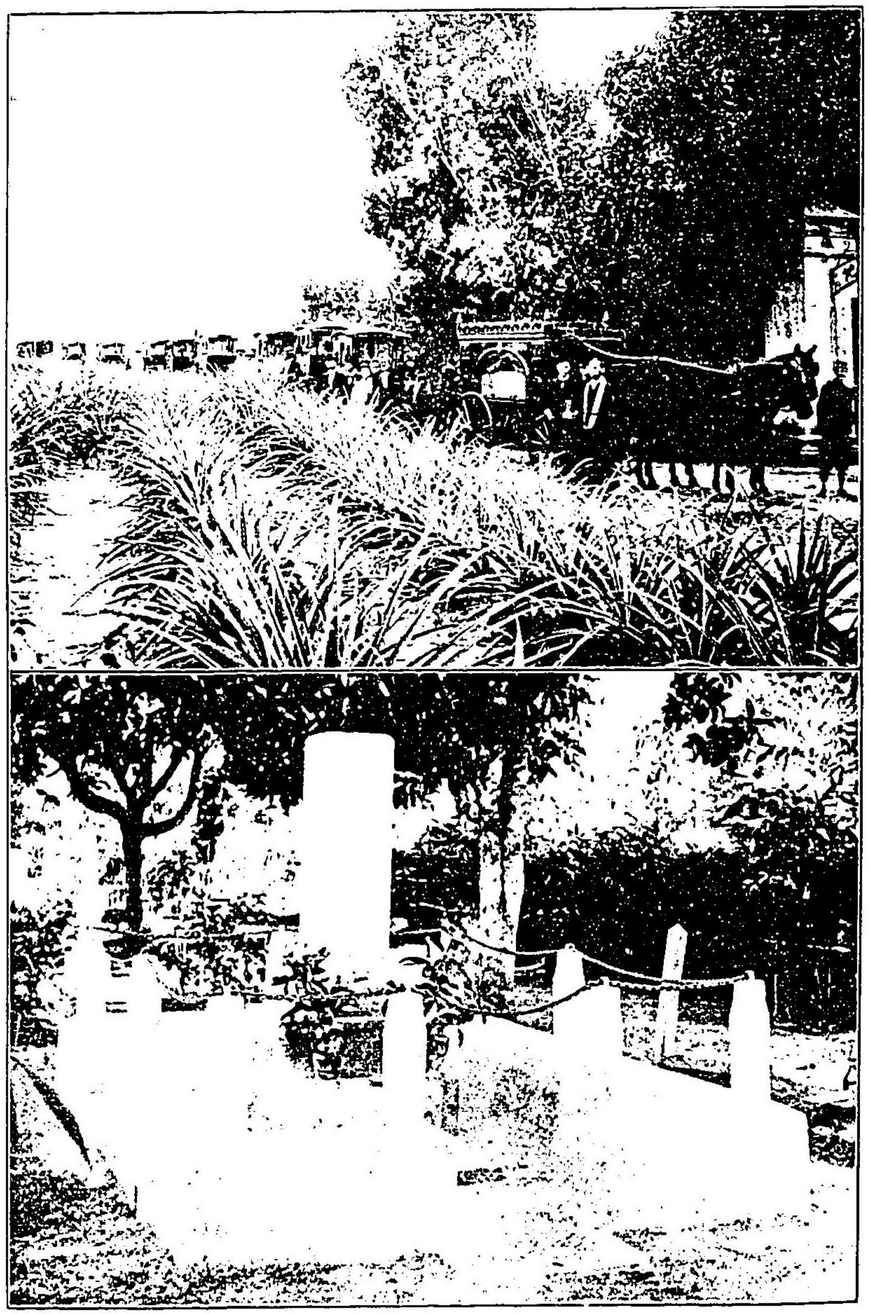
手塚猛昌氏

高山長幸氏

中央は阿川太良

右は最初の賛助者野村庄之助氏左は編者

明治廿八年十月圖南商會組織成り三人相携て品川子爵を九段坂頭に訪ふたる歸途撮影



上圖は新嘉坡に於て阿川太夏葬儀當日の光景下圖は
新嘉坡スランゲーン日本人共同墓地に在る阿川太夏の墳墓

目次

鐵膽遺稿

支那實見錄

暹羅東海巡遊記

鐵膽書翰（四十通）

友人阿川鐵膽

石川半山

鐵膽遺稿序

鐵膽の草したる文は少からず、然れども其の今日に於て出版して彼れの名と共に存せしむべき者は、支那實見錄と遥羅東海巡遊記で有る其他は片々たる者で、以て錄するに足らず、地下の彼れも亦此の二種を掲ぐる事を以て滿足するで有らうと思ふ

此の二種の記錄は、年代の古るくなつた爲めに、今日は或は實際に何等の用がないかも知れぬ、然れども日清戰爭前の支那と、義和團事變前の遥羅東海の事情を、歷史的に研究せんと欲する者の爲めには、多少の參考となる者が有らうと思ふ。

若し此等の記錄が今日の實際に於て、何等の用がないにしても、是れは彼れが此世に遺したる二大紀念品で、鐵膽其人を傳へんと欲せば必ず之を收めなくてはならぬ

明治四十二年九月

半山識

鐵膽遺稿目次

支那實見錄（庚寅新誌　自第八十六號至第九十七號　所載）

（上）（天津發）　貿易
（中）（天津發）　棧房
（下）（上海發）　己革及游勇の事　研究所卒業生の薄運
苗族の事　哥老會の事　到清の變遷
內地旅行者の艱苦　奇士の出發
開貨幣

暹羅東海巡遊記（明治三十二年九月發行東京每日新聞第八千六百七十五號より連載）

バンプラソーイ市　スン寺　アンヒンバンプラ國王の閱兵　シーラチャー
コシチャン島　レムクラバン　ナークルア市　コーラン島　コペッケオ島
コタラム島　サタヒープ　ホーンダーン　ラヨン市
タパナム　パクナム　コメサン島　チャンタブーン

支那實見錄

（上）天津發

今夫れ、我東京の地、初め到るの月、茫然漠如、十二區の何れに在るを知らず、月を重ぬる六、未だ以て八百八街の在る所を記す可からず、既に一ヶ年を閲す、尚未だ風俗の微習慣の細、盡く以て了得すること能はざるなり、獨り怪む、夫の支那漫遊者、僅かに半歲若くは一ヶ年の短日月を以て、或は堂々東洋の大勢を論じ、或は泊々對清の大策を說き、或は縷々萬言一書を著すことを、夫れ支那は世界の大國なり、面積の廣き歐洲に二倍し、人口の多き天下に冠たり、而して一朝之れが策を立て之れが書を著はす、豈に誤謬なしとせんや、予常に以て慨と爲す、故に敢て濫りに策を立てず、又敢て輕く書を著はさず、靜觀默察、自悟自信、然る後初めて口を開き筆を把らんと欲す、而して其叙事の體裁たる、又豫しめ部門を設けず、項目を分たず、隨觀隨筆、直情徑記酔を修めず、文責らず、實況を記し實態を寫すを以て主となす、故に或は事體の接續せざる所あらん、或は叙事の重復に渉る所ある可し、ソハ全部の終了を告け初めて

貫通す可し、予は固より一時の腰掛主義にあらず、永く斯土に住することを期す、然れとも予は元羸弱蒲柳の質殊に怖寒之躬、到清早々風魔の襲ふ所と爲り、二旬の間空臥病蓐獨守青燈の悲況に陷りたれば、當港の如き河水氷結朔風凜烈寒計零度を下るの地、或は勝ゆべからさらんことを怖れ、寒を福州邊の溫地に避けん乎との念を發したる程なれは、或は爲めに俄かに歸國するやも圖り難く、只其れ迄は身體の勝ゆ可き限り、事情の許す限り、一心不亂探撿を遂げんと欲す、若し夫れ世間有爲の士清國の事に付取調を要する事項あらば、其の項其の目及び其取調の要項を記し庚寅新誌社へ報せらる可し、予は其の項目の紙上に登るを見て、直ちに之れか取調に從事せんとす、讀者請諒焉。

萬里の波濤蹴り破りて船は早や白河に入りぬ、河口の兩岸に蜒蜿迤邐一小丘を爲すものあり、之れを太沽の砲臺とす、其の建築たる、唯だ泥土を以て塗り疊みたるのみ、其の之れに備ふる所の銃砲も亦利機にあらず、大抵クルップ位のものなりと云ふ、此の砲臺たる、實に是れ近くは天津の關鑰遠くは北京の守門、一朝瓦解せば城下之盟直樣と云ふ肝要大切なる場處なるに、其の膽旦粗なること此くの如し、人をして一見支那軍備の不整頓なることを知らしめ、又忽ち輕侮の念を起さしむ、洵に支那の爲め慨嘆の至に勝へす、其の側に簇立する土人の、家屋も亦皆泥屋のみ、蓋し此の山岳なく、隨て木材に乏しく、又砂石なく、唯た河邊蘆萩繁り、地下粘土を得べし、土人等は其粘土を乾燥して壁と爲し、蘆萩之を蔽ひ、又其の上に土を塗り以て家屋となす、其の狀宛かも燕巢の如し、一旦大風起り淋雨至れば家屋忽ち崩解に歸するも渠等は敢て憂ふる氣色もなく、又に土と萩とを採り所を擇んて燕巢を造る、洵に半輕棲居と謂つべし、思たより狹きは白河の幅、聞きしに優るは白河の溷、濁流漫々船の行くこと頗る遲黎色豚尾の田夫等が畝に水を汲み入るゝ樣イト可笑、何所も同じ小供等は船の浪に打たれんと河に飛び込む樣イト面白、兩岸果樹蓊蒼田畝肥白河九十九廻殆んど上り盡して船は愈天津港に着せり、本港は北京を距ること廿九里、太沽を離るゝこと十四里半、南北運河及び永定河の三水會合する所の左岸に在り、人口凡て六十萬と稱す、本港は北京に通する咽喉にして、滿洲蒙古を控へ南清地方の衝路に當る故に水には帆檣林立、舳艫相屬、滊笛喨々輟む時なく、陸には物を載するの車轂相擊ち、貨を負ふの人肩相摩す、百貨輻輳、富賈蝟集其の貿易の盛大なる漢口に頗し上海に次くと云ふ、寔に北支那第一の繁港なり、因て是より薄か貿易に關する事柄を陳ふべし、固より支那四百餘州を睥睨して、予の雄心勃々たるも、今日

の形勢を以て考ふるに、支那政府如何に因循に流れ如何に苟且に陷るも、未た仲々二三年間には滅亡する景色も見えざれば、先づ其の雄心は胸中に藏し置き、平和の戰爭なる貿易の事より筆を起すべし。

貿易

夫れ支那は隣邦と商を通する玆に久し矣然れとも其の歐洲と交を通せしは、蓋し今を距ること一千年前東漢の時を以て始めとす、即ち班超使節を奉じて羅馬に至り陸路往來の端を開き、羅馬の使節又來りて方物を獻し以て海路交通の緒を發せしに起る、其の後ち交通の道久しく絕え、只た僅かに西北の蠻族と印度及南洋諸國のもの時々往來するのみ、明の中世に至り西班牙葡萄牙芽闌等の商人南海に來り貿易を爲すもの漸や多く、清の初め浙江省に定海縣を置き、城外の埠頭を以て互市場に充つ、是れより各國の商船多く此に集まる、然れども貿易は尙廣東の一所に止まれり、而て海關吏等は貪欲無道私利之れ求め格外に苛稅を課す、外商大に苦み、屢清庭に訴へ之か矯正を請へども、更に應せず、是に於て貿易の道大に衰ふ、此時に方り英國は印度の孟加臘を滅し、東洋通商航海の權を專にし、漸く目を支那に注くに至る、英商の來て貿易を爲すものは大抵鴉片を以て首となす、清廷其の弊に勝へず遂に鴉片の輸入を禁ず、之に於てか鴉片の變起る、一戰廣東を陷れ再戰香港を拔き遂に江寧に迫まる、清廷其防ぐべからざるを知り和を媾す、即ち償ふに二千一百萬圓を以てし割くに香港を以てし、許すに海口五ヶ處の通商を以てす、之を江寧條約と謂ふ、其後年を經て廣東の吏復た擅に英船の清民を捕獲す、是れに於て又隙を生じ佛國と連合して、天津を破ぶり、北京を衝く、清廷亦成きを求め、償金一千二百萬圓を拂ひ、七ヶ所の通商港を開く、之を天津條約と謂ふ、是より各國相踵て交を結び商を通ず、今左に條約國を示さん。

魯西亞國	康熙二十二年七月	條約議定
英吉利國	道光二十七年二月	條約議定
瑞典國	道光二十七年二月	條約議定
那威國	道光二十七年二月	條約議定
合衆國	咸豐八年五月	條約議定
佛蘭國	咸豐八年五月	條約議定
獨逸國	咸豐十一年七月	條約議定

嘩嗎國	同治二年五月條約議定
和蘭國	同治二年八月條約議定
西班牙國	同治三年九月條約議定
比耳義國	同治四年九月條約議定
伊太利國	同治五年七月條約議定
澳太利國	同治八年七月條約議定
日本國	同治十年七月條約議定
秘魯國	同治十三年五月條約議定
巴西國	光緒七年八月條約議定

以上十六ヶ國

西人嘗て稱す支那は世界の財源なりと、果穀蔽地、金玉滿山、纍々積々窮極する所を知らず、眞に貨物の天府なり其の物産の種類甚だ多しと雖とも、其の最も重なるものを擧ぐれば、菜糸、綿皮毛、豆糖、麝香、大黄、砂糖、蠟、漆、油、藥物等にして、其の中最も巨大の利を占むるものを茶、糸、綿皮、毛、砂糖、豆、蠟、藥材、油とす、而して輸入品の重なるものは鴉片、金巾、石炭、石油、摺付木、硝子、毛織物、銅、海産物にして其の中最も多きものは金巾と爲す、之れに次ぐものは鴉片なり、以上は支那全體貿易の事を說明したるものなり、是れより予の所在地卽ち天津港の實況を陳ふ可し、當港輸出品の重なるものは草帽辮、駝毯、毛氈、皮貨、豆餅、豆油、大黄烟草、葡萄、梨、水蜜桃にして、輸入品の重なるものは海參、海鼠、鮑魚、魚翅、魷魚、昆布、寒天人參、獺皮、銅、漆器、陶器、綿布、木材等なり、而して此等を取扱ふ所の外國居留人の店數及人口を擧ぐれば、則ち左の如し、

天津港居留外國人店數及人口表

國名	店數	人口
日本國	四四	四六
英國	三二	五一三
佛國	三	九六
米國	一〇	一九二
獨逸國	一	八五
魯西亞	六	六四
丁抹國	二	二三
無條約國	二	三
合計	六〇	一、〇二二

（備考米國人口の多きは蓋宣教師を合算したるに因るべし）

右の表に依りて觀るときは、我が國人の店數米佛丁抹等に凌駕すと雖も、實際の狀態を見るに、當港居留地は英租界佛租界の二區に分ち、外國人は何れも其の二租界に住す、而して外國商館は何れも皆規模宏大、輪奐壯麗、就中英國工部局の如きは高樓大閣巍然青雲を摩し、金碧丹雘燦然人目を眩す、行くもの皆馬を駐めて仰視せざるはなし、顧て我商館を見るに、夫の三井洋行すら南方一隅の支那家屋を以て之に當つ、其它武齊號と謂ひ、樂元堂と云ひ、松昌洋行と云ひ、皆佛租界中の一小屋に蟄居するのみ、支那人の自尊自慢なる、之を見て豈に歐人を揚げ、我國人を貶せざらんや洵に殘念の至りなり、我國商館中三井洋行は銅茶昆布材木等の卸賣を爲し、武齋號は雜貨を、樂元堂は藥種及綿布を、松昌洋行は材木を販賣せり、其外に散髮屋一軒洗衣屋一軒あるのみ、開く我航海船の初めて當港に通するや、邦人相爭ふて店を開きしも、倏ちにして戸を鎖さし、今僅かに前記四軒を存するのみと、蓋し其の原因四因あり、一に曰く氣候激變の甚しきこと、二に曰く活計程度の高きこと、三に曰く資金の薄弱なること、四に曰く忍耐力に乏しきこと是れなり、當地寒暑共に酷烈、夏日は百六度に昇り、冬日は零度以下六度に降る、是れ第一軟弱なる商人等の勝ゆる能はざる所なり、又當地屋賃の昂貴なることは殆んど我東京に怨し、庶物亦之に伴ふ、是れ渡清者の想ひ及ばざる所なり、凡て支那人の性たる、輕く人を信せず、又深く人を信ず、我商人等の堂々店を張るを見心窃に以へらく、是れ一の虚飾店のみ、必らずや日を經すして斃るへしと、笑て顧みす一年然り、二年尚然り、三年に至り初めて以へらく、是れ侮るへからす、懲るへき乎と、試みに就て驗するに、我邦人の同文同種にして言語に通し、取扱の巧妙丁寧なる、渠れ等大に悦ふ所あり、是れより信を置くこと日に厚く心を傾け誠を盡す、既に一旦信を措く以上は、假令他より喙を容れ誹謗讒間を試むるも、渠れ堅く信して疑はす、然るに我商人の薄資にして忍耐に乏しきもの三年の久しき豈泰然自若として俟ち得べけんや、大抵一ヶ年若くは二ヶ年にして「アー支那ハ駄目ダ」との嘆聲を發し、店を閉づるに至る、嗚呼忍耐なる二字は、是れ商家の骨髓にあらずや、而して今志を立て、萬里の波濤を、踐み破りたる商人にして尚如此、我商家の振はさる良有以哉、今左に昨年中當港輸出入の價格を擧けん。

明治廿五年中天津港輸出入物貨價格表

國名	輸入品	輸出品	合計

日	本	三五七、八三四兩	二二、七四一兩	三八〇、五七五兩
英	吉 利	三〇九、四八二	一、四六二	三一〇、九四四
亞	米 利 加	三五、〇一〇		三五、〇一〇
香	港	一、三一六、四七七		一、三一六、四七七
新	嘉 坡	三三一		三三一
歐洲大陸(露國ヲ除ク)		二〇二、七四一		二〇二、七四一
印	度	五、九五二		五、九五二
露	領滿洲	一九、二七二	二、三三四	二一、六〇六
露西亞及西伯利陸路				
支	那諸港	一五、六四〇、三二〇	四、〇六二、六二三	四、〇六二、六二三
合	計	一七、八八七、四一九	六、三九八、九二一	二二、〇三九、二四一
		一〇、四八八、〇八一	二八、三七五、五〇〇	

（備考價格は海陽銀に依るものなり一兩は凡そ我一圓五十錢位に當る）

前記の表に依るときは日本は其の輸出入の多き歐米を壓倒するが如しと雖とも、コハ唯だ天津一港の比例なり、是より廿四年中の各港總輸出入の比例を擧げて之を示す可し、以て我國が如何なる地位に在るかを知得せしめん。

明治廿四年中支那貿易各港總輸出入價格表

名	價	格
國		一〇五、八六三、六二〇
香	港	
英	國	四三、三九九、九三四
歐洲大陸（露國ヲ除ク）		一九、二八〇、九一四
北米合衆國		一六、七六五、三八二
印	度	一四、〇三五、九九四
日	本	一一、五〇六、〇七〇
露國（海路オデッサ經由）		六、九九一、二三七
澳	洲	五、五七四、九八三
露國及西比利亞（恰克圖經由）		四、四三三、八〇七
新嘉坡及殖民地		三、一四八、五八四

英領亞米利加			一、四五四、四〇六
濠州及新西蘭等			一、三〇六、六八六
露領滿洲			一、〇九八、四九二
亞細亞土耳古、波斯、埃及、阿爾及耳、亞丁			六七二、五五五
朝鮮			五八〇、九八〇
交趾支那及東京安南			四五九、〇八八
瓜哇及スマトラ			四〇六、九五四
遥羅			三八七、五二〇
南亞米利加			三一、八八〇
弗利賓諸島			二八一、〇五二
南亞弗利加			一八九、五八七
合計			二三七、五三九、六七五

右の表に依り、我國の遠く歐米に及ばさること明瞭なるべし、是れ固より我邦人の徒らに喫々東洋貿易の事を説くも實地手を下すもの尠なきに因ると雖とも、抑亦

他に大なる原因なくんばあらず、原因とは何そや、貿易港數の歐米人より寡きことを是なり、請ふ今此に之を説かん、凡そ支那の公開貿易場なるものは、其の數總へて二十五あり、即ち

上海　漢口　廣東　天津　福州　寧波　重慶　九江
蕪湖　鎮江　宜昌　芝罘　牛莊　溫州　厦門　汕頭
九龍　北海　瓊州　潞州　蒙自　淡水　鷄籠　打狗
安平　是れなり

而して我國との條約港は上海、鎮江、漢口、九江、寧波、天津、牛莊、福州、厦門、汕頭、瓊州、廣東、安平、淡水の十四港に過きず、他は皆歐米人の爲す所に任かす、我邦人は唯だ指を咬へ涎を垂るゝのみ、夫れ我國と支那とは其間一葦帶水のみ、其俗同しく、其種同しく其文同しく、其交を通するや亦久し、豈歐米人と日を同うして語るべけんや、而て其條約の結果此くの如し、吁是れ果して誰れの愆ちぞや、局に當るの人一考して可なり、輸出入比較等の事は先づ此に止め、是れより海關の事を説く可し、此れ貿易に密接の關係あればなり

海關

海關に舊海關と新海關との二あり、新とは即ち舊に對するの謂にして、外國貿易場の稅關なり、今新海關より說き起す可し、新海關は其の管轄區域を分て十九と爲し各區に稅務司以下を置き、之れが事務を取扱はしむ、而して此の稅關吏は大抵英國人の手に歸せり、支那人は唯だ其の下に屬し、其願使に從ふのみ、其の官吏の數も亦多く堂々たる一衙門を爲せり、全國稅關の洋人は總計五百五十五人ありと云ふ、而して其歲入は每年大凡二千五百萬兩以上に達す、其額亦大なりと謂つべし、此巨額の歲入と此の商機の大權を擧けて外に一任す、誰れか云ふ支那人猜疑多しと、豈に信ならんや、今若し日本の稅關部內をして、此くの如く外人の蹂躙する所たらしめは、志士の憤怒果して如何、燕趙古來多感悲歌之士と云ひしは即ち當天津港近邊の事なれども、今は感慨悲歌之士は藥にするも程もなく、饕餮無飽、私利之れ貪り敢て國家を顧みす、唯汲々乎として阿堵物を得んことを務む、頭も金の爲めに叩き、腰も金の爲めに屈し、只た〳〵金なきを是れ感慨悲歌するの士あるのみ、稅關の小吏等は西洋人等に蹂躙叱咤せらるゝをも意とせす、只た商人等の物品に故障を付け、若くは故らに延滯し賄賂を取り、已れの腸を肥やすを見ては、巨豪なる人物と思ひ、低頭平身唯命之從、反てこの裏面には、大に自國の利を剝奪せらるを知らす、獨り稅關のみならす、西洋人とさへ言へば到る所皆尊敬の意を表し、殊に巡査等が之れに對し敬を表するの風實に見るに忍びす、茲に特書す可きは、稅關の英人等が日本人を雇ひ入るゝことに付き最も强く拒絶せること是れなり、蓋し若し日本人にして稅關內裏に入らは、其の眼光の慧銳なる一見渠等の奸腸を見貫き、其の手腕の敏捷なる一朝渠等の勢力を壓倒し、其言語の熟達なると其の人種の同類なるとは以て支那人と親しみ易く、遂に渠等の權利と職業とが日本人に移らんことを恐れてなり、固より日本人は誰れ一人として支那人に雇はるゝことを望むものあらされとも、渠等の奸佞卑劣なる少し片腹痛きが爲め茲に特書す、物品を海關に持ち運びしとき に歐米人等の分を先きにし、我邦人の分を後にし殊とに悶着を付けるが如きは、勿論常に有り勝ちの事とす、日本人已に然り、支那商人の虐待を受け不便を蒙ること推知すべし、西洋人等は唯たに稅關部內に於て然るのみならす、日本人の渠等の銀行に至り爲換を組む時に於ても、渠等はフン又少額の爲換をと云はぬバカりの顏色にて見向もやちす、先つ自國の處分を了へ、然る後徐々之に着手する有樣なり、然るに茲に小氣味よき一小話あり、序てに物語らん、ソハ當地の我三井洋行が當地の道臺より受取る可き金十六萬有餘圓あり、道臺は支拂方を獨逸銀行に命したり、三

井は其の金額を上海に送附せんが爲め各銀行へ爲換手數料を開合せたるに、英國銀行最も廉なり、因て之に依頼したり、獨逸銀行之を聞き、大に驚き、周章狼狽百方手を盡くして之を已れに委托せん事を請ふに、三井堅く取て動かず、扨愈爲換を發するに臨み英より獨に現金引渡を求む、獨曰く、五日間の猶豫を與へよと、三井之を聞き直ちに行て其の不條理を詰り且つ告くるに公然領事館に訴へ相當の處分を請ふことを以てす、獨大に窮し其の不條理を謝し且つ窃かに訴へて曰く、今一朝此の巨萬の金額を轉出する時は弊行一掃空場無物、仰き願くは其の内情を察し之を弊行に委托せられんことを、其の手數料の如きは唯命是從と辭を卑うし禮を厚して懇請す、三井渠等の窮情を憫み之を許す渠大に悦び深く其の恩を謝し直ちに之れか取扱を爲せりと云ふ、豈に小氣味よき話ならずや、此の事固より一小事件敢て記する價値なしと雖とも、是より舊海關の事に移るべし。

舊海關とは古之所謂關市譏而不正と謂ひしを今は譏て征するものにして國内水陸四通の地に設置し、運搬貨物に對し抽税する所なり、固より賄賂公行下民虐待の支那なれば培克の弊は言を俟たざるなり、次は鹽金局なり。

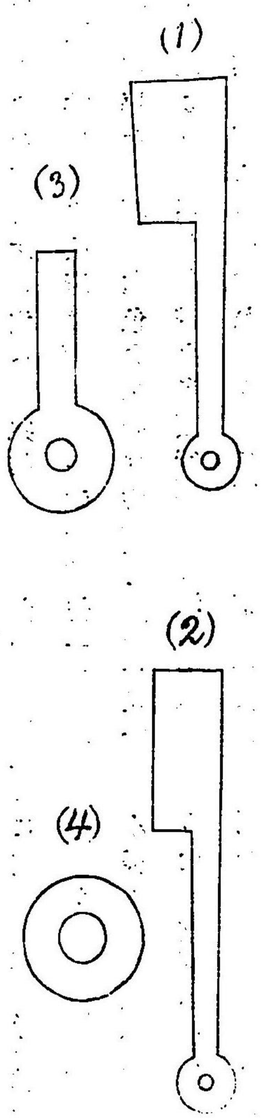
鹽金局とは亦是れ内地の一税關所なり、舊海關と異なる所は、彼は中央政府の直轄にして、此は地方衙門の管理なり、此の鹽金局は大都小邑僻村寒里到る所設置せざるはなし、故に物を送るの道遠く局を經るの數多ければ遂に税金の額其の物貨の額より上るに至るへし、而して其の培克虐待の弊は遠く新舊海關に越ゆと云ふ、嗚呼亦醜矣哉、茲に又記す可きものは、歐米諸國は條約に依り一次新海關の半額を納れ自由に内地へ物貨を運送し舊海關及鹽金局の課税を免るを得へし、單に内地に輸入するのみに止まらず、内地より輸出するに於ても亦然り、而して獨り日本には此の特典なし、其不便其不利豈に尠少ならんや、朝野の士宜しく一考して可なり、以上は眞の大略を示すのみ、詳細之事に至ては逐一實見調査を遂け報道す可し。

嗚呼今日我國の政府は如何、國家の大本未た立たず、施政の方針未だ定まらず、苟且偸安、因循姑息、一時之れ繕縫、目前之れ彌縫、一事起れは委員之れ擇び、國會開くれは議員之れ籠絡、外交の事に至ても清國に於てすら歐米と對等の條約を締結する能はさるにあらすや、其の人を外國に差するや不平家若くは遣り塲なきもの若くは老朽無用のものを以て之に當つ、現に今日最も多事有爲の手腕を要する支那朝鮮の公使を兼任せしむるに老朽無爲の大鳥氏を以てせるにあらずや、是れ果して能く本職を盡せしと謂ふ可き乎、國會は如何、亦是れ整々乎として政府の古穴を探堀

し汲々と乎として政費の小部を削減し、唯た政府攻撃を之れ務め、內閣撲滅を之れ講す、國力日に衰へ、國權日に頽消するにあらすや、是れ果して能く本務を盡くせしと謂ふ可き乎、紳商豪農は如何、亦是れ眼前の小利に矻々として、遠永の鴻益を忘却し、相爭ふて田畑を占有し、相競ふて株券を守藏し、唯た自已の安全を圖かり、公共の得失を顧みず、隣邦天府の財源は擧けて外人の爲す所に任するにあらすや、是れ果して能く本分を盡くせしと謂ふ可き乎、嗚呼朝野の士、我內治の擧らさること如此商業の振はさること如此、國權の伸はさること如此、而して東洋の雲行は果して如何、西洋の形勢は果して如何、夜深入眠之後、孤燈明滅之下靜がに之を思へ、果して能く悠々安坐し得へき乎、天涯萬里の孤客、一念每至于此、奮然蹶起出望東天者日幾回請ふ是より貿易に欠くへからさる貨幣之事を說かん。

貨幣

支那の通貨は銅錢即ち我國の寬永通寶の如きものを以て本と爲し、金銀及銀行紙幣を以て之れか流通を補助す、今簡單に其の沿革及原因を陳へんに、古代には貝類を以て物品交易の媒介物と爲したるべし、何を以て之を云ふ、曰く、其財貨に關する文字を以て之を見るに、財と云ひ、寶と云ひ、貨と云ひ、買と云ひ、貸と云ひ、價と云ひ、有も財寶に關する文字は盡く左若くは右に貝の字を屬すればなり、之に次て採用せられたるものは即ち鎌及鍬なり、此れ等は農夫の必要欠くべからさるものなれは、其の流通の區域甚だ狹隘なることは言を俟たず、其の之に亞て流通せしは今尙ほ支那の西南地方に於て用ゐたる所の小刀貨幣是なり、此れは素と兵士の使用せしものにて、何れも皆柄に圓き穴を穿ちたり、即ち是れ携帶に便なるか爲めなり、其後漸々刄の部分を小にし、而して柄の部分を大ならしめ、終には全く刄を付せさるに至り、始めて當今の通貨を見るに至れり、今試みに其圖を示さば左の如し。



右の如く第一より漸次進化し、第四に至り始めて完成したるものなり、其後種々の變遷ありて、圓環貨幣其他種々のものも出來れり、然るに世大に亂れ干戈止むとき、

なく、國家の秩序大に頽敗せしを以て、貿易は單に物と物との交換に止まれり、秦の始皇天下を統一したる後此等の雜多なる貨幣を廢し、圓き黃銅貨並に小さき立方體なるものを以て之に代へ、億兆初めて其如の月を視るに至れり、然るに其後秦朝の滅亡と共に時の政府は貨幣上の政法其他一切の關渉を絕ちたれば、再び雜草茫々貨幣市場を掩覆し、白色金屬の立方體、鹿皮の屑片、及大小種々の貨幣重要なる商業中心地より續出し、白晝百鬼橫行、怪物出沒の有樣となりたれば、如何に無干渉の政府も其の弊に勝へ兼ねけん、遂に斷魔の劍を揮て造幣局を興し、貨幣の統一を計りたり、此時よりして僞造貨幣續々市場に出で、粗惡錢溢るゝが如く湧き出づるを以て、百方之れが撲滅の策を講したれども、遂に能はず、因て不得止物品交換の古に復し之れか弊害を免れんとせり、是に於て乎絹、麻、織物、穀物、及荒金屬復た〳〵市場に顯はれ出たり、大署如是より現行貨幣の事に移る可し。

目下銅にて鑄造したる貨幣を支那人稱して錢と云ふ、錢は其の價非常に低廉なるを以て携帶勘定總へて大なる不便を感す、錢の外に錢票なるものありて通用す、此れは處々の錢莊即ち支那銀行より發行するものにして、猶我國の兌換券の如く之を發行元の銀行に持ち行くときは、額面記載の錢額に引替るを得るなり、此の錢票は素と一片の紙に過きされば、其携帶の便不便決して錢と同日の論にあらす、左れは人々好んて之を授受すべき筈なるに、實際其如此ならさるものは、其紙質並に印刷等非常に粗末なるを以て之を僞造すること甚容易なるか故に僞造錢票の流通すること甚しく、不正の錢票を受取りて不測の損害を被むること往々之れあるを以て、眞僞を辨別するの明なきものは之を授受するを好まざるに由る、且又五文乃至十文の小賣物には恒に錢を用ゐ、大なる取引には銀を用ゆるを以て、錢票流通の區域甚狹隘なるを免れす、錢の計算は國中處々其の名稱を異にすれども、其の大略を擧ぐれば。

北京　一吊四十九文凡我十錢と見て可なり

但北京城內には大錢を通用するが故に北京四十九文は他の九十八文に當る。

天津　一吊(四百八十文にして凡我五十錢に當る)

但一吊錢は大錢及淨錢の稱ありて大錢とは實際の數を云ひ、淨錢とは實際の半分を云ふ、假令は一百大錢と唱ふれば錢一百文を云ひ、一百淨錢と云へば錢五十文を云ふ、普通賣買の際に或物品の價を唱ふるに當りては必ず淨錢に依る、故に或物品を指して單に其價四十文なりと唱ふるときは實際二十文を拂

ふて可なり、大概銀の相場は

銀一兩に付き三吊文(淨錢)即ち一千五百文(大錢)洋銀一弗に付き二吊二百文(淨錢)即ち一千一百文

上海其他　一串

但一千文と見做て可なれ共實際の數は九百八十文にして四百九十文の繫二條を以て一串と爲す

錢に樣錢制錢及私錢の三種あり、前二者は政府の鑄造に係り、私錢は人民の私鑄に係る、樣とは見本即ち雛形の錢にして、政府が各省鑄錢の模範たらしめんが爲めに鑄造したるものなり、然れども此れは普通の行使に用ゆるものにあらず、有事の日に供するものなり、制錢は人民個々の取引に用ゆる而已、樣制兩種は何れも各同一定の規ありて其の質其量共に均一なりとす、即ち

樣錢百個重量百六十目即ち一斤其質銅六分鉛四分制錢仝く百二十目其質銅二十七鉛二十三の比例

私錢に至ては一定の規なく、其重量其性質毫も一ならず、銀塊は洋人呼んで「テール」とす其の形容に酷似し稱して馬蹄銀となすもの即ち是れなり、支那人は單に銀子と稱す、量の大小質の善惡形狀の方圓等其の種類極めて多く、授受の際に面倒を感ずること錢の比にあらず、銀子にも官爐の鑄る所のものと私爐の鑄る所のものと兩樣ありて、官鑄は其質其量共に稍や畫一に歸すと雖も、私鑄に至ては種々雜多にして大に其の均一を缺く、今各銀貨と名種とを擧ぐれば大略次の如し

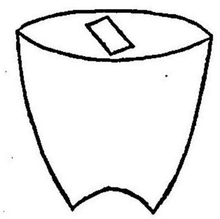
方印	百兩	
山西槽	九十九兩五錢より九十九兩九錢に至る	湖北槽
東關海	九十九兩七錢上下	上海槽
保府化	九十九兩五錢上下	天津化寶
錦槽	九十八兩上下	湖北錠
浙江庫	九十九兩	松江
錢粮子	百兩	腰子錠
十足色	百兩	九十九兩五錢上下
福壽課	九十九兩上下	鹽課
淨定	九十八兩	蛤蟆銀
拍子		千汁
		百兩
		九十九兩上下
		面觔錠
		九十兩上下
		九十四兩
		九十六兩上下
		自九十五兩至九十七兩
		自九十六兩至九十九兩

頂銀　七十兩上下

汁水課　九十九兩上下

前に陳るが如く銀塊は其形或は靴形或は盃形或は臼形種々雜多なれども今左に其の鑿關錠の一例を示さん

鑿關錠



谷邊　九十七兩上下

鑿關錠　九十九兩上下

（備考百兩を以て純銀と定む故に九十七兩は百分中三兩の雜物あるを示し七十兩は三十兩の雜物あるを示す）

以上二十六種の內にて方印、鴨蛋槽、錢粮子、腰子錠、十足色等五種を以て其成色最上と爲し、蛤蜊銀、頂銀等を以て成色最下と爲す、成色とは質の善惡を測る名稱にして、蓋銀兩中銅の混合物多きときは其の色黑く、少きときは其色白きを以て色の黑白に依り銀質の善惡を知るを得べし、天津にては方印錢粮子等を納稅に用ゐ、天津化寶を普通の貿買に用ふ、方印は一塊五十兩の重量ある大塊なる故に巨額の納稅に用ゐ、錢粮子は小塊なるを以て小額の納稅に用ゆ、前條列擧するもの丶外に尙經陽錠經陽槽子、江西方槽、廣東方槽、蘇它錠、武昌關錠昌關子、荊沙錠川白錠等の名稱ありて諸處の公私鎔房より鑄出す、其種類極めて多く、成な之を網羅し悉くすへからず、專門の錢莊と雖とも亦恐らくは之を知悉せざるべし、尙ほ此の外に碎銀とて必要に應し小塊に切斷して之を行使するものあり。

銀を量るの秤亦其の種類極めて多く、地を異にし職を異にするより各別類の權衡を用ゆ、天津にて親しく經驗せし所の各種の秤名及各秤を行平に比較すれば次の如し。

錢平	一〇〇兩該當	行平　九九、二〇
庫平	一〇〇兩同	同　一〇〇、三六
關平	一〇〇兩同	同　一〇五、〇〇
公法平	一〇〇兩同	同　九九、五〇
議法平	一〇〇兩同	同　九九、三〇
京平	一〇〇兩同	同　九九、一九七

新行平　一〇〇兩該當　行平
西公法平　一〇〇兩同　同
九九、四四

（備考此割合は天津居留地滙豐銀行と稱する外國銀行の規定に因る）

行平は外人の呼んで天津「テール」即ち天津兩銀となすものにして、支那人との賣買貸借に外人一般此の秤を用ゆ、時の相場に依り時々高下あれども、凡そ我銀貨百四十三圓上海銀百五兩錢一千五百六錢と見做して大差なしとす、錢平、議公平、西公法平等は普通の賣買借用に用ゆるものにして外人と雖とも輸出入其の他百般の納稅に用ゆるは其秤を以てせさるべからず、外人稱して海關「テール」と云ふもの即ち是れなり、京秤は固と北京城內普通の賣買に使用するものにして、又二兩平と名づく、庫平に劣るなし、五分六厘なり、又北京には市平なるものありて各銀行に之を用ゆ、庫平に劣るなし三分六厘なりと云ふ、庫平一兩は我十匁一分五厘二毛十二分の一に當る。

銀は種類多きこと如此質の善惡交混せること如此なるを以て、不知不識の間に手形の流通を奬勵し、各錢莊銀號等より發行せる銀票は其の錢莊銀號の信用あるものに限り好く流通して毫も阻害なし、外國商人抔も亦好て之を授受せり、是れ一つには必要に迫まられて然ると雖も、亦支那の如き萬事不整頓不秩序なる國柄に於て如此手形の流通を見るに至るは洵に感服の外なし、手形流通の圓滑なること如此と雖も、亦此に伴ふ種々の弊害なきにあらず、即ち贋造不正の票子往々市場に入り込み轉輾又轉輾多くの手を經て初めて其の贋造なることを發見し、其の出所を知るに由なく、途に最終の人の損失に歸すること其の例少なからず、故に之を受取るときに於て若し疑はしきときは其の不正票子にあらざることを證明せしめ、又必要と認むるときは保證人を立てしむることを得るなり、北京には錢卓子たるものありて人の依頼に應し其の票子の眞僞を鑑定す、此錢卓子は處々に散在して互に氣脈を通じ、若し新たに銀行の設立等あるときは直ちに之を同業に通するを以て、如何なる票子と雖とも一目の下眞僞を判し百中誤まることなし、其の鑑は一大錢即ち我二錢に當る、若しも彼等より其の眞正なる證明を得んと欲せば其票子に捺印せしむることを得るなり、其錢卓子は大道の傍らに一卓子を搆へ弊帽汚衣眼玉キョロ〳〵人を見る樣簞竹と卦木なきまでにて全く我國の辻賣卜者と同し、北京には其の數二百人以上ありと云ふ、而て此信用深き錢卓子の人と爲りを聞くときは、實に惡むべき紙幣贋造者の張本なり、然れとも社會

の必要に迫まられて不得止政府も之を不問に付し去ると云ふ、支那政府が萬事萬物小害を捨て大利を取るの主義は此一例にても察知す可し。

北京に於ては銀行を設立するに當り手數料として最初銀五兩を政府に納め、且つ五人の保證人を要す、此保證人を稱して聯保と云ふ、蓋し相聯繫して責を負ふの意なり、然れとも實際銀行倒產等の非運に際しては有名無實空も保證人たるの責を盡さすと云ふ、銀行閉店の場合に三種の區別あり、德義の閉店、不德義の閉店、怨恨の閉店是れなり、德義の閉店とは店を閉つるの前預め營業を廢する旨を告白し自己の發行せる票子の引替を終り、毫も世間公衆に迷惑を懸けざるの謂にして、不德義の閉店とは之に反し突然營業を廢し公衆の迷惑を顧みさるの謂なり、怨恨の閉店とは兼て怨恨あるもの等其の銀行の店頭に立ち集り、營業の不始末を詰り或は不正の票子を持ち來り引替を要求する等公衆をして銀行の業務に不安心を抱かしめ、公衆をして一時に票子の引替を要求せしめ、遂に金融の必迫を來たし不得止閉店するに至らしむるものを謂ふ。

票子不渡りと爲り、或は銀行倒產等の爲めに損害を蒙むるも、被害者より政府に告訴するもの稀なり、斯かる場合には加害者に制裁を加ふ可き法律なきにあらざるも、賄賂公行の支那衙門の事なるを以て、其の得る所其失ふ所を補ふに足らされは大抵泪を呑んで泣寢入に終はると云ふ。

輓近廣東に造幣局の創立ありて銀貨一元(我一圓と同し)二毫(我二十錢に同じ)一毫(我十錢に同し)の數種を鑄造せり、其の流通する所は墨銀と同じく流通して深く信用あれとも、北方芝罘天津北京等に於ては恒に墨銀の下に從ひ二分乃至三分の低價に賣買せらる、是れ必竟輸入の日淺きを以て未だ信用を博する能はさるのみ、他故あるにあらさるなり、但我五錢十錢二十錢銀貨は貿易各港自由に流通を得さるなり。

金には葉金絲金條金標金の四種あり、葉金は其の厚薄大小等しからされとも大抵我紙店に販賣する所の金紙位に延べたるものなり、絲金も大小同しからされとも大抵我針金位の細さに延へたるものにして其長短亦等しからす、條金も大小長短各差あれとも先つ切斷して指輪と爲す可き程のものなり、以上の三種は多く遠路旅行の時携帶して多額の支拂ある毎に切斷使用す、標金は小さく海鼠形に延べ表面に天鑑若くは天豐等の文字及屋號を印記すること猶我舊幕の小判に檢印せしか如し、一箇大抵百七十五兩位のものなるを以て賣買取引に用ゆること稀なり、多

くは是れ富家筐中の物なり。

（附言予北方に足を駐むるか故に其の取調の事項北に詳かにして南に粗なることを免れす讀むもの其心せよ）

（中）天津發

層囘盛號、貿易、海關、貨幣の三事を說く、三者の一班、讀者既に悟得する所あるべし、自分將さに何をか說かん、久淵人に過ふ、遽爾口を開く能はす、蓋し意志蟠鬱話頭簇立、端緒自ら撰び難ければなり、予の支那に來る既に半歲、見る所のもの盡く奇聞くもの咸な新、新奇滿腔、亦猶久淵人に過ふかことく、自ら起筆に苦む、故に通信初號に於て讀者の自問を求む、而して未た一人の問に接せす、是れ讀者の支那に意なきか爲め乎、抑亦他に說ある乎、私書頻々、葮りに到る、皆曰く其の地の風俗如何と、觀其風俗而知國之隆否とは、古人既に之を云へり、風俗の事誠に鉅樞に屬す、然れとも予素と以へらく、此れ已に世人の熟知する所、復た說くを要せすと、故に之に及はす、然るに今一私書に答ふ亦頗る頻なり、因て茲に聊か其の一班を記し以て私答に代へ、併せて世間の未た知らさるものに告く

と云爾。

支那の國を建つる最も古、統を替ふる最も頻、故に其の沿革最も繁なり、彊土頗る大、氣候頗る異、故に其の風俗頗る雜なり、有數の紙卷に得て盡く記すへけんや、今只だ其の一班を舉くるのみ、予は是より其の最も能く知悉する所の旅宿の事より說き起す可し、

棧房

支那旅宿其の種類亦多し、曰く公館、曰く客棧、曰く客寓、曰く客店、曰く飯家、曰く店子等是なり、而して公館客棧は上等に屬し、客寓客店は中等に屬し、飯家店子は下等に屬す、予は天津に於て春元客棧に投す、春元は多く日本人の宿する所にして、他より清潔なりと稱す、往年伊藤大使到津の時櫻痴居士等も亦此に泊すと云ふ、春元今や大に改修增築を加へ、樓上樓下客房渾て六十餘號を有す、誠に當地の大館なり、其の家屋の構造は所謂瓦屋と稱するものにして、築くに煉瓦を以てし覆ふに甎瓦を以てす、其の煉其の甎共に脆窳試みに杖を擧げて之を擊ては倏ち碎けて粉と爲る、當地幸に地震の災なし、故に僅かに崩壞の憂を免かる、庭內盡く敷くに煉瓦を以てす、故に晴雨共に步行に便なり、宅の內外一の樹木を見す、又花卉を栽せす、故に風致幽

遂を尋ぬるの道なし、予の初め棧門に至るや、黎色裸體の豚尾五六群を成し出て迎へ、喧々囂々延て客房に入る、渠等は皆當棧の夥計(ボーイ)なり、房の廣さ凡そ八疊、寢臺四個あり左右に列す、台皆松板を以て製す、蓐褥を設けず、正面に卓子一個を備へ橙子(要掛)之に添ふ、窓上燭臺あり油之に滿つ、天井蜘蛛網を張り、卓上油蟲群を成し、地下塵埃鞋を埋む、然るに豚尾等は敢て灑かす敢て掃はす、直ちに開水(湯)を運び來たり卓上に置く、是に於て卓上は机と膳との職を兼ぬるを知る、開水は我國の水指の如きものに入る、之を茶壺と稱す、其量凡そ一升許、茶は客より錢を與ふるにあらされは持ち來らず、房中一種の臭氣あり、加之豚尾等は濫りに唾睡を吐き、肆に鼻液を垂る、鼻は皆手鼻なり、而して汚穢は渠等の衣服を浸して澤を生し、垢塵は渠等の身膚を被て積むこと分餘、爬剔成蹊、時會ま盛暑に屬す、炎蒸氤氳、予吐せんと欲すること數、豈能く開水を口にするを得んや、而して其の最も閉口するものは茅厠(雪隱)なり茅厠は煉瓦にて方穴を作り其の上に板を架し以て成す、其數凡六、其の之を劃する只た板一枚を以てするのみ、扉戸の蔽なし、豚尾は其の內に並踞し、吹烟吟誦恬如たり、豈又曷ぞ洗手水の備あらんや、但し婦人は房中に便器を具すと云ふ、上等旅宿すら尙如此、飯家店子等の如きに至ては寢臺の設なく、甚たしきは豚小屋に臥せしむることありと云ふ、髒穢の狀想ふ可し。

飮食は支那人快樂を求むる唯一のものたり、故に最も力を此に致す、凡そ山海の異味珍品探尋せざるはなし、料理法の如きも亦頗る妙を得る、食事は每日二回とす、即ち午前は十時、午後は五時、時到れは則ち先づ燒酒一瓶、湯(スープ)一碗、次は鳥肉、次は獸肉、次は魚肉、次は野菜、順次運び來る、盛々山盛、珍味滿卓、其器具皆大、湯碗の如きは以て水八合を入るへく、箸の長きは以て尺に當つへし、其他皆之に稱ふ、鹽梅亦得宜然れとも物皆脂肪を以て之を煮る、魚を煮る然り、菜を煮る亦然り、絕えて淡白輕味の物なし、又漬物を備へす、予之を厭ひ命じて黃瓜鮓を作らしむ、亦脂肪膩々玉を爲す、故に多く食す可からず、然れとも是れ唯た當分の事のみ、日又一日漸次脂を脂とせす、肪を肪とせざるに至る、獨り不潔の一點を忍び難たしとす、既に食し了る、乃ち開水を盆に盛り、以て臉を洗ひ口を嗽かしむ、每食後必ず然かす、午後の食品は午前に比し脂肪差や薄きと、酒質の異あるのみ、其の品數種類に至ては大差なし、凡そ早朝蓐を出つるや、點心即ち饅頭を喰し茶を飮むを例とす、其饅頭は豚肉若くは牛肉を心として之を製す、宛かも「パン」に「バター」を附して喰ふかことく、滋養に富み且つ頗る口に適す、此の點心は客の自便と爲す、然れとも二回の大碗既に腹に充つ、復爰

ぞ之を要せん、故に用ひさるもの多し、夫れ二度食の事たる、一は以て費用を減し、一は以て時間を省き、兼ねて又手數を去る、所謂一擧三得者也、我國の勤儉時を惜むの人、之を試みては如何、敢勸焉。

寢臺の設あるも、蒲團は之に供せず、又浴室の備なし、唯た感心なるは各房口に豚尾等の椅に憑り客の使命を待つこと是なり、渠等は最も温順に最も敏速に客の命を奉ず、既に蒲團なし、因て予は其携ふる所の毯子を以て之に當つ、軀頗る不快夢頗に結び難し、三更月落、青燈失明、宛然囹圄に繫かるの念あり、又息蟲(床虫)あり夜出て、人を螫す、其初め其毒を免るも、後ち遂に之に罹る、四肢瘍痒頗る苦しむ。

前陳の如く房中唯卓子、橙子、寢臺、燭臺、茶壺を具するのみ、其の他は一切客之れを自辨せざる可からず、是故に蒲團盥より以て火器便器に至るまで客皆之を携ふ、亟々、穢々、一客の旅具十夫荷擔するに至る、而して躬亦籠輿に坐す、是を以て客の來るや嘩囂雜鬧、其狀恰も我國の轉宅の有樣に似たり、短褐孤裘、革包一個、既に沐し既に浴し、鮮有一醉を取るの快、豈に得て望む可けんや、要之我國の旅行は快、支那の旅行は苦、諺に之あり曰く、在家千日好、出外一日難と、信なる哉、既に家財を提て往來す、豈盜難の憂なからんや、又危身の慮あり、故に出路十二則なるものあり、以て旅行者を戒しむ、今左に其の一二を摘載せん、亦以て支那人狡詐の情を見るべし。

出路十二則

一凡出外、收拾行李、如有銅錢錫鉛石硯一切重物、不可收入箱籠及包袱之內、倘付脚夫財挑載、疑是財帛、遂起歹心(歹心は悪心に同じ)不可不戒、如有此物、宜顯露外面爲是

一弔白打拐誑偏掣哄之輩、智過君子、狡詐莫測、或假粧鄉里講鄉談、稱有寄托、哄出我銀却將鉛石抵換、或用物件玩器執立衝衢、自謂客僕偷出主物不求高價惟求現貲、誘人僻巷哄買、及物價尊貴則拐子變衣帽、雖立面前不復認識、種々說許、惟老成守己不貪者萬能不入被奸套

一外出爲客、務宜撲素、若到口岸肆店服飾整飾、小人心生窺覬、潛諸劫盜、有性命之憂、如孩童年小、父輿抱垂愛、以金銀爲之冠帽手鐲項圈耳墜之類、小人利其財物、或毀骸體折肢採取、或連孩童抱去、謀殺之端由此

右は決して空則にあらざるなり、予の友曾て時計を房中に置き茅厠に進む、歸り來れば乃ち亡し矣、又銀塊を皮箱中に藏するものあり、速日開かず、將さに機房を出てんとす、箱底刀痕の跡あり、發て其の中を檢するに銀塊已でに

滅す矣若夫れ拐子變衣の事のごときは予の屢耳にする所、連章抱去の事のごときは予の屢目にする所なり、戒しむべき哉、恐るべき哉、凡そ宿屋には客棧、郡棧の別あり、客棧は普通旅人の宿所にして、郡棧なるものは地方問屋商人の定宿なり、此の郡棧頗る嚴正にして、財物の危險最も尠なし、若し人を派して物品の買買を爲さんとするときは左の約束を結ぶと云ふ。

一、若し被遣者にして不正の業を働らき又は逃亡するが如きことあれば主人は被遣者の家族を無給にて役使すべし。

一、被遣者は旅行中は被遣者の月給を其家庭に渡し、事あるに於ては主人より充分の保護を加ふ可し。

一、被遣者の歸京せしときは先づ行李の驗査を乞ひたる上にあらざれば其家に歸へるを許さず。

全體支那人は商業上に於ては、最も信用を重するの風あり。

(下) 上海發

撲てば則ち滅し舍けは則ち燃ゆ、是れ豈に支那土冦の謂にあらずや、匪類醜徒、西に散して東に起る、北に絕て南に崩す、崩絕起散恒に輟む時なし、爰に又韶州に亂逆を企圖するものあり、韶州は廣東省の曲江縣に在り、逆首は先の紅匪陳金剛の義子なり、其の旅幟皆、爲父復仇の文字を竪す、之を援助するものは則ち湖南の游勇なり、游勇土匪苗族之を合すれば方某にして、之に應從するものは則ち湖南の巳革軍大佐其の衆萬人に登るへし、初め官兵の往て之を討するや、士卒百有餘人忽ち匪徒の殺害する所と爲る、是に於て廣府の各營相協書大兵を擧けて之を剿滅せんとす、陳匪の旅幟已に鮮明を欠き、名分亦正確ならず、且つ韶州の地勢たるモト兵を擧くるの所にあらず、願ふに其の戮滅に就くの日蓋し遠からざるべし、予の初めて之れを聞く去年十一月上旬に在り、而して今又此の報に接す、瑣々たる一小匪類之を討燼する已に九旬を踰ゆ、其の悠暢駘くに勝へたり、支那に在ては是れ一草賊、日本に在ては實に大叛逆、事体の殊隔往々此くの如き者あり、支那の事到底日本人の心眼を以て忖度すへからさるなり、斯の土匪固より以て中國を撼搖するに足らざるも夫の巳革暨苗族は將來國家を攪擾するものなり、故に今序てに其性質を摅申す可し。

己革及游勇之事

己革とは將官の解職せられたるものを謂ひ、游勇とは兵卒の解放せられたるもの

を謂ふ、凡そ土匪逆徒の起るや、輒ち土民を募集して常備軍を補添し以て之を彈壓す、逆平き匪散するの後直ちに之を解放す、常備軍に於ても、老朽不勝用ものは之を免除し、暴戻難御のものは之を剪去す、此等の己革、此等の游勇、出てゝ職を得るの途なし、是に於てか或は深山に潜龍し出でゝ行旅を襲掠し、或は富豪を恐嚇して財資を奪略す、亂虐放恣抵らざる所なし、意氣凶々、逆心滿腔、詭計百方愚民を煽動し、蜚語濫出官吏を迷惶し、唯た平和を壞擾し國家を紊亂せんことを之れ務む是れ故に一旦事起るや、廼ち雲合霧集相爭ふて之に投ず、淸朝の蛇蝎視する所の哥老會、日に淸力を蓄養する所以のもの、必竟此の徒の歸合するあるに由る、政府今や較や覺寤する所あり、旅費を給し歸鄕の法を發せり、然れども渠等の驕傲悍狠なる何を以てか克く堀土耕耘に安せんや、吁政府已に其の患害たることを知つて、而して之を芟除するの道を知らず、可慨哉。

苗族の事

苗族とは昔舜の遠竄したる三苗の胤裔にして、今尙貴州廣西四川雲南の四省に散在す、其胤族凡そ六種あり、總數三千萬人に下らずと云ふ、性質慓悍、言語侏儒導くに禮樂を以てすべからず、制するに典型を以てすべからず赤脚善く躐り、長手善く攫む、斷崖に栖み、窮谷に息す、屢出てゝ良民を害し行人を苦しむ故に旅人は財寶を割與し僅かに通行するを得、政府も化外の民として、其酋長を以て土司に充て、以て之を羈御せしむ、固より政令行はれざれば、租稅を納む等の事なし、部內一種の自治體を爲せり、然れども又含忍事に勝ゆるの性を有す、故に儘し之を御するに方を以てし、之を誘ふに利を以てするときは、以て馳驅の用を爲さしむるに足る、是亦淸朝の猛毒なり、六種の中耕織に從事するものあり、伐木を業とするものあり、殊に西藏境邊に栖息するものに至ては、婦人を崇尊して上坐に置き、衣裝は窄袖洋服に類似する等、風俗習慣歐米に彷彿する所多し、顧ふに或は以て感化誘導大に使用す可き所ある乎、玆に日本人三名手を分ち之れが探檢を料らんとするものあり、予は其の遣に之を果行せんことを祈る。

哥老會之事

哥老會なるものは、長髮賊の餘黨之れが根底と爲り、官吏の試驗に志を得ざる者之に合從し、己革游勇の徒之に投隨す、不逞の集合、鳥合の淵藪、一見爲すなきが如しと雖ども、其實決して然らず、盟誓嚴密、規約堅牢其の會員日に增加し多く湖南湖北貴州雲南中に瀰蔓す、官吏あり、醫者あり、卜者あり、農あり、工あり、地殊に人多く、驟かに

會員たるを認識し難たし、故に其の會するや必ず先つ暗號を以て之を試む、氣脉相通じ、連絡相結び、善く秘密を守り、巧に法網を免る、以て機の熟し時の臻るを竢てり、清朝の之を怖るゝこと虎豹の如く、之を忌むこと蛇蝎の如く、汲々として之れが芟除を謀る、故に苟も其の會員たるの證憑を得るか若くは疑似のものあれば則ち直ちに斯に處するの特法を設けり、清朝如此之を嚴査すと雖も、之れを捕捉すること甚だ罕なり、先年張之洞の手に捕へられ十人の戮に就きたるを聞くのみ、予の見る所を以てすれば今日警察の不完全なる、到底之を査究すること能はざるべし、初め洪秀全の兵を擧ぐる僅かに二百人に滿たす、予は恒に恐る禍機一發せば其の及ぶ所言ふ可からざるものあらんことを、危矣哉危矣哉、世人動もすれば、哥老會恐るゝに足らずと云ふものあり、是れ未だ其の眞相を知らざるの言なり。其の實情豈容易に窺ふべけんや、世人請ふ濫りに言を立つること勿れ。

到清の變遷

近來支那に來るの人亦云に其れ擾擾たり、其の人物歳を逐ひ時に隨つて殊差あり、今之を剖判して三段と爲すを得べし、初め臻るの人僉な忠誠憂國倜儻卓識の士なり、之れに次て踵るものを麤放無賴淺見寡聞の徒と爲す、現今に至ては則ち小心窄

胸委瑣齷齪の倫のみ、唯其れ忠誠卓識、故に克く巉嶽を越へ、滮河を涉り、瘴癘之毒、虎豹之害、惕るゝ所なく、詘する所なく、千難を排し、萬艱を忍び、胼胝兀兀、遑遑娓々、黷を喰ひ、穢を履み、焦心爛軀、目の及ばざる所を觀、耳の達せざるを聽き、上は政教人情より下は風俗習慣の微に至るまで、其の綱を揚げ、其の端を提げ、以て世人を誘導し、以て後者を鼓盪せり、其の辛勞、其の功德共に堙滅すべからざるものあり。

夫れ麤放なる者は心純ならず、寡聞なるものは慮遠からず、不純の心を以て物を見る、其の見必らず深からず、不遠の慮を以て事を撥る、其撥必らず審かならず、撥て審かならず、見て深からず、而して事物の成就を欲し、世人の感動を望む、抑亦難矣哉、是故に事を企てば則ち敗れ、人に謀れば則ち應せず、事與心違、思與時乖、悲憤漏す所なく、憂悄愬る所なし、是れに於てか大言放語、空談虛論、盛んに東洋の大勢を說き、肆まに對清の議を籌り、濫りに東方策士を以て自任す、此徒の心事最爲可憫。

若夫れ小心齷齪の倫に至ては固より、胸に經綸の雄圖なく、心に起案の畫策なく、又焉んぞ山川を跋涉するの勇氣あらむや、局局として一部を搜索し、促促として巷俗を繹尋す、一奇を得れば則ち嬉び、謂へらく吾能く事情に通ずと、或は茶園に藝を賞し、或は酒樓に妓を品す、試に其の目的を問へば則ち曰く商店を開くに在りと、其資

本を質せば則ち曰く未だ定まらずと、茫乎として風を撃つが如く、漠乎として雲を攫むに似たり、就て之れを驗するに僅かに清語の獨習、地圖の點檢に過ぎず、必竟此輩一會社の社員と爲り、一商店の小僧たるを得ば則ち止まんのみ、嗟乎蕃籬之鷦鷯曷以料鳳凰之心、溝澮之蝘蜓豈能知龜龍之志哉、已矣哉。

研究所卒業生の薄運

日清貿易研究所創肇の眞意吾能く搜鑒して之れを知る矣、其眞意の淑匿は暫らく之を措て問はず、獨り夫の父兄を欺瞞して生徒を誘拐したるの辟決して逭るべからざるなり、就學纔に六月倏ち數多の退校生を釀出したるの責決して免るへからさるなり、濟々たる壯年をして蹩蹇不具の人たらしめたるの咎決して避くへからさるなり然れとも是れ亦既往に屬す、今痛く之を難するも益なし而して是れ皆創肇者の辟なり、監督者の責なり、教授者の咎なり、生徒曷をか知らん、子弟胡ぞ與からん固より螢火雪燈の辛、圓枕繩首の苦驟かに之を生徒に許すへからずと雖も、千里笈を負ふて異境を踐み、白金十三枚毎月投して懈らす、裘葛三たび易て渝ることなきの點に至ては、誠に察す可きもの存す矣、亟々たる八十有餘の卒業生今如何、出て商會に從事せんと欲すれは即ち財本未た備はらず、自ら奮て商業を營まんと欲すれは則ち資力未た足らず、國に歸へらむ乎、父兄に對するの面目なく、祿を干めん乎、蹩蹇の躬を如何せん、進んては技術を施すに道なく、退ては躬を安んするに所なし、進退維谷、出處共窒、是に於て乎、累々として喪家の狗の如く、悄々として乳後の羊の如く日に夫の瀛華廣懋館に出入せり、廣懋館なるものは研究所附屬の商品陳所なり名けて廣懋館と曰ふと雖も、規模廣郭なるにあらさるなり、業懋盛大なるにあらさるなり、區々たる一小屋のみ、微々たる雜貨店のみ、商品盡く定價を附す、更に直段昂卑の駈引を要せず、一の小僧をして之を守らしめは則ち足れり何ぞ必すしも擾々たる有髯男兒の牛を借るを須ゐん、其の收益たる亦未だ守者を潤澤するに足らず、故に生徒等は皆各々自費を擲て之れに當れり、嗟乎數百の大金を糜消し、三年の星霜を經過し、尚未だ一金を得る能はず、一業を執る能はず、自囊を絞て僅かに雜貨店の小僧たるを得、豈可憫之至ならずや、世間不幸薄運の者亦多し、未だ聞かず斯くの如き酷たしきものあるを、而して生等は少齡輕年の書生にあらず、皆既に三十年前後の老措大なり、妻子ある者亦鮮からず、予出でゝ之に接する毎に未だ曾て愁憐の情を催さずんばあらず、嗟乎世の義人君子、希くは其の財帛を裂き以て渠等の志を成さしめよ、是れ翹に生徒等の幸福のみならず、則亦國家の慶事なり聞くか如く

んば、明治二十三年九月九日百二十名の生徒と二十名の職員と一同虹口碼頭に上るや、白衣同式隊伍整々、威儀正だしく歩武亂さず、凛々堂々として研究所に進到せしの時、允盛允壯、碧眼足を駐めて其の威風を稱し豚尾駭て曰く東洋之兵士矣と、噫何んぞ前に盛壯にして後に栢落なる、聞くもの誰れか其れ感慨せさらんや、此の事脫し我邦内に於てせば則ち已む、苟も外國に於て之れあり、豈我國面に關係なしと云ふ可けんや、故に予は又政府に望む、其の與に救濟の策を贊襄し以て當初の盛時に復せしめんことを翹んや政府も亦創肇の當時多少の關連あるに於てをや。

内地旅行者の艱苦

凡そ間關困苦の甚たしき、天下亦未た支那内地の旅行に如くものあらす、道塗の崎嶇にして多岐なる、人心の兇悍にして多疑なる、食物は粗惡にして腸を蠹し、逆旅は髒穢にして便を虧く、其の不便、其危險、蓋し世人の想ひ及はさる所の者あり、都て内地の旅舍は唯た房室を貸與するを以て業と爲す、飲食を供給せす、寢衣を具備せす、故に客たるものは毎食出てゝ飯店に就き、吃吸せさるへからす、其の食物たる此地に至ては絶えて米肉を得へからす、大抵麺類を以て上食と爲す麺類猶得へからさる所あり、即ち豆腐と生葱之れか代用を爲す、二者は實に是れ都門燕窩の滋味なり、甚だしきに至ては僅かに菜根を咬み得て生命を繋くことあり、床中多くは寢蓐を設けす、又蓆席を敷かす、土地に輾臥せさるへからす、累々盤々蚤犬と何んそ擇はん、卑猥尚忍ふ可くも、彼に盜物奪品の虞あるの方なし、乃ち菜種の花を喰ひ砂糖黍を咬む、衣薄塞列夜眠る能はす、妻寢夜行、如此するもの凡そ二ヶ月、初めて一市を得る、迺ち衣を携へ質屋の門に至る忽ち草賊の奪ふ所と爲る、困厄も亦甚しからすや、宗方某なるものあり、旅行數年衣服朽敗身を蔽はす、而して改作の道なし、乃ち裸體して行くこと凡そ十有四日、一日往て砲臺を過く、入て之を捡せんと欲す、前門守備嚴にして近くべからす、廻て其の背に出て壁を越て入る、捡し了て將に出てんとす忽ち邏卒の知る所となる、誰何劒を拔て懸

せ來る、宗方大に駭き壁を飛んで出つ、邏卒又出て左右より之に蹙まる、宗方電馳前丘に登る、邏卒又た逐ふ益急なり、一丘盡きて二丘に移る、尙急なり、三丘に至り初めて止むと云ふ、豈危險ならずや、宗方元來健脚の兒、一日能く二十里を踐む、故に此の危難を免るを得たり、如し凡脛康足の人なりせば、難矣哉邏劒に覺られさること、其の他迷て道を失ひ三日絶食したるか如き、嫌疑を受けて營所に繫かれたるが如き、盡く枚擧するに遑あらざるなり、夫の傑閣嵩宇の下に安坐し、卓上時事を談するの徒を聞かは其の感果して如何。

奇士の出發

奇士あり安南に趣く、姓は金子名は新、新潟刈羽の人、正月三日上海を發す、口に小笛を啣み、肩に餅器を携ひ、藥餌包て兩手に在り、曰く或は追て煎餅を燒き、或は出て吹笛之を鬻く、又葯を和して旅囊を肥やし、以て行き以て察すと、顧ふに安南に抵るの期盖本年秋冬の交乎、送別の莚予往て之に臨む、黎の羹蕪の膾、腌を餔ひ釀を歠る、會する者結髮若くは蓬頭、紋表を着け短袴を穿つ、悲歌慷慨、壯釦激越、悽々たり、愴々たり、人をして倏ち易水寒の念を興さしむ嗟乎夫の元々の膏血を絞て行裸に灑き、送るもの萬人、醇醴湛へて池の如く、肥鮮積んて林の如く、妓歌聲暖絃鼓響緩の類に比すれは其の差如何そや、予之を城列に送り且告げて曰く近來志士陸行安南に趨くもの少なからず、然れとも未た曾て一片の消息に接せず世人最も憾む、希くは子宜しく自愛以て速に消息を傳ふべしと、奇士聞て笑て曰く生死有命成敗不可逆期君請ふ復た道ふこと勿れと顧みすして去る。

支那實見錄 終

暹羅東海巡遊記

（此一篇は明治三十二年九月發行東京毎日新聞第八千六百七十、五號より連載したる者なり）

暹羅の國人之を稱して南天樂土と云ふ、蓋其土地膏腴物產殷富なるが爲めなり、其有之の地は府にあらずして市に在り、市にあらずして町に在り町にあらずして村にあらすして村にあり、予の磐谷府に棲店する干茲六年、其間其地に到り遊はんと欲するの念、一日も輟むことなし、亦久しからすと云ふへからす、而して陸行には虎豹の害あり、水行には昏颶之患あり、是に於て乎隊伍を編成せさるへからす軍器を提携せさるへからす、軍器は兎め易すく隊伍は編み難し、是れ予が永く志を獲さる所以なり今春高垣尚志君來る、君と蠻醪を傾くる毎に、未た曾て談斯事に及はすんはあらす、遂ち同行を約す、其初め約す所の通路は、先づ東海の諸島各港を巡視し、更に進んで佛領カンボチヤに入り、メコン河を溯り、暫く船をトンレー湖上に泛べ、而

して徒歩コラットを衝き、西行メナン河を下り、以て磐谷府に歸るに在り、時會ま霖雨の季候に屬し、又西南の期風に遭ふ、海面波濤澎湃地上雨水氾濫、水土共に屯邅、加之同行者中病に罹るものあり、遂に又宿志を達すること能はず、裁かにチャンタブーンに造り得て還る、寔に千秋之恨事也、然れども其間四十五の日子を消費す、亦必らずしも記すべきものなしとせず、唯夫れ久しく斯土に住するの身、人の見て以て奇異となす所のもの、予則ち或は以て奇異となさず、人の聞て以て珍新となす所のもの、予則ち或は以て珍新となさず、矧んや予今牙籌を把るの人商業上の機訣、亦漏洩すべからざるものあり、故に其筆端頗窘蹙行文頗粗笨、只だ恐る讀者をして懽愉せしむること能はざるを、

○六月二日　正午纜を解く、歐人マクリインの小火輪船なり、客室の最僅に七人を容るべく、雜居の殿、亦五十人を踰ゆ可らず、石炭を須ゐずして薪材を燒く、火力孔だ弱、進行頗る漫なり、メナン河兩岸の細橙翁翠滴らんと欲するも、以て我目を娛ましむるに足らず、河水の溷濁滾々たる、又厭悶の情を起さしむ、バクナム砲臺を過ぐる頃冷氣微しく體に感じ、海氣少しく鼻を撲つ河口全く出て、濁水全く去るや、海風颯々として、衣を吹き、穩波灑々として船を打つ、夐かに南方を望めば烟波漂渺水天一色、茫として際涯なく、鷗鴨浪に游んで悠々たり、東方を眺むれば正面にパンプラソーイ山峨々として雲表に聳へ、右方に當てはコシチャン群馬翠色を含んで點在し、歸帆風を孕らんで其間を走る、日西山に舂き萬山霞を帶ふるの頃、海風少しく加て冷氣稍やく多きを覺ふ久しく躬を磐谷に蒸焦したるもの、豈神心爽快殆んど蘇生の思なからんや、波浪高からすと雖も火船の狹少なる多少の動搖を免れす、船客咸醉臥す其船のパンプラソーイに着せしは方に其夜の八時也同行皆疲憊の色あり乃ち船中に偃す、其船銀最三圓殿九十錢也、

此日晝晴夜雨、翌日黎明船を出て棧橋を登り、其乘船待合所に休す、其下火船碇泊す、當時附近一帶の海濱は渾て遠淺なり、故に着船の地より其市に臻るの間、棧橋を設く、其構造頗る簡麤、海中小木を樹て之に小板を架す、絕へて打釘の緊なし其頭を踐めば其尾擧り、其尾を踏めば其頭颺り、其中を履めば頭尾共に鶻る、宛然常山之蛇のことし、其長サ五丁余、初め到るの外人擧な困しむ、土人の男女暗宵犇せ行て平如たり、

○パンプラソーイ市　當地は磐谷附近に於ける一大市なり、人口八千人を有す、一直線の市街ありて、支那人多く爰に雜貨を販賣す、重なる物產を乾魚と爲す、

其種類に三種あり曰くプラヅー曰くプラクレー是なり、プラッーは其形我國の小鯛の如く、其長サ五寸許り、其余の二種はサワラの子の如く、其長サ五寸位、就中プラヅーは味美にして最も多く之を輸出す、其季節は十一十二の兩月にして、魚栅を設けて之を捕獲す、之を干魚と爲し、以て外國に輸出す、此季節には大抵六千噸以上を獲へし、其漁魚を爲さんと欲せば、漁業受負人に稅金を拂ひ、免許を受けざるべからず、其稅率は一割以上なり、又當地は有名なる魚醬の產地なり、魚醬とは鰕と胡椒と海草と鹽とを混合して製造したるものにて、土人支那人、印度人擯ら之を使用す、土人之を呼んでナムパラと曰ふ、多少の臭氣を免れずと雖も、魚豚欠乏の時菜根を烹煮せば、則ち以て美味を得べし、又マイタケヤンを以て作る所の造船所あり規摸甚小、支那人兀々として之に當れり、是れ單に內地の需用に供するのみ、マイタケヤンと稱する樹はサタヒープ並にバンプラの名產也、此地亦有之と云ふ、斯樹はチーキ材と肩を比すべき巨大の珍樹なり、其性質、其効用、其價直に至ては、サタヒープの部に於て詳細に說明すべし、此外の物產は沈香象牙等なり。

○バンプラソーイ市スン寺　聞く此地方カーオと額する寺院あり、スンと稱す、僧住すと、是れ予が疇昔の遐語敎師なり、就て斯地の風情を聞かんと、往て之を訪ふ、寺院は市を去ること一里餘の山麓に在り、往て其市街を離るゝや、直ちに林中に入る、林中細樹茂り、荊棘叢る、叢茂之下小徑あり、砂泥足を沒す、杖を振ひ荊棘を排して步す、林中多岐人每に問ふ、岐路愈多くして行人絕ゆ、茫然佇立すること久し、倏ち鷄犬の聲を聞く、乃ち其方向を指して行く、稍やく一家を得たり、裸體の老嫗あり、謦々として草を刈る、予等の來るを知らざるものゝことし、禮して寺院の在る所を問ふ、指示甚簡、刈草依然たり、因て同行を請ふ、老嫗問ふに報酬の多寡を以てす、予一銖(我國六十錢)を與ふべしと答ふ、是に於て老嫗初めて莞爾として笑ひ、先づ掌を開て銀子を握り、稍やく腰を擡はし、徐々として足を運ぶ、而して鎌は猶其手に在り、行くこと甚かに三町にして達す、其貪慾にして朴野の風なきこと大抵皆如此、寺院に就てスン僧を訪ふ、已に去てナークルアに在り、乃ち水を匈て一嚼海濱に出づ、水牛の大車巨樹を積み憧々として往來す、市街の極まる所に陣營あり、海兵爰に屯す、而して海には圖艦を浮へず、市に出て酒を沽ふ、磐谷より昂きこと三割、當地ホテルなく又知己なし、卽ち又乘船待合所に還て宿す、此日晝晴夜雨。

○六月四日　午後一時漁船の便あり乃ち之を借りアンセンに到る、風順にして船銳、疾馳如矢、纔に一時餘にして達す、其船銀三圓也、是より先きバンプラソーイ

に於て遐人の知己を得、添書を需めて往く、故に直ちに宿所を得たり、亦土人の寓居也、傳へ稱す、此地往古アンと名くる巨人あり、其足跡今尚石に印す故にアンヒン(ヒンは遐語の石なり)と云ふ又曰くアンヒンとは遐語岩地を意味す、當地岩石多し、故に此名ありと、二者何れか眞、何れか僞、予之を知らずと雖とも、其海岸の一局部に岩石の累々たるは、殊實なり、其餘は皆砂地にして、酷た酷、酷た寒、曠原漠野千里一望の磐谷を出でゝ、此岩石を見る、已に快なり、況んや又白砂綠樹、波浪靜穩、憩ふに樹亭あり、宿するに瓦舘あり、山に採て美茄ふべく、水に釣て鮮食ふべし、歐人此地を賛して磐谷のブライトンと云ふ宜矣哉。

予此海に浴する毎に、未だ曾て身遐羅に在るを覺へず、人をして恍惚、我大磯に游ぶの思あらしむ近來遐羅に來るの人亦多し、或は其穢黷を厭ひ、或は其炎熾を怖れ、或は其荒景に飽き、一朝歸國復た之を顧みざるもの往々有之、此等の人をして一度足を此地に入らしめん乎、則ち必ず泄々然として土着之念を起すべし磐谷之地、今少しく我國人の增加せるあらは、予は即ち茲に避暑倶樂部を設立せんと欲す。

十一、十二、一の三ヶ月是れ即ち東北季風の期節なり、外國の船舶皆此地に碇泊す、載ち茲に稅關を開設して其出入を檢す、其季風の終るや、直ちに關をコシチャンに移

す。

當地はバンブラソーイに次くの一小村にして、居人半は漁魚に從事し、半は農圃に從事す、山海之物恒に求め得べし、就中ホイマンブーと稱する貝は、當地有名の物產なり、予の到る方に其時機に際す、其殼薄く其色青く、其形隋圓にして長サ四五寸、巾之に稱ふ、其中身は赤色にして殆んと我深川の馬鹿に髣髴たり、其捕獲の方法は海中に夥多の小木を樹て、貝の附着を俟ち、之を採る、其貝の樹に附着するの數甚た盛なり、恰も海ホーヅキの如く、又葡萄の房の如く、其木の水中に浸漬したる部分に隙地なく、累々積々相競ひ相爭ふて附着す、其木を樹つるの地亦多し、故に每日捕獲に從ふ、其採りたる貝を大釜の中に投じ、烹煮して其身を剝き、以て他邦に輸出す、其身を剝く者は職として、婦人なり、夫は外に出で貝を採り、婦は內に居て貝を剝く、內外克く勤む、漁歌唄咿之聲相應じて晝夜絕ゆるの時なし、而して其局に當るものは皐な支那人並に其妻たる遐羅婦人なり當地に製造所五ヶ所あり一ヶ所に三十人以上、婦人を有す、土人の婦女は多く果物を鬻き、又織機を操る、其機頗備其操頗漫、一日歩みてバンブラソーイに至る、或は大樹之下を徹行し、或は荊棘の中を潛行す、或は畦畔を蹈み、或は泥水を涉る田畝は大半砂地なり、目下雨水稀寡、全部殆んと荒蕪に

屬す、砂地豊良穀を得べけんや、到る處路傍に榭亭あり、旅人の休息に供す、故に備し
原野田畝道を失したるときは、此榭亭を目して行くへし必らず正路に就くを得ん、
其行人を稗便するや大なりと謂つへし、予は輒ち之に額して指南亭と云ふ、三時間
にしてバンブラソーイに達す、酒菓を購ひ、火輪船を俯ふてアンヒンに歸る、此火船
は磐谷バンブラソーイ間を往來する定期航海船なり客物已に搭載し了り將に拔
錨せんとするとき、予往てアンヒンに航せんことを談す、船長依々應せず予乃ち之
にピールを與ふ、即ち諾して纜を解く、而して乘客一人の異議を唱ふるものなし、嗚
呼、是れ野蠻國にして爲し得べくして、文明國に於て爲し得べからざるの事なり、苟
も斯土に來る外人にして、此等の眞味を解し得ば、則可以共語也矣、其アンヒンに着
せしは已に日暮點燈之後也、歸途細雨漂々征衣を濕ふす、此海濱又遠淺なり、甚だし
きに至ては干潮二十丁餘に及ぶことあり、當時午前七時より退潮、午後三時より滿
潮、此地並にバンブラソーイの家屋は總て木造にして樹葉を以て之を葺けり、其結
構は支那風に近し、人種は支遏雜種人多し、衣服は細黑縞物を須ゐ、一般の遏人の如
き大赤縞物を好ます。
當地より船行を期す、而て其船頗る得難く、日又一日、徂苒延て滯在七日の久しきに

逮ぶ、其間海に浴し、水に釣り、山に獵するの外亦他の念なし悠々又閑々、猶太古之民
のごとし、體軀頓に剛強を加ふ、磨礪せし日子の天候を示せば、四日晝晴夜雨、五日晝
晴夜雨、六日晝晴夜雨、七日晝晴夜雨、八日晝半晴半雨夜雨、九日晝晴曇夜、十日晝晴夜
雨。

○六月十一日　拂曉アンヒンを抜錨す、此船支那人の所有に屬す、一ケ月六十
圓を以て傭ふ、久しくアンヒンに淹滯の身一朝海中に漂泛す、心廣く體綏かなるを
覺ゆ、風順波靜午後一時バンブラに着す、時會ま干潮に際す、投錨の所より陸地に至
るの間、衣を標げて涉る、其間十丁餘、當地も亦アンヒンに次ぐの　小漁村なり、載ち
漁村なりと曰ふと雖も、當時捕魚の期節にあらず、漁夫皆晏然として晝寢ね、一尾の
鮮魚をも得べからず、唯だ晩景小兒等の蟹を捕ふるを見のみ、其蟹大其味美、其市街
の規模アンヒンの半に過ぎず、人口亦然り、然れども豚魚菓物は常に求むることを
得べし、水亦好し、此町を走り、內地に進むこと半里溫泉あり、其度最く飮むべし、浴す
べからず、此地海兵の屯所あり、人員僅に二十人、而して海に一隻の戰艦を繫かす、亦
唯海兵の晝寢所に過ぎず。
此日營所の內外盛んに象旗を飜へし、燈を釣り、土人麕集甚喧囂、之を問へば卽ち曰

く、國王の來て兵を閲するなりと、夜に入るや陣中篝火を擧く煌々天を焦かす、前面にはコシチャン碇泊の遲羅軍艦亦點燈、海上の弦月潮と共に生す瀰々隨波千萬里、如此の風光、豈一單の飲なかるべけんや、螢酣一場を倒して臥す、此日國王來らず、翌日又來らず、越へて翌十三日上午十點鐘、軍艦五艘來る、國王の乘艦なり、其艦の着するや兵士擧けて棧橋に整列す、銃劒を提くるもの十六人、劒ありて銃なく、銃ありて劒なきもの四人、蓋平日の不注意不規律なる、遂に以て今日軍器の欠乏を來たせしなり、軍艦より小艇を卸して來るもの以上三隻、第一第二の小艇棧橋に着するや、二十人の兵士相爭ひ物品を拉して軍營に走る、顧ふに是れ必らず本國の寶物國王の愛器或は軍機ならんと、予は時に望遠鏡を出して之を視て憮然たり、軍機にあらず、愛器にあらず、又寶物にあらず、ラムネ也、ソーダウォータ也、氷也、ウイスキ也、ブランデー也、クラレット也、此等飲料の運搬の終るや、國王陸乎として橋頭に顯はる、其橋頭に顯はるゝや、飲料運搬の兵士等戞愕馳せて之を迎ふ、或は單身馳せ行くものあり、或は隊を組んで馳するものあり、參々伍々相走り相突く、銃を手にするものあり、劒を肩にするものあり、周章狼狽の體、人をして覺へず噴飯せしむ、其兵士の相集まるや、國王已に來て橋上の中央に在り、國王は紫色の腰卷に白色のコートを穿ち、茶

色中折の羅紗帽子を戴き、杖を揮りつゝ、王女一人王男一人を伴ひ、ビヤスリ侯の先導にて姿々然侯と談し且歩す、其棧橋を渉り終るや、右方の茅屋に僧侶三十名相並んで讀經す、國王之を見て脫帽一禮低頭一語して過ぐ、國王の過ぐるや僧侶直に讀經を止む、輕備なる其服裝、漂淡なる其擧動は、文明國の王としては或は可ならん、然れども人民を奴隷とする未開國の王としては、予未だ其可を知らず、未開國の王には神嚴不可犯の風采を要す、當端不可侮の擧動を要す、當輔弼任者宜深考焉、此等の事予の飽見厭聞する所、敢て以て奇異と爲さず、又此行必要の紀事にあらざれども未だ遲羅の事情を知らざる人の爲めに一筆を馳せ參考の一端に供す。

此地亦マイタクヤン樹の產地なり、支那人以て船を作れり、遲人之を稱してアペットと云ふ、頗堅牢なり、之を造くるに一本の鐵釘を用ゐず、紫檀の材を以て之に充つ、磐谷附近に散在するルアペットは多く此地の製造に係ると云ふ。

此夜纜を解く、忽ち船中聲あり、板を執て之を見る板下海水濁潤たり、慾き檢すれば船底毀傷せり蓋前夜の激浪砂石を混じて之を打擊したるが爲めなり、乃ち又濱に還して碇泊す、是に於て乎又備船の難起る、聞く此地離宮建築の擧あり、國王の來て兵を閲せしも亦此れが爲めなりと、遠淺にして島なく、風光甚麗らす、知らず何の便

何の要何の妙ありて斯擧あるを、此地に滯止すること五日其天候を示せば十一日晝晴夜雨、十二日晝晴夜雨、十三日晝晴夜雨、十四日晝晴夜雨、十五日晝晴夜雨。

○六月六日　夜バンブラを發す、此船一ヶ月七十二圓也、一時間餘にしてシーラチャーに碇泊す、其間僅かに三哩當地モト寒村先年前農商務大臣ビヤ、スラサクヂ、モントリ侯別墅を爰に置きし以來、稍や人烟を增せり、今侯伐木に從事す、其業の旺盛は以て當地の繁榮を來たすべし、其山林は欝々たり、蒼々たり、前はコシチャン島に對して、灣內水深く大船を繫ぐべし、其棧橋を離るゝこと僅に四町、一小島あり、綠樹蔚々たり、自煙の尖塔其顚上に兀突す、綠白相映じて已に佳趣あり、岩々たる小島其右側に欹つ、葱樹隙地より出て其上を蒙籠す、又奇景なり、シーラチャーの風光全く此二島より成る、聞くが如くんば、モントリ侯此岩島を包籠してホテルを建設するの擧ありと、尙之れに加へてバンブラの溫浴泉を玆に引かば、則ち遊人客麕集して遂に亦天下の勝地名區たるを得べし、又何んぞバンブラの離宮の迨ぶ所ならんや。

○六月十七日　黎明拔錨コシチャン島に至る、其間僅に六哩、此島自二月至十月、西南季風の間船舶の碇泊して、荷役を爲す所なり、此時稅關アンヒンより來る、季風の過くるや、直ちにアンヒンに移す、此島の居民寡少、船舶の出入に依て衣食す、酒舖他島より優る所あり、此島曾て離宮を建設す、故に道路廣牟棧橋堅美然れども國王は唯た一たび來りたるのみ其後絕えて之を顧みず、是を以て宮殿今や半は崩頹、葛藟之を纏ひ、蒼鼠古瓦に竄くる、予酒を携へて爰に飮む、轉た今昔の感に勝へず、此地亦樹木蓊蒼、山頭に旗亭あり、以て船舶の出入を報ず、試みに登瞰すればコシチャン群島睫下に集まり、コバイコラーン、コグラムの諸島、指呼の間に在り、大陸の巒峰波濤の如く、奔走東に朝するに似たり、風光壯快景色佳好踞座一時間餘にして降る、先年柘木の日本に到りしは盡く此地の產也、今や伐り罄くして一木を殘さず、鷄得べく豚得べく魚得べし、野菜物と飮料水とは他より仰がざるべからず、是れ斯島の欠典なり、十六日晝晴夜曇十七日晝晴夜晴。

○六月十八日　午後二時レムクラバンに向ふ、風緩かにして、船行頗る漫なり、薄暮冥々之時着す、曾て聞くレムとは海角の意味なることを人予を欺かす、コシチャンの斜面の山角を曲り、弓形灣を爲す所、是れレムクラバンなり、人口四十、半は捕魚、半は耕耘に從事す、風穩灣深、風光明媚、直ちに發してナークルアに至る。

○ナークルア市　到着の時は已に日暮れて十時頃なり、ナークルア街を離る

ゝこと二十丁餘の處に泊す、海崖竹木交へ立て蒼々たり。

翌朝人を馳せて市場に至り、兼てスン僧を寺院に訪はしむ、僧直ちに船に來る、即ち相伴ふて寺院に至る街の窮まる所、是れチヨンロム寺なり、樹木蒼々、砂地甚皎潔、堂宇宏濶にして人の訪ふもの稀なり、水又清冷、沼海多く其比を見す。

此地の人口バンプラを恕して、バンプラソーイに及ばず、其物產はマイタケヤン、マイカベツ、マイカヌンバー等の木材なり、マイタケヤンの價巾八寸厚一寸長七間一枚四圓八十錢、マイカベツの價巾八寸厚一寸長七間一枚一圓八十錢、マイカヌンバーの價巾八寸厚五寸長七間一本三圓六十錢、何れも其質堅緻にして赤色、マイタケヤンは船を造くるへく、餘の二種は家を造るべし、此大樹は町を去ること十里餘の地に在り、當地も亦マイタケヤンを以て盛に船を造くれり、豚魚得へく鷄果得へし、就中バインアブルの大一個二錢、西瓜の大一個六錢、西瓜は其形白瓜の如く長く其中身黃色を帶ふ、味美なり、此外虎豹牛皮象牙の產物ありと雖とも、或は三里の村邑に一本五里の部落に三枚と云ふか如く、諸方より集まり來りたるものを磐谷に輸送す、故に單に產地の名を聞き、白銀を携へ來て、之れか買集に日子を消磨し、反て座して磐谷に於て買收するより高きに登ること往々有之初めて來るもの宜服膺焉。

當地よりチヤンタブーンに至るの間、大陸各村の名を聞き得たれば、參考の爲め爰に記す、ナークルア、バタヤー、ナーチヨムチユン、アンブー、バンサレー、サタヒーブ、クローツ、バラー、タコワン、ラヨン、ペー、タレーン、ブラセー、バンラー、カツチエー、ツンカベーン、バンカチヤー、チヤンタブーン是れなり、就中ブラセー、バンカチヤーの二村はラヨン、チヤンタブーンに次くの村落にして、人口稍多し、其他は皆寒村貧邑なり

十八日晝雨夜半曇半晴十九日晝曇夜雨廿日晝半晴半雨夜雨。

○六月二十一日　午後三時拔錨三時間にて、コーラン島に着す、此島人口百人許り、山腹半は開墾して、バインアブルを植ゆ、植付けの方法宜しきを得たり、然れども雜木を艾除せざるが故に、甚だ蕃殖を碍けり、現今の收入甚だ寡なし若し其樞翳を燔き、盤根を堀り、培養其宜しきを得ば、穰々計るべからざる收獲を得べし、惜矣哉植付より二年目最美、三年を超過すれば即ち止む其價百個九十錢皆磐谷に輸送す磐石の價百個五圓、此島ラオと稱する酒を釀造す、此酒土人並に支那人普通の飲料なり、其材料は粗米なり其色白く其味甘まくして辛し、少しく臭氣あり、我國の泡盛に酷似す、三升の價一圓二十錢なり、其外マムアン、ニーナー、カノン、タテンム、トワイソン等の果物累々として山に滿つ、土人荷擔に疲る、海濱大石あり、濫りに錨を投ず

べからず

午後五時出帆、八時コベツケオ島に着す、洵に蕞爾たる一小島、家屋一軒、支那人此に棲居し、切石を以て業と爲す灣內水深く巨船を泊すべし、其大陸との間、呼べば應へんと欲す、大陸の林峰の諧々たり、虎豹々たり、悲々たり、虎豹寓すと云ふ、此夜月明星稀波浪豔々たり、碇泊の船舶巧みに洞簫を吹く者あり、其聲漠々然冷風徐來、大魚躍海、遠征之孤客豈情を搖かさざらんや、蘭酒を把て船頭に据すれば、萬感滿胸其頹然として倒るゝの時已に鷄鳴曉を報す、朝飯を喫し了り、將に錨を拔かんとする時、舟子囂々猛虎出矣と叫ふ、船首に立て之を觀るに、一個の爼豹翳樹之下に蹲据し、尾を動かして海面を睚む、眈々たる其目、桓々たる其貌、甚た壯也、予覺へす快と稱す錨を拔き了るの時、忽然林中に入る、此日風甚た寡なく船甚た進ます、コクラム島の正面に對する時、風全止み帆全く効を失して海上拭ふが如く、浮漂多時、日西に舂かんとするの時、風初めて起る、其コクラム島に着せしは、方に日暮れて八點鐘、其島に歸へるの前、螺を吹き脂火を振ふ、島民相應ふるに又脂火を以てす、其船の岸に近くるや島民詳に船名人員行路等を聞く、聞き了り心平き、初めて投錨を許す、以て海賊の時に襲來することあるを知るべし、陸に上り島民に面し、知人の書簡を示し他意なき

を知らしめ、明朝龜卵の產地に案內を囑して歸船す、此島居民二十人、皆な龜卵を採るを以て業と爲す、住家三軒、山林に喬木なく、細樹蔽々たり、海濱白砂清く巖石危し

○六月二十二日　約を踐み島民を叩く、即ち一人は銃を肩にし、一人は水を荷ふて先導す、島の中央を越て外面に出つ其間凡そ二十丁餘、枯木橫はりて櫛翳叢る更に崎嶇の難なし、猿猴は梢間に飛ひて嗥々、麋鹿樹下に遊んて呦々、外海の濱砂甚皎潔島民の濱に達するや、先づ龜の海より登りたる足跡を追躡し、其足跡の留まる所と、其地質其方位を考察して、鐵棍を砂中に突入して其卵の有無を檢す、其戛々の聲を聞くや、乃ち砂を堀る堀て三尺、初めて卵を見る、累々として百を超ゆ、是れ一龜の產なり予堀て九十六を得たり、其足跡を以て之を忖度するに、其體の巾サ大抵三尺を超ゆ、是れ其小なるものなり、其大なるものに至ては一間を過ぐるものありと云ふ予砂地に臥して海面を眺眎す、二大龜あり、突然海濱に浮ぶ、島民走せ行て兩手を伸ばして首尾を攫む甲廣く手及ばず、遂に脫せり、亦以て大なるを知るべし、龜の陸に上るや地理を視地質を察し方位を考へ人獸の在らざるを認め、初めて砂を堀りて產す、產し了るや載ち砂を埋め、地を平らかにして海に入る惟た惜むらくは其足跡を沒滅するの圖を講せざることを、鼈や其身を持する愼重地をトする詳密、龜

之に如かず、此海龜多く能寡し、一日を隔てゝ卵を堀る、其數凡そ三千往時堀て一万を獲たり、其後之を安南人に托す、安南人無謀、濫りに龜鼈を釣獲す、是れより頓に減耗、遂に今日の衰運を來たせしなりと、島民嘆息して之を語る、產卵の地頗る狹隘、卵の價百個一圓二十錢なり、少しく臊臭ありと雖も、其味佳美にして身を滋養す、

此島モリ栢木ありしも、去年日本人の伐る所と爲り、今や一本を存せず、現今我大坂附近に使用する所の薄黃色の栢木は、則ち此島の產なり、

○六月二十二日　此夕緩を解く、順風矢の如く、八時サタヒープに着す、前面に島あり、距離甚近く、海內水深く、島能く風を禦く、以て大船を繫ぐべし、暨朝陸に上る人家三十軒、人口百人許り、居人半は田を耕し、半ば魚を漁す、當地は遲羅國第一のマイタケヤン材の產地なり、前約を踏み、其木材の事を說明すべし、當國產物の第一を米とし木材之に次く、就中マイタケヤン、ヤマイキヨーム、マイパヨーム、マイサックの四大樹土人甚た之を珍重す、マイサックは夫の有名なるチーク材の事にして、今や艦材車材として、盛んに海外に輸出す、斯材は我櫟に類似す、色美にして質堅く、能く日に勝ち水に堪ゆ、故に其需用廣く、其價昂貴、マイタケヤンは巨木にして、其質頗堅顚級又克く水に堪へ日に勝つ、其質の堅緻にして、日水に堪ゆるの點に至ては、復か

にチークを凌駕す故に遲人マイタケヤンを推尊して、四大珍樹の第一位に置けり、然れとも斯樹の色や薄赤黑にして光澤なく、姿體亦醜汚、唯だ船舶之れ造くるべく他に使用すべからず、是れ其チークに及はざる所以なり、然れとも之を以て船舶を製造するときは、則ち三十年間大修繕を須ゐずして能く保存すと云ふ、寔に剛健なりと謂つべし、豊チークの企及する所ならんや、況んや其他のものに於てをや、此地の相場を聞くに、巾八寸厚一寸長七間板五枚を得べき樹、一本の價十五圓位にして、三ヶ月に百本三年に千本を伐出し得べしと云ふ、其所有主は確定せざれば、何人と雖も自由に伐採することを得べし、其樹木の在る地は樹峰に在らずして平地に在り、雜木細樹の途に當るあるのみ、牛車に憑り之を牽き出すべし、其地マイタケヤンの一大喬木あり、蔚蒼として天に聳ゆ、傳へ稱す、是れ樹靈の宿する所、苟も此附近のマイタケヤンを斬らんと欲するものは、必らず此神靈の允許を受けざるべからず、否らずんば必らず祟罰を受けんと、土人恐怖斧斤入らざること久し、是を以て樹木益々蔚々たり、前年村長某工夫を率て至り神靈に請願す、神靈聽かず、然れども已に工夫を拉して到る空しく歸るを欲せず、遂に命して斧斤を下さしむ斧斤の下るや、工夫咸な死し、其躬亦斃る、其後ビヤスリ侯又神に祈る所あり、亦許されずして去る、

是れより復た敢て顧るものなし、當國王外國人を待遇す、頗る優なり、願ふに樹神亦然らん外國人の來り請ふものあらば必らず之を與へよ日本現今使用する所の船材は大抵七年に達すれば則ち修繕を要すと聞く故に若し斯のマイタケヤンを以て之に代用せば其神益蓋鮮少にあらざるべし、心ある者一考して可也、

マイキヨーム、マイバヨームの二材も亦マイタケヤンに次て其質堅緻、其色濃赤にして黒し、亦以てマイタケヤンの代用を爲すに足る、

是れより海上波高く、船頭蹉首、船を進めず、會ま行かんとするものあるも、其船銀頗る軒昂、一日四十八圓を請求するに至る、乃ち船をナークルアに還へす、其夜着又前日の處に碇泊す、其間の天候を擧ぐれば、二十一日晝半晴半雨夜雨、廿三日晝晴夜晴、廿四日晝晴夜晴、廿五日晝晴夜雨、廿六日の朝行李を戒しめ、ナークルアのリエンチンソーンの宅に至る此夜銃を携へて兎を獵す、五頭を獵て歸る、樹火を携へて田畝を行く、暗昏之地、兩個の烟々たるものを見る是れ兎の兩眼なり、即ち之れに向て發銃す、之を兎を獵るの方と爲す、此時遙に虎豹咆哮之聲を聞く人をして覺えず震慄せしむ、兎の肉軟味美、柘木亦當國の產物なり其色少しく薄し

と雖ども、大樹を得べし、コシチヤン島附近已に伐り盡くして、今や一樹を存せず、ナークルアを離れ、往くこと四晝夜に達するの地、コラークと云ふ所あり、カオターオと云ふ所あり、クロンワンと云ふ所あり、其三ヶ所の地、柘木甚多し、其地より伐り出し、之をコシチヤン島迄運び出す所の直段、九サ二握長サ六尺一本九十錢、九サ三握長サ六尺一本一圓三十五錢、九サ四握長サ六尺一本一圓八十錢、九サ五握長サ六尺一本二圓二十五錢、

遐羅の灣、西南の季風激くして、東北の季風微なり、舟揖の往來、皆東北季風の時に於てす、西南季風中幾んど帆影を見ず、ラヨンの海風最も驟ラヨンの濱怒濤澎湃近くべからず、此季風中ラヨンは全く外境と交通を絶つ、是故に船舶の此海を越えて東に行くものなく、又西より來るものなし、予の乘る所の船、サタヒープより此地に還りしも亦之れが爲めなり、東北の季風は十一月より起り、西南の季風は二月より起る、而して六七八九の四ケ月、最も烈なり、予の船已に還る、是れより陸行せざるべからず、陸行には牛車あり、而して時會ま苗の植付けに際す、牛出て、田に在り人往て之を驅る、己に人なく又牛なし、何の用をか爲さん、搜索二日竟に得ず、陸に車なく海に船なし、斯行時不利、地水共窒と謂つべし、凡そ旅行せんと欲するもの、宜しく斯行

に鑑み、時期を睹、愼んで予の轍を踵むこと勿れ、已に牛車なし空しく斯地に淹留する、亦其益なし、乃ち徒歩ラヨンに至ることに決す、路險にして盜多し、廼ち約を立てゝ曰く、携帶する所のものは、各自劍一本、銃一挺、毛布一枚、シャツ一枚、ザロン一枚、洋服は着被の外、一枚をも提くることを許さず、唯た酒は此約の外にあり、是れ予が唯一の武器、須臾も離るべからざるものなり、約已に成る、

○六月二十八日　未明、各自備具を負うて征途に上る、先導者はチエンソーンなり、ナークルア町を離るや直ちに林中に入る、其地濕て礪砂海濱の砂地水氣之を固む、運歩甚た易すし、林中の砂地乾燥加之牛車の過ぐる所砂深く陥を沒す、歩行頗る窘しむ、林中盡きて田畝に出づ、或は畦畔を行き或は田中を歩す、田中水滿て牛之を耙す泥濘膝を浸す、歩行亦艱む、小川頗る多くして岐路最も多し、先導者のあるあるにあらずんば、遂に行くこと能はず、行くこと僅に三里疲勞特に甚だしきを覺ゆ、蓋赫日頭を焼き、泥砂足を穢すればなり、九時に垂んたるときホーンと稱する所に達す一家に休して食を命ず、此家牛車あり、乃ち今夜月出づるを竢て發することを約す、約成てチエンソーン歸る、此日初めて青苗を覩る、神氣爽快、田地砂泥にして苗の植付け孔た錯亂、田中必ず一二の小山を存す、其苗を害すること甚だし、其小山も我

國の如く動すべからざる大石の横はるあるにあらず、拔くべからざる大木の樹つあるにあらず、僅かの土塊のみ、僅かの盤根のみ、之を除去する豈難しとせんや、是必竟土人の惰惰にして勞力を惜しむの結果なり、若し盡く其の障害物を增す、蓋鮮少にあらざるべし、豈可惜之至る所以の結果なり、若し盡く其の障害物を增す、蓋鮮少にあらざるべし、豈可惜之至ならすや、土人の勞を惜しむ、是れ遥羅國の振はすして盜多き所以の一なり、其勞を惜み、易に就く即ち亦是れ棄土遺壤多きの證なり、

當國の氣候之を三季に分つべし、二三四五を夏季と爲し、六七八九を雨季と爲し、十十一、十二、一を冬期と爲す、苗の植付けは七月にして收獲は十一月なり、其植收全く雨冬の二季に屬して、夏季は即ち與り關せず、夏季は米を作るの好節なり、而して其の之に關與せさるものは、其間水を得さるか爲めなり、苟も水を得ん乎、何爲れそ斯好季を捨てん、三季相通して用ゆべし、則ち一二三四五を以て第一植收の期と爲し六は休して地方を養ひ、七八九十十一を以て第二植收の期と爲す、十二は休して地力を養ふ果して如此するときは、則ち人同うして年二回の收獲を得べし、其國を益し人を利す、豈大ならすや、其水を得るの方如何、亦唯た易々たるのみ他なし、夫の突井戸を用ゆるに在り斯井戸の力を以て水を供し、我農夫の强を以て之を勵せば則

ち其收獲實に測るへからさるものあらん、予の斯事を思ふ于茲年あり、今や躬ら其地域を踐み親しく其實況を觀る、俯仰感慨措く能はす、願うて天下亦必らす同感之士あらん希くは勇奮來り觀よ、來て其漠々たる沃野千里草茂て鋤入らさるを觀は必らすや欣舞懽躍して止む能はさるものあらん、予敢て言を食ます、讀者請ふ輕讀看過すること勿れ、

此夜月出つ、而して牛逃逓行く所を知らず、夜の明くるを待ち拉して來る、乃ち牛車に憩して出發す牛車土人稱してケノと云ふ、其輪の高サ八尺兩輪の間長サ九尺、巾尺餘の臺を据ゆ、其臺は格子造りにして下狹く上廣し、竹を編み以て其上を蔽ふ、晴雨共に行くべく、以て七八人を坐すべし其之を造くる、都て木材なり、絕えて鐵類を用ゐず、其釘は朱檀にて其心棒は堅木を用ゆ之を挽くものは水牛二頭なり、水牛肥大能く荊棘を排して行く、苟も水に遭へば即ち止まる鞭撻叱咤其効なし、敢者下つて水の身を濕し、腹を滿たすや叱鞭を待たすして行く、內地土人の耕耘に從事するもの、此水牛を飼用せざるはなし、其水牛の頭を數ふれは、以て其家の財產を忖度するを得へし、水牛夙に飼用し易し、晝は野に放て草を食ましめ、夜は屋後の樹に繫ぐ別に食を與ふるを要せず、草を食うて飫くや乃ち水中に入る、水は渠れ第一の好物

日は渠れ第一の禁物なり、故に多く夜に動て晝休す、其價一頭凡そ五十四圓以上なり、之を買買するの時期は四五六七月の間に在り、進行一時間の間盡く平地にして細木路に塞る、是れより林中に入る、深林大樹の下を過ぐ、マイタケヤン、マイカペツムイカヌンバーの巨樹、欝蒼聳天而盛立其長サ三十間に達するものあり、其枝葉は大抵二十間以上の部分に在り、其間一の屈曲なく、又柯節なし此れ皆路傍平地に在り、山に在らす、而して大概一町を隔つる毎に一木を得へし、杞荊の間此喬木の盛立する、眞に人をして氣高心壯ならしむ、往くこと三時間にして疎樹小流の所に出づ牛に秣ひ、水を洽す予等も樹下に休臥す、

斯須にして土人三人來て又茲に憩ふ、一人銃を携へ、二人刀を提く斯人亦ラョンに至るの旅客なり斯道はナークルアよりラョンに至るの國道なり、而して唯だ僅に此旅客を見るのみ、亦以て人煙稀寡行人至少なるを知るへし其凶器を携ふを見ば則ち以て山賊の時に出でゝ旅人を掠奪することあるを知るへし、山賊の來るや、多く銃砲を以て人を狙撃すと云ふ、是に於て乎、行人必らす隊伍を組み、軍器を拉せざるへからす、途中行人と相會するや、相去る十間銃を擬し刀を拂へ、誰何して其來由を質たす、其容貌を視、其擧動を察し疑解けて初めて進む、進み近づくや更に凶器を

擬し、相睥睨して過ぐ、其狀宛然讐敵に遭遇したるが如し、

是より荊棘益叢蓊、大樹益喬巍、屢天日を遮蔽して、地下闇黯たり、馭車を駐め指して曰く、彼の樹の下前日猛虎出て丶巨牛を噛みし所なりと、四時に達せんとする頃、一小平地に出つ茅屋あり、十二盛を敷くへし、障扉の備なし、唯た僅に粗板を設く埃泥之に充つ、裸體跣足の土人十數名群蟠して鬻々たり、馭者車を下りて曰く、今夜此處に宿すべし、明日車を換へて進むへし、又曰く此地はダーンと稱する一驛にして、牛車の繼換を爲す所此家は是れ關所にして、往來の人を撿す行人又宿するを得へし、予因て關長に面せんとす、皆曰く關長去てナークルアに在り、家に在るものは其妻子のみと、其次官を問へば、馭者其群蟠中の人を指擧して曰く、是れ皆官吏なりと指擧せられたるもの以上六人、予懇ろに宿泊を需め又囑するに監視の事を以てす皆唯として諾す、屋後竈あり、人の自炊に任す、日西に、舂て牖牅群歸屋を圍んで横臥す、其臭膠ゆべからず、日暮れて行人數名、又來て此處に宿す、前きに睥睨して過ぎたる三人のもの亦來る、其容貌皆獰猛、各劒銃を提ぐ、其他一品の所持品なし、屋内燈火なし、時々脂樹を灼て物を見る、豈警戒せざるべけんや乃ち旅具を枕と爲し、刀銃を之に繫連して臥す、家狹人多、頭足相交る、蚊虻吵として膚を刺す、通宵豈安眠を得べけんや、

翌朝又牛車に乘て進むこと二里、二三の農家を見る、此間杞棘密ならず、巨木茂らず正午一農家に至り、牛車を繼ぎ換へて行く、ダーンより當地に至るの牛車賃一圓八十錢、ボーンよりダーン迄の牛車賃九圓なり、是れより道路平坦にして、左右曠淵、三時頃田畝に出づ、牛車は田畝を跋み、河流を涉り、駸々乎として進む、陸地は都て礎砧なり、故に車輪深く沒して左右に傾く、轉覆せんとすること數次、其輪頗る大にして路傍の樹木森立之を扶く、故に曾て傾倒の難に遭はず、村中月明かに萬籟寂たり此時牛車轢々の聲を聞く亦悽然、此夜ラョン市を離るゝこと一里餘の村落に宿す村總代の宅なり、是亦一小茅屋、戸扉の設けなし其壁する所のもの、南瓜の莖と葉とを煮たるものなり、方に是れ都門燕窩之滋味也、此處に宿するの前、旅行券を示し、以て止宿の許諾を得たり、此家犬あり、唯々人を咬む、出入甚險なり、内地の人家必らず犬を倘うて盜に備ふ、其犬人を見れば則ち來り咬む、棍棒を携ふるにあらざれば猥に人を訪ふべからず、此地の居人皆田畝に從事す天性少しく朴淳なるを覺ゆ、

翌朝又牛車を驅てラョン市に向ふ、霖雨汜濫、殆んど田畝河川を甄別し難し、恒に水中を行く、土人皆云ふ雨期中、内地旅行難矣と、果して眞なり、市に近くに隨ひ、曠田漠

野千里一望、意豁如たり、其市に達するや、知事を叩き、先づ旅券を示し、宿處を需め、併せてチャンタブーン行の船を請ふ、知事蹙顙して曰く、刻下海荒らく船行頗困、地僻にして旅館なしと、傾首稍や久うして吏を呼び、一は旅館を需め、一は船を求めしむ、暫くして吏歸り來て予等を導て寺院に至る、入て之を見るに說敎場なり、千人を座すべし前後扉戸を鎖し左右格子造りなり、板上塵埃高く積み、髑髏隅に轉して、骸骨壺に滿つ茶を侑めす、食を供せす、乃ち市に出て支那人の飲食店に命して、食を寺院に運搬せしむ、日暮れて燈なく、蚊亦多し、鐘を鳴らして經を讀み、皷を擊て時を報す、蓼々鑛々夢頓に結ひ難たし、嗟乎是れ知事の公然外人を待遇するものなり、

○ラヨン市　はバンプラソーイに次くの大市人口二千を有す、而して如此進んて寒村貧落に闖入せん乎、其困難盖測るべからざるものあらん船は知事の官船を以て之に充つ、然れども船銀四十二圓を徵取せり、暹羅官吏の貪慾なる、大抵皆如此其船は船頭一人、助手一人、海兵一〇人を以て之を操縱す、此地バンプラソーイに迨はすと雖とも、市場あり、賭博場あり、普通の物品を買取するに難しとせす、洋酒の價磐谷に倍す、當地の重なる物產は、ナムマンヤン、カツピの二種なり、ナムマンヤンとは所謂木の油にて、我國の松脂と漆油とを混合したるか如し、マンヤンと稱する大樹あり其高三十間を超ゆ、其外皮色白く柯葉甚た寡なし其根に穴を穿ち火を點し其脂膩の滴るを竢ち、之を酌み出し、以て其用に供す、或は船を塗り、或は樹皮に包んて薪に代へ、或は以て燈火に充て、或は竹器を塗り、以て水を酌む等、其需用頗多し、カツピとは小海老を鹽漬と爲したるものにて、土人之を野菜豚魚に着けて食す、味美なり、之を暖飯にて蒔食す、最も妙、亦是酒家之好下物也、此地又マイタケヤンに富むラヨン河畔夥多の造船所を見る其他物產は小馬、米穀、材木等也、此地海兵五百人屯駐す、デンマーク人一人時々來て訓練を爲すと云ふ、而て河海一隻の戰船を見ず、此地天空恒に曇て雷名遙に聞ゆ、霽々たり、神氣閉結、此地附近の家屋一ツも錢釘を用ゐす、朱檀若くば他の堅木を以て之に代ゆ、其使用する所の板は大抵一枚なり、十間を超ゆる者あり、二十間を越ゆるものあり、甚だしきに至ては三十間に滿つるものもあり、珍重の大板猥りに之を茅屋に用ゆ、予之を觀る每に未だ曾て痛惜の心を起さすんばあらず、西南の季風船の西より往かず、東より來らざる所以のものは、必竟斯のラヨン海の浪高きが爲めなり、予濱に出て之を見るに正面は水天一色際涯なく南風頻りに吹き來りて、怒濤淮々岸を澣ふ、一見恐るべきに似たり然れども克く之を睇視すれば、怒濤は纔に一二丁に過ぎず、其餘は穩波灝々たり、試みに衣を脫し

て游泳するに、其潮の力甚強らず、而して其水甚た深からず、嗚呼是れ遥羅第一の荒海なり其船の構造の軟にして舟子の弱なる知るべきのみ、廿六日曇晴夜雨、廿七日曇晴夜雨、廿八日曇晴夜晴廿九日曇晴、夜晴、三十日曇晴、夜雨七月一日曇晴、夜雨、二日曇曇夜雨、三日曇曇夜雨、四日曇曇夜雨、五日曇曇夜雨、

○七月六日　此夕タパナムを發して船を河口の潮水交戰の地に進めて碇泊す此船のラョン市を發せしは去る二日の夜なり、其夜少しく進行して錨を投ず、其翌朝出發又少しく進んで忽ち砂上に乘り揚ぐ、空しく潮の至るを待ち、其夜パクナムに着す此市より茲に至るの間僅に十七丁、而して一晝夜を費やす翌四日出帆を命ず、船頭曰く、逆風行くべからず、請ふ明朝を以てせんと明朝之を命ず、船頭曰く、潮未だ滿たず船進むべからず、請ふ今夕を以てせんと其夕潮滿つ、乃ち之を促す、船頭曰く、潮來るも風なし、船動すべからず、請ふ明朝を以てせんと、翌朝之を督す、船頭曰く風順ならず、請ふ今夕を以てせんと、六日の夕、予峻乎として之に迫まり、斷乎として帆を揚げしむ、其往て潮水交戰の所に至り、錨を投せんとするや、予乃ち其錨を抑握して進行海に出でんことを命ず、船頭曰く、此河口四人の助手あるにあらざれば越ゆべからず、今日其人を得ず、明日必ず得て進まん請ふ一日を寬うせよと予勵聲叱

咤爾甘言予を欺き、空しく滯泊四日を消磨せしむ、而して今又一日を請ふ、予之を許さず、船倘し果して四人の助力あるあらざれば、進むこと能はざれば、予等一同之に當らん、船若し破壞せば、予之を辨償せん、亦何んぞ恐るに足らんと、手尙錨を釋てず、船頭曰く、此の河口を見よ、今此處を往來するの、船舶ありや否や、船の碎け、奴の死する亦何んかあらん、獨り貴體を傷けんことを恐るゝのみ、奴決して言を含まず、明日必らず船を遣らん若し明日奴にして言を食まん乎、斯船貴意に任せんのみ、奴亡も恨むる所なしと、予是に於て錨を投ず、其潮水交戰の地を見るに、其巾二十間長一丁許り、濱砂を中貫して流る、波に橫はるの巖石あるにあらず、亦曷んぞ破碎淪溺の恐あらん其水甚淺く、干潮の時衣をかゝげて涉るべし、

○パクナム　戶數百戶許り、漁魚を以て職と爲す、カッピ製造の本場なり、現今漁季にあらず、又西南季風に際し、船舶の出入なく、甚寂寥たり、潮水衝來の處に海兵屯す、其數二十名、此夜潮風冷かに明星皎たり、洋酒數觥陶然として假す、翌朝船頭助手を得す、駈せてラョン市に到り知事に請ひ一書を得て歸る、披見するに日本人を必らすチャンタブーンに送るべく助力すべしと、バクナムの總代へ命令したる箇札なり總代此命令書を受くるや、舟子十人を引率して來る先づ予が船の錨を拉し去

り、之を適當の地に投し、其綱を挽て海に出てしむ、其繩の長サ二丁許り、如此すること三回、初めて帆を揚げて走ることを得たり、其狀宛然往時大名の引き船のことし、亦旅行中の一奇話なり若し日本の舟子なりせば、其潮將に退かんとするとき、能く風を孕ませ、一片の帆以て斯河口を出づべし、又何んぞ擾々十人の助力を要せん、而して遥羅灣の航海權は擧げて其掌中に歸すべし、遥人の羸弱にして漫惰なる、實に傍觀に勝へさるものある大抵如此、可憫矣哉船已に海に出で、横に南風を孕む、船頗傾く舷の潮水を離るゝこと僅に五寸、危險甚だし、日暮て七時、コメサン島に着す、此島能く南風を防ぐ、其大陸との間亦遠からず、水深くして巨巖あり、魚多く船泊すべし、樹茂て水得べし、亦一良港なり、戸數十軒、漁業に從ふ、

翌八日の朝、拔錨、西風疾く吹て舟行射るがごとし、午後四時チャンタブーン河口に着す、進行止まず、河中に入る、右岸に三色の旗高く掲て翩々佛蘭西人三十名此處に住す、安南人之に倍す、左岸に土人の住家あり、五十軒餘、稅關あり來て船を檢す、佛關の敎堂あり、兀然其間に立つ、其兩岸の細樹鬱々として濁水の滾々たるは、濱南河に似たり、其河身は狹くして其水淺し、蜿蜒猗逶、往て六時に達するの頃、風逆に吹來て船進まず、乃ち中流に留まる遙に北方を眺望すれば、カオサダーブ山峨々蒼蔚高

く聳て蒼穹を摩す、日已に暮れて雲霞靉靆たり、一望人をして意氣壯宏ならしむ、チャンタブーンの地之に依て風光を添えチャンタブーンの市之に依て富瞻を致す雨季に雨り暑季に照る、陰陽和を失せざるも、亦斯山あるに依る嗚呼カオサダーブ山は是れ斯州の鎭守なる哉翌朝纜を解き、午前十一時、チャンタブーン市に着す、直ちに瑞春號に投す、支那人藥舖なり、當市モト塞村僻地、三十年前一朝寶石の顯出し て頓に繁榮に赴き、今や五千の人口を有す、就中一千人は安南人にして、別に一郭を成す、其他は支那人、印度人、緬甸人也、其道路は煉瓦を以て之を敷き、家屋の構造は支那に類し、又洋館に擬す、其市街の體裁はアユチャを凌ぎ、バンブラソーイを駕す、當地の物產はルービーの寶石を以て最と爲す、其之に次ぐものは胡椒なり、當地の赤土と氣候は能く胡椒に適す、其葉大にして蔓美なり、唯だ其栽培の規模頗狹小なり市の附近到處に小園を設けて之を培す、現在二百萬本の蔓を有す、豐年の時は百本につき、平均一擔の收獲あり、而して其三分の二は白胡椒にして、其餘は黑胡椒なり水中に黑洗滌卽てしを剝除したるものを白胡椒と云ふ、黑皮を剝脫せざるもの、是れ黑胡椒なり、黑胡椒は質劣支那人に適す、外國に輸出するものは皆白胡椒なり、其輸出は一に英人の掌中に存す珈琲の栽培亦此土に好し、前年の試培已に効驗あり

而して未だ大資を投じて之に當るものなし、亦唯微々たる個人の一小園に止まる豈痛惜之至ならずや、斯道に志あるもの、須らく熟考すべし此外の物産は獣皮、獣角山姜等なり、夫のルービー寶石を採堀するものは、成な緬甸人なり、其品質は蓋緬甸産に及ばざるべし、其地に到らんと欲せば、陸路三日を磨糜せざるべからず、現今道途雨水氾濫、行人の乳に達す、其地毒あり、水に入るの人皆癰瘡を病む、チャンタブーン河の附近土肥へて水豊かなり、良米を得べし、本州の土人二萬五千人、多く農圃に従事す、六日壹晴夜晴、七日壹晴夜晴、八日壹晴夜晴。

○七月十一日　午前舟を傭うてチャンタブーン河を下り、河口に至る、宿所を需めて得ず、乃ち其地の官吏を叩く、主人在らず、細君に面し旅券を示して宿を請ふ細君踟躕考慮久し、予輒ち大喝して曰く、已に旅券を有す、又何の疑ふかあらん、之を見て、而して宿を與へず、是れ官職を瀆うするものなり、瀆職之罪輕らず、予去て之を知事に告げんと、細君載ち諾す、載ち諾すと雖も陋屋座するの地なし、河上組板を架する所是れ予の寢處なり、此地細樹に富む、土人は薪を賣て食す、其價頗る卑賤、四ッ割長サ二尺物百本十五錢なり、豈廉ならずや帆船積み、日本に輸送するも其利あるを覺ゆ、亦以て樹木富瞻の狀を知るべし、是れ皆便船に依て、磐谷に運送す、

翌十二日舟を命して斜面の岸に渉る、酒を買ふが爲めなり、人家僅に二十軒、支那人安南人茲に住す、而して安南人の數支那人に超ゆ、皆茅屋陋店樹間を縫て點在す、酒舗は佛蘭西陣營の背後に在り、故に前路を迂回せす、直ちに陣營の傍を過きて船に還る、往て二丁余將に達せんとするとき陣中俄に喇叭の聲起る、顧みれは兵卒二人倉皇馳せ來り、予を留めて上陸の地、出船の港滯在の日子並に其來由を問ひ、且つ曰く佛蘭西の士官君に問はんと欲するの事あり、請ふ陣中に來れと、予曰く我れ彼れに用なくして彼れ我れに用あり、用あるもの來る是れ順なり、これ禮なり、汝歸て之を士官に告げよ士官來らば我之れに語らん、卒曰く君陣中に至るも、敢て怖るべき事あるにあらず唯だと云ふや否や、予嚇として怒り大喝して曰く、默せ、汝何物の無禮漢ぞ敢て斯言を吐く我何んぞ一の士官を怖れん、怖れて行かさるにあらす、行くは其道にあらざるを以てなり汝去れ、予復た汝と語らす蹶然歩を運らして船に還らんとす、卒驚き予の袖を把り、低頭失言を謝し曰く卒行て士官に告るに君の言を以てせん謹て請ふ、少時茲に歩を留めんことをと、予之を許す暫くして卒飛ひ來て曰く士官又君に問ふの要なし多時君の歩を駐めたるの無禮謹んで之を謝すと、敬して退く、予も亦哄然一笑して舟に上る、此時又陣中喇叭の聲を聞く、顧みれば士官二

人出て營前に在り、蓋ナークルア出發以來、着する所のものは、唯茶色の洋服一枚のみ、二十日の間晝夜一被、曾て洗濯を加へす、穢黷汚臭、面色焦けて鬚髯毵々、裳高く甄けて脛を露し足靴を穿たす、佛人見て以て蠻人と爲せり、故に斯擧あり、其初めて日本人たることを知るや、敬して輟む、當地滯泊中、菓實に飽き、酒に乏しからずマンクー、ルクゴー二果頗る多く、價亦廉、皆磐谷に輸送す、翌十三日定期火船來る、即ち之に塔す、十一日晝晴夜晴、十二日晝晴夜晴、十三日晝晴夜雨、十四日晝晴夜雨、十五日午後一時拔錨佛蘭西陣營の前に船を留めて、佛人の檢査を受く前きに佛國の印度支那總督磐谷に來り國王に謁し、他の地を得てチャンダブーンの占領を解き、併せて土人保護の事を輟むるの約を結べり、其政府の承認を得て世に公表するの日遠きにあらざるべし、佛人の檢査了るや、船直ちに河口を出づ、出て海に入るや風波少しく起て、船簸颺、乘客窘しむ、翌十六日午後二時、磐谷に歸着す、電車轟々、馬車轆々內地より歸り來て、初て王都の盛を知る、書し了り、筆を投じて一讀すれば、四十五日間の斯紀行、毫も讀者を裨益するものなきを覺ゆ、唯だ望むらくは讀者の健在にして、今冬メコン河畔實踐紀行の紙上に登るを竢たんことを、

暹羅東海巡遊記 終

鐵膽書翰序

鐵膽が十年間に我輩に寄せた書翰は、兎ても百通や二百通ではない、彼れは中々能く手紙を書いた者で、時として一日に二本も三本も我輩の所へ書いたことが有る、其の大多數は散逸して無くなッたが、手許に殘つて居る者の內から四十通だけ、此所へ收錄した、多くの手紙の中には或は個人の攻擊に渉ッた者も有り、或は彼れの商略上の秘密に關した者も有るが、是等は彼れが公けにさるゝことを好まざるを知て、大概之を削ッた。

此の四十通を見れば、彼の面目が躍如として其中に存するのみならず、十年間に於ける彼れが活動の情況が、自ら說明されて居ると思ふ、我輩は或る意味に於て此の四十通の書翰が、彼れの自敘傳とも見ることが出來ると思ふ。

明治四十二年九月

半山識

鐵膽書翰目次

其一　（明治二十四年八月二十一日東京發）

其二　（明治二十四年十二月二十七日東京發）

其三　（明治二十五年五月二十一日東京發）

其四　（明治二十五年六月十一日東京發）

其五　（明治二十五年七月二十六日東京發）

其六　（明治二十五年十月二十九日東京發）

其七　（明治二十六年一月十四日東京發）

其八　（明治二十六年七月七日東京發）

其九　（明治二十六年七月二十四日播州舞子發）

其十　（明治二十六年七月二十六日大坂發）

其十一　（明治二十六年九月十三日天津發）

其十二　（明治二十六年十月二日天津發）

其十三　（明治二十六年十月十五日上海發）

其十四　（明治二十六年十二月二十日上海發）
其十五　（明治二十六年十二月二十七日上海發）
其十六　（明治二十七年一月十六日上海發）
其十七　（明治二十七年二月二十二日上海發）
其十八　（明治二十七年三月十日上海發）
其十九　（明治二十七年五月廿六日上海發）
其二十　（明治二十八年九月二十二日磐谷發）
其廿一　（明治二十九年六月二十八日東京發）
其廿二　（明治二十九年七月二日東京發）
其廿三　（明治二十九年八月廿七日東京發）
其廿四　（明治廿九年九月十四日神戸發）
其廿五　（明治二十九年十二月十四日磐谷發）
其廿六　（明治三十年四月十五日香港發）
其廿七　（明治三十年五月十一日磐谷發）
其廿八　（明治三十年八月二日磐谷發）

其廿九　（明治三十年九月十三日磐谷發）
其三十　（明治三十年十月二十九日磐谷發）
其卅一　（明治三十年十二月六日磐谷發）
其卅二　（明治三十年十二月十二日磐谷發）
其卅三　（明治三十一年四月二十八日鹿野山發）
其卅四　（明治三十一年九月十四日磐谷發）
其卅五　（明治三十二年三月二十二日磐谷發）
其卅六　（明治三十二年五月十五日磐谷發）
其卅七　（明治三十二年七月十六日磐谷發）
其卅八　（明治三十二年八月九日磐谷發）
其卅九　（明治三十三年一月十六日磐谷發）
其四十　（明治三十三年六月八日磐谷發）

鐵膽書翰

其一（明治二十四年八月二十一日東京發）

明治二十四年余鐵膽と共に庚寅新誌に從事す、其の八月余沼津に遊ぶ、鈴木安平氏の宅に在り、鐵膽自由新聞を送り來る、同新聞六大政治家の投票に品川彌二郎子も內務大臣にて聲望を博したる時代なれば伊藤板垣後藤大隈大井の五氏と共に當選せるを以て其の肖像ある新聞を送り來たるなり、書中角田と有るは角田浩々歌客なり。

並狀拜見、御着津而來始終御醉夢之由、是れ世俗の塵埃を麴糵に託し、昏冥に逃る積なる乎、將他に意あるか、兎に角赤垣派の小生流涎に勝えず候、自由新聞を送附せしは、兄の師友たる品川彌二郎子の肖像あるを以てのみ、紅塵を離れたる沼津に於て彌二子の像を視る亦一層の樂みあらん乎、彌二子の「をしろいを附けるな」の一話別紙切抜供瀏覽、小生は兄と別れてより泚然自失何んとなくさびしく、日夜戀々之情に勝へす、是れ松陰之所謂理氣之感乎、遊び足りなば、速かに歸京せよ、角田には未だ面會せざれども、兄の親友なれば亦一の取り處ある人物なるべし、談笑の次長州人に阿川太良なるものあり、才なし、智なし、膽あり、氣あり、悲歌慷慨松陰產九之徒なり、

明治の世亦難得人物、出京之砌一度面會して見よと御物語被下度、社中無異狀先は
異の一筆如此早々頓首

其二　（明治二十四年十二月二十七日東京發）

明治二十四年余庚寅新誌に從事し且つ慶應義塾大學に通學す、得る所の金を鄉里に送るを以て月謝に窮す、鐵膽余の爲めに社長手塚氏に謀りこれを辨ず。

鐵膽啓、月謝之事語之於手塚氏、氏曰諾、明日應渡之也、君其了焉、君之厚於孝養、僕常服焉、年之暮鬼之來、君倘有窮請語之於僕、僕今幸有一金之餘裕、以爲君弁之、君其勿介干意、不啻。

其三　（明治二十五年五月二十一日東京發）

虔啓、陽らざる晴天、精神頗る爽快を覺へ候、陳は昨日御賴み致し置き候、浴衣精々取急がれ候樣、會津の老媼へ御傳達たのみいり候、扨又本日談の序フト手塚氏襟を正して曰く、石川の月給に比して社務の負擔重きに係はらず、能く之に服從し、敢て懈ることと或ることなきは、猛昌の夙に承知し窃かに悦ふ所なり、此事序もあらば傳言いたし呉れよと、故に今直ちに之を君に傳ふ、君其れ亦之を服し置け早々頓首

此頃余は麻布霞町に寓す、草莽の中に立てたる新築の借家に獨居す、食事掃除等は少しく離れたる所の親友に賴み居りたり、舍中の高山氏とは現衆議院議員高山長幸氏の事なり。

其四　（明治二十五年六月十一日東京發）

肅啓、原稿御送付慥かに落掌仕候、如仰梅雨濛々鬱悶不開、卓窓之下呻吟罷在候、高山氏は終日乾々薄書の間に俯仰し、時に首を擧けて嘯くのみ、氏の心中少しは御察被下度候、扨て此の梅雨濛々を遣するには、放歌高吟、大醉淋漓、劍舞亂躍の外他に良策なし、然るに之を行ふ場所、孔だ困難見晴し（芝見晴亭）に行かん乎、第一〇を要し、餘り亂舞も出來難く、況んや高山氏の如きは小心翼々氣取るに於てをや、然らは社でやらん乎、亦近處の手前と事後の仕舞に困るのみならず、毎日見慣れた座敷は快味少なく、何れにせん乎と百計千慮遂に思ひ當りしは、君の御宅なり、是なれば場所も靜かに、家も獨立且つ他に一人の邪魔物なし、得たる哉、得たる哉、呑海の宅と云へば高山氏聞ひて筆を投し、頭を擧げ、目を赤くし、手を栢て曰く、然り〳〵石川の處に若くはなし、往くべし〳〵イザ〳〵と云ふ處へ、障子ガラリと入來るものあり、誰れ人ならんと思ふ內、アッソーデスカの聲耳に響く、ウン夫の四日市か、ヨシ〳〵是も同道

して例の水鉄砲を放たしめば、是亦一興、其れに次ては無理に酒を勧め、大酔淋漓ヲニヤ〳〵然たる程、酔はしめ、遂には嘔吐を催さしむるも、亦一興なり、扨其の人員は第一四日市、第二無二公、第三達摩(大西)第四高山第五猫殺し、第六△△△第七△△△、第八〇〇〇、第九〇〇〇〇、第十東太夫、以上十名先つ社に於て勢揃を為し、一同福住屋の雇付け車に打乗り、轆々轆々、霞町の御宅の玄関へ引付け、先つ第一に無二公を以て案内を請はせ、続ひてヅン〳〵ハイト上リ、チャン〳〵ドン〳〵エイヨーの聲と諸共に剣舞を遣るものあり、相撲を取るものあり、歌ふものあり、放歌高吟、乱舞飛躍、盃を飛ばし、障子を蹴破り、戸をハヅシ、畳を斫り、机を毀し、書物を裂き石川を丸裸に為し、乱暴狼藉至らざる處なし、遂に無二をして嘔かしめ、四日市をして水鉄砲を放たしめて止むコトに決定せり、其時期夜八時頃と内定せり、此段内々御報申上候間其御心得肝要なり、尤も此難を避けんが為め留守を明ける様な事ありては、車夫を合して二十名の壮士勇婦奈何ぞ其儘になし置くべきや、門をぺし折り、戸を蹴破り、家を衝き飛ばして、帰るとの事也、此事豫め御心得肝要なり、若は不便利ならんと指身屋より口取りを持参、只兄は酒三斗を買ひ置かれ度との事、其日は多分今晩か或は二三日の後にあるべし、是は内々宣告するものなり、尤も〇〇〇〇其外車代は各自弁の様子なれば君憂ふる勿れ。

其五 (明治二十五年七月二十六日東京発)

當時余の號は香海と云へり

茫然拝見、一片半黒のハガキ辭簡而意深感慨之念勃々紙上に溢る、夜深人眠四顧寂寥之時孤燈明滅之下俯仰三嘆筆を把りしの時を想思すれば亦一層之感慨を引き候、大に智識を苦ふるの御観念頗る同感、僕亦近來頗る此點に意を注く、然れとも傍に人あるときは決して書を繙かす、是れは僕從來之性行也、故に手塚氏や高橋氏や將た兄也一人にても人來るとき忽然巻を掩ふ、敢て讀書の跡なきか如し、是れ敢て務めて然るにあらす、天性然れは也、人固より徳の以て人を服するに足る者なくんばあるべからす、然れとも徳なるものは眞面目四角張たるものにあらす、其の人の行ふ處、至誠、至公、至仁至義、天理に適ひ人情に協ふより起るものなり、去れは強ち愛嬌を廢せすとも其徳を自然に養へは足り申候と存し候、殊に人には各其特性の在るものなり、其特性を破るは即ち天然を傷ふものなり、天然を傷ふは即ち璞を矯め

て環を作るか如し、環碎て環得べからず、今兄には愛矯的ある猶是れ一の特性なり、此特性ありてコソ人にも愛せられ、人にも悦ばる、若し此二者を削除きて眞面目四角張りた男に變しては恐らくは世人に容れられさる變窟無用の人間とならるべし、故に僕は望む、其天性を俄壊せず、之を適節に爲し以て徐ろに德性を養成せられんことを、鐵膽昨日は不圖好天氣遊意忽ち勃興禁ずる能はず、乃ち笻皇杖を拔し出で其向ふ所を定めず、颺々乎、颺々乎、先つ芝公園地内へ、莅れより進んで芝高輪へ出で、品海一望、是より滊車にて大森へ行かんか、一寸茲で〇〇流の躊躇逡巡の心起り、續て厭倦の心起り、即ち之より歩を返へして、ヒョク〳〵立ち返る途中不圖兄の事を思ひ出し、ゲニ呑海はドウシタロー、例の見臺を叩て小兒等をイジメルカ知らん、イヤマダ時間早やし、小兒も來るまじ、定めし例の感慨塞胸机上掩巻的デフサイテ居るでアロー好し〳〵快談一番車を連らねて一樓に上り晝飯なりとも喫すべし、と直ちに仂車を飛ばして貴寓を訪ひたるに門戸堅く鎖して屋中聲なし、呑海も又出たなと松川媼にも物言はず、歸社して石川は來ぬかと問へはイーエと答ふるのみ、少焉ありて吉岡曰く呑海には土橋の向ふ大石鮨の隣御多福蔷薇の處て遇ひましたとフン其れジャー歸へりに寄るでアロート心待に待テドモ更らに來らず、ドーシタヤラと思ひ詰めし思ひの電氣か通しけん昨夜十二時の此端書

其　六　（明治二十五年十月二十九日東京發）

肅啓細雨漾々轡悶願ふに兄其れ亦例の感慨塞胸机上掩巻的の狀態ならん。ヨセヨセ處女的愁嘆は、高山氏未だ來らず、願ふに今頃は滊車中將來を思ふて心緒百端、例の禿髯を捻ねるなるべし、鐵膽昨日麻布街を過ぐ、不圖目を書店に注く、棚上片々たる符箋の中古今逸士傳なるものあり、名既に隱逸俗を脫す、冊亦頗る奇故、乃ち繙かずして之を買ふ、店主目して語なし、社に歸へつて之を閲するに頗る快、今其一傳を左に拔かん。

顔蠋

顔蠋齊人、戰國時隱居不仕、甞言有處窮方、其藥有四味、

一曰無時以當貴。　二曰早寢以當富、

三曰安步以當車、　四曰晩食以當肉、

蘇東坡評曰、若此可謂巧于處窮矣

右は固より隱遁者の陳語なりと雖とも、何となく面白く感ずる妙語なり、兄は若り
に西洋書を讀め、僕は切りに東洋書を讀まん、內外相和せば、亦以て天下に益する處
あるべし、爲其不盡

其七　（明治二十六年一月十四日東京發）

庚申、兄常に云ふ、予は見る處、遇ふ處、百事百物に對し、一として之れが處分方法を研
究せざるはなしと、僕當時以て無益の事と爲す今史を讀んで、宋張詠傳に至る、詠は
幼にして奇節を好み、位工部尙書に至る、一世之能吏なり、詠の事を處する唯智之れ
用ゆ、嘗て李畋に語て曰く

大小之事、皆須用智、智猶水也、不流則腐、
凡百不用智、則臨大事之際、寧有智來。

則ち是れ事々物々に對し之れが處分方法を研究すること兄の方針と同一轍なり、
故に御參考までに一寸御報知申上候

其八　（明治二十六年七月七日東京發）

鐵腸念々渡清を決し告別の爲めに品川子を訪問したる事を報じ來れる書なり。

拜申、縷縷之御懇書難有候、僕は見掛けによらぬ人間、渡清之后或は想外之變態あるへし、今朝品川念佛庵主を代々木に訪ふ、快談數刻、庵主曰く、一時之支那見物無駄なり、止むへし、敢て忠告す、寧ろ一生支那人となるべしと、鐵腸豈之れしきの事を知らさらんやと云ふ、庵主默す、國民協會を辭して人物を養成す可き事庵主に說く、庵主曰く、頗る同感と、委細は面會に讓る何となく、兄とは別れともなし、併し都合次第一ケ月位は日本に留まるかも知らん

其九　（明治二十六年七月二十四日舞子發）

鐵腸渡清前舞子に遊ぶ。

只今舞子濱松菊樓に投す、白沙青松、波靜穩、遙に對す、淡路島風景絕佳賞す可し、併し
柿本人麻的の愛すべき地、四百余洲幷呑之吾々には適せす、一泊の后神戶に歸り、更
に須磨に至る、隣客得意に詩を賦す曰く西都優柔氣不振と、眞に然り

其十　（明治二十六年七月二十六日大阪發）

高山長幸氏當時大坂三井銀行に在り。

拜申昨日午前友人來り、二日間訪問するを得ずと云ふ、又一方の照會も未た返回に接せず、羈旅悠々徒然に勝へず、直ちに須磨の海に浴す、尚無聊卽ち歸神高山へ電報す「イマユキテモヨイカ」と、高山「キタレムメダマツ」と答ふ、四時三十分梅田着、高山と共に夫の愛々堂に至る、噂の如く妓的二名待てり矣、共に樓に上る、忽ち來る、酒井、淺江、小川の三名何れも銀行員にして高山とは懇意のもの、殊とに小生の事も聞き居るものと見え、舞子入海の事等しきりに語る、皆是凡々的小人就中酒井なるもの年少なれとも怜悧慧巧高山も亦之に信を置きたるものゝ如し、彼等發起にて舟遊に決す、此日天滿天神の大祭禮にて、舟客頗る多く旦日暮に接し、舟の注文頗る難きの模樣なるも、彼等一同の發起、殊に愛々堂主女の取計ひ、イカデ舟一艘位出來さらんや、忽ち用意調ひたり、然るに的物四名の注文中々仕度にヒマドリ、漸く二時間を經て來る、因て共に舟に乘る、初め思へらく高山の注文天神の大祭トテモ碌な舟はなかるべし、何んぞ圖らん一の立派なる屋形船、同船五人以上十人、悠々擢を入れ棹を中

流に立て四顧するに水淸るゝと雖とも、太閤の遺城亦見るべきものあり、祭禮の模樣は篝火炎々宛も太古時代の戰場の實況を見るか如し、殺伐々々顧ふに是亦往時戰爭の餘風今尙存せるものならん、的物は高山の云ふ如く、素人的婦女子のみ妓術容貌共に語るべきものなし、拙且醜野叉鄙客と馴れ易き一見舊知已の如し、舟を遣る一時間餘、大河滔々水漫々忽ち起す入浴の念、卽ち俄かに衣を脫して水に投す、滿舟咸驚愕爲す所を知らず、高山頗る苦惱、直ちに舟を漕かせ僕を迎ふ、僕急流の爲め一丁バカリ流さる、舟に歸りて樣子を見るに、的物一同環目駭視、殆んど異人を見るか如し、高山思へらく阿川醉へりと、則ち他を舟に殘こし的物一人を從へ徒步宿に歸へる、僕亦疲勞金烏の出つるを覺へず、盥嗽の後ち入浴、喫食の后筆を取る、是より京都の古賀へ入京の都合問合すべし、古賀とは交際の工合、高山と異なり格別兄に報す可き事なかるべし、最早日本にては是れ限り兄に報道も致さず候、隨分御用心々々

其十一　（明治二十六年九月十三日天津發）

此書は淸國に滯したる報なり、天津三井洋行宛にて通信すべしと言ひ來れるなり、當時末廣重恭、大石正巳兩氏の著書は彼れの注意を惹けると覺ふ。

拜申、着清仕候、天津紫竹林春元客棧にあれども、鴨宿の郡合もあれば、表記の處へ通信賴み申候、廿九日夜黄海を過ぐるとき兄等之來訪を夢む嬉敷、末廣の東亞の大勢大石の二大政策送附を請ふ

其十二　（明治二十六年十月二日天津發）

拜申僕も都合に依り上海へ渡るべし、女と云ふたら當地には領事の細君一人のみ、時々日本の飯を喰ひに行く、領事は鹿兒島縣の人なり、交際し易すし、僕の如きは日本漫遊者の資格なれば、待遇頗厚、鳥なき里の蝙蝠僕は當地に來て以來も餘まり他に出でず、終日盤居種々取調物を爲せり、固より言語不通なれば、肝癪も起さゝれども、先日豚尾等が、僕の室に來り、ガヤ〳〵と相群集し、書若くは畫を示し、東洋（日本人の稱號）此れは何んと云ふ文字かと、其の音の異なるを聞き、面白がりて大笑傲語、アマリヤカましき故、康熙字典を取出だし、卓上に擲ち、目を怒らして、豚尾をニラミ付けて遣りたれば、渠等大に驚き、東洋有氣（トンヤンユーチー）（怒リタト云フコト）日々に稱して立去れり、此より餘まり豚尾も來らず、大抵豚尾は日本人の如く腹を立てることなし、家屋飲食等凡て日本と異なり、其詳細の事は今日通信の二十二枚新誌に載せらるだけ、認め送るべし、中々チヨツトに陳べ難たし

其十三　（明治二十六年十月十五日上海發）

此の書は餞贈が天津を去て上海に來りたる時、虹口南溝路十八號常盤屋より發したる者なり。

拜申其後いかゞ御暮し被遊候哉、日夜貴影彷彿眉前に顯はれ申候、小生は本月十二日當地に渡申候、航路日數五日を費やし、船賃六十圓を要したり、中々大層な旅行なり、當地に來りても、一人の知人なく、不得止堂々常盤館に投宿、一日一圓の旅賃中々贅澤な事なり、漸やく當軒を見出したり、當分是に居を占む、氣候は天津に比し、頗る暖、袷二枚を減すべし、天津は大なる綿入にあらずんば、寒さを防ぐべからず、大變な相違なり、當地は洋館幾々雲を衝て建へ、車馬絡繹帆檣林立宛かも、歐米の地に住するが如く、絶へて豚尾國に居るの念なし、豚尾等も二頭曳に鞭うち、聯々然市街を馳せ廻る、中々贅澤華麗を極め申候、土地も餘まり汚溷ならず、婦人も自在に溷歩せり、日本のラシヤメン等も隨々得意に歩を勤せり、洵に氣の毒之至なり、僕天津を去るとき、友人の先導にて候家後と申す有名なる遊廓へ、白晝飛込み晝飯を喫して歸れ

り、的屢足を擧げて、靴の紐を解き直す、是れ即ち足の小なるを示す美人自慢なり、國異なれば風異なるも、日本人の目には可笑之至なり、シキリに鴉片を飲めと云ふ、僕試みに一服す、甘味々々、的の名翠紅と稱す、當地は又天津と語音を異にす、天津語にてはサッパリ通せず、不自由千萬肝癪の念次第に薄らぎ、度量次第に洪大を覺ゆ、本月二日一書差出置たり、果して達するや否や

高橋其他諸氏へ別に書を裁せず、君よりよろしく、上海にては支那の眞情知るべからず(上海在留人之言不可信也兄諒焉)僕船中にて小失策あり、事西洋婦人に關す、閑時詳報すべし、要之、僕は支那に來て以來、所感所思盡く西洋人にあり、支那人に關せず、併し日々と一視同仁の感覺起り候、其れに付て筆紙に顯はすべからざる感念を生じたり、是れは兄にあらずんば語るべからず、只兄の電氣感悟を求むるのみ(言ふ可き事頗る多し、筆記者を望む心持せり)毎夜夢頭に上るもの盡く日本の事なり、日本の人なり、併し最も逐日ウスラグべし

其十四　(明治二十六年十二月二十日上海發)

庚寅新誌の主戰論は余と山根立庵と牛肉屋の樓上に於て協議し、立庵其の雄大なる筆を以て起草したる者なり、日清戰爭開始以前半歳に於て日清開戰の必要を說きたる者窃かに先見を誇る所一代の論題となりしが、唯鐵膽等清國に在留せる日本人の意に滿たざりしが如し。

跪白、寒威料峭不相變御健筆欣賀、先日の御送物慥かに拜握、過日來鳥渡南京地方へ參り、只今歸港仕候、因て此に御挨拶申上候、庚寅新誌も改良せられたり、半は兄の筆を以て埋む、御骨折萬謝、高橋は解雇、山根採用の旨、手塚氏より申來、僕餘まり社說等に目を留めさりしも、過日不圖一讀いたし候處、近頃風變の文なり、立意行文共に滅裂讀むに勝へず、顧ふに是れ山根の筆せしもの乎、山根元來社說を裁するの腕を有せず、殊に可笑は千島艦事件之一文經濟雜誌の一贊を得、其ヅに乘て主戰論を草せしこと是なり、而して立意雜駁行文粗笨社說の價値なし、大に紙面を汚かし申候、此儀後便を以て手塚氏へ忠告して社說は他人の手に讓らせ可申候、尤も可笑は社の持論として內地雜居を唱へられ候事也、謹んで問ふ、兄達は眞に內地雜居を以て早からずと爲すか、上海は是れ實に東洋內地雜居の好手本なり、而して其害如何や、兄達能く之を知るか、天下の大局と、天下之眞相とは局々乎として、蝸中に座するものの知る所にあらず、僕寧ろ兄等の輕卒にして憑る處なく濫りに言を立つるを笑ふ

のみ、手塚氏正直に毎回新聞を送る、一は兄の意に出づると感謝す、之に因て見るときは近來日本には相馬事件、黒白轉倒、國會開設、蝸虫角力、千島艦事件世人裂眦漠々浩々たる支那地より之を見れば宛かも一小盆中蟻の相爭ふかことし、寧ろ抱腹の感あり、當地豚尾等は終日營々唯利之爭、併其の割合には喧嘩せず、正當に爭へり、支那は君子國にあらず宗教國にあらず、眞正無垢の大商業國なり、其規模の大にして取扱の巧妙なる、碧眼人後に瞠若たり日本人豈及ふべけんや、婦人知禮義

其十五　（明治二十六年十二月廿七日上海發）

跪白、判襪以來、已に半歳我國之山川人物恍惚として目にあり、一日も懐を脱する能はず先日江寧府（南京）より歸へり、一箇差出置候、さて支那は大象の歩する如くノサリ〳〵と文明の域に進み居候、夫の鐵道の如きも只た僅かに天津より太沽までなりしか、今や灤州まで往來するに至り、山海關まではレールを敷き了はれり、山海關とは御承知の如く、滿洲との境なる萬里長城の終尾なり、其他海軍の擴張工業の振興着々と其の歩を進めり、志士の爲すへき時は只今一時のみ早からすんば則ち嚙臍、併し何分中央政府が頑愚なる滿洲人を以て滿たされ居り候につき新規の事業には容易に手を出たさず、短急なる日本人をして屢驀然斫地の思を爲さしむ浩々乎たり、漠々乎たり、漠々たる支那大陸萬事規模の宏濶なるには常に日本人をして後に瞠若たらしむ、顧ふに支那は極大なる璞の如し、日本は極小なる黄金の如し、黄金は琢磨せすして已に光あり、璞は襲磨を待て初めて玉を得べし、之を襲磨するもの其れ誰れそや、日本人乎將西洋人乎支那勢力を得ると否とは、只斯璞磨の如何に在るのみ、日本の二十六年云暮矣感慨更に多し不宣（兎に角日本人は度量を欠き膽力に乏し此點僕尤も憾む）

漢口の製鐵所の如きも、其長十三町も有之、洵に天下之大工場なるも、愈全國へ鐵道布設に至りなは、到底其用を弁ずるに足らずと云ふ左もあるべし

支那の贅澤には恐れ入る、其の衣服の美麗なるは云ふまでもなく、一寸飲みに行くにも、一盞七八圓程を要す、日本人は中々支那人とは交際出來申さず候、此より一寸寧波まで參る積りなり

其十六　（明治二十七年一月十六日上海發）

余は當時内地雜居論者にして鐵膽は非内地雜居論者なり、而して彼れは上海の居留

地制度を見て內地雜居の好標本と記したるが故に、余が其の談見を指摘したるに被れは此書を以て答へたり。

肅賀新年、一月三日淺草發の賀新狀暨六日麻布出の回答書與共に只今着す、難有拜見、支那實見錄に就ては大に駁擊を加へ、大に諫告誨訓を垂れたり、厚意篤情僕謹んで之を謝す、然れとも是れ未た兄が僕の心事を知らざるに由るべし、抑僕の支那に渡りしは區々文墨を弄し、一片の通信を以て足れりとなすに非ず、別に大に畫策する所あり、此等の事遽かに人に語るを欲せず、亦告くべからざる事なれども、兄の情誼悃篤なるに對し、今一言すべし、僕の案籌種々ある中に、先つ夫の長髮賊の餘黨、哥老會なるもの果して能く清朝を覆倒する程の勢力あるか、人物ある乎、及び政府の忌怖する所の白蓮教なるもの現狀如何の二點なり、此等は決して公然紙上に露布すべきものにあらず、且其の取調の困難迚も口筆の傳ふべきものにあらず、故に通信等の煩を避けんが爲めに、僕は庚寅新誌へも公然と出發の披露はせぬ積りなりしも手塚氏は荐りに之を望み、且つ曰く、倘し到清の事を披露するときは、是迄新誌代金の催促を爲したるも、必竟阿川が到清の費用に充つる爲めなりしと、大に讀者の心氣を悅ばしめ、併せて將來社の信用を篤からしむるなりと、頗る懇屬の意を表

せり、因て僕は其情義に忍ダサレ、然らば簡單に據叙すべしと答へ僕が數行の文字を並べ時評の終末ヘチヨコト示めし置きしが、兄の知る如く其校正は適々僕の留守中に持ち來り、兄と手塚氏と共に校合に從事し畢り、僕の歸社せしとき夫の僕の披露の一文は時評欄內最早入るの餘地なしとて、更に二號文字を用ゐ、一ページ大面に別に一座坐を設くる事に爲せり(其の時は慥か夜十時頃にて、兄と手塚氏とは同道して歸へれり、兄定めて猶記憶せるなるべし且尙政治商業其他の文字も加入せよと請へり、僕は手塚氏の歸へりし後に更に以へらく、斯くすれは必らず僕の身に責任を負はざるべからずハテ困た事ヂヤとは思へども、最早他は悉皆校合濟なるに、今之が爲め變更する如きは、頗る亦手數を增せりと、是に於て不得止堂々一ページ大の披露を爲せり、手塚氏之を見て後ち大に悅色を顯はせり、披露の始末大略如此故に天津到着の後ちも更に通信に意なかりしも、手塚氏又書を裁し、最早其地の事情も分りたれば通信せよと言へり、因て忽筆を把て通信を草せり、其の後上海に來り、又其の地の通信せよといへり、因て仕方なく旅宿の事態を記せり、是豈僕の本意ならんや、乃ち通信は眞の餘事のみ、全力を擧けて此に注くものにあらず、然るに今兄は此の餘事なる通信を捕へて、僕の觀察の精透ならずとて、調査の粗漏なる

を森實實世に書を得たりと云ふべけんや、然れども僕もよ性疎放なり、實精勝を欠く兄の垂教僕豈空ふせんや、謹んで服膺すべし、僕を以て支那に人物を養成するが爲めに來たりたりと云ふは、是れ先きに僕が日本人は度量に乏しく能力を欠くと言ひしを補へて駁したるものなるべし、敢て弁する必要なけれども、序に一言し僕のみ新く着々弁し來るときは兄と議論を上下するに似たれども、僕は敢て兄と吾戰を試みるを欲せず唯弁せざれば條理通せざれはなり、僕が内地雜居惡弊の好標本は上海に在りと言ひしを駁し居留地制度と内地雜居の區別を設けり、僕如何に世事を疏親するも二者の區別位を識別せざらんや、唯文辭簡に失し其意の存する處を兄が酌み取らざるに由るのみ、僕の上海を例に擧げしは決して二者を混同したるにあらざれども凡そ日本人と歐人と軒を並べて居を同ふするときは、日本人の下等社會の無分別なる勢歐人等の金光に眩迷し、風俗を紊亂し、志操を壞爛するの點に至つては上海に於ける日本人と、夫の長崎、神戸等に於ける有樣と毫も異なることなしと思ひしが爲めなり、兄は其内地雜居と居留制度との性質を異にするが爲めに日本人の心情まで變異すべしと云ふ乎、豈に亦思はざるの甚しきや、要之二者着異に實差ありと雖とも、日本人の心を亂し、風俗を壞る點に至りては變

も變はる事なし、凡そ大人と小兒賢者と愚者、其室を同ふするときは、愚者恒に不利にして小兒常に損を受くることを知らむ、今日尚は遽に内地雜居を行ふべからざると明かなり、日本人如何に敏捷なりと雖とも、如何に大和魂ありと雖とも、尚未だ歐人の智と才と金とには及ふべからざるものあり、且夫内地雜居は、必竟政府が條約改正を談判する好材料として持出たすもの即ち條約改正を購買する貨物と爲すものなり、決して内地雜居は許して利ありと思ひしが爲めにあらず、ソは兎も角中夜人眠之後靜かに之を思ふて果して然りと思はざるか僕は之を見等の良心に訪ふもの、理窟の關雲は束なり、僕は到着以來晝夜となく、無寒に横行したる上に氣候風水の變に遭遇したる爲めか、過日來胸部微痛を覺えしが遂に一昨夜吐血せり、併し大層な事はなし、細々たることなり、脫し膈小胸率の人間なれば或は驚愕すべきも僕は固より此位の事はあるべしと豫期したることなれば今更驚かず、唯醫者より酒だけ嚴禁せられたり、是一事尤も閉口せり、兄幸に自愛せよ到着以來愉快を覺へしこと一剌もなし

夫の哥老會の事情並に白蓮敎の樣子は僕稍や其の端緒を知るを得たり、本月三日上海を發して安南に至れる金子新にも導ら此の意を言ひ含め、此れが探偵に當ら

しめたり、分り次第報道の事に致し置き候哥老會は政府之を怖るゝこと最も甚しく見付け次第斬に處する特法を設けり、金子はモト軍人頗る素直辭令に巧みならず、故に或は誤まりはせぬ乎と頗る憂慮せり哥老會は多く賣卜者或は鬻粥者に身を變せり、殆んど僕等は其人相言語を以て之を見分け得べし鬻粥者に身を變せる所以のものは夫の長髮賊の天王洪秀全が空腹の時粥を喰み其の販粥翁より一の同志を教へられ是れより兵を擧ぐるに至れるが爲めなり、支那是迄の探撿者は唯た軍艦が何艘あるとか機器局が何程あるとか或は兵隊が何人居るとか、唯た器械の數、人頭の多少を以て之れが說を立つ然れども之を取扱ふ所の人の性情を察せずれば何の益にもなり不申僕は專ら此點に注目せり、近來の庚寅新誌を見るに全章一も經濟に關する文字を見ず、空言虛論看來れば一の少年書生新聞となれり、聞けば手塚氏は三疊半の八方にらみの硝子窓の內に會計室を設け、此內に座し居り編輯は二階なりと思ふに兄と山根との二人編輯を受け持ち手塚之に干與せざるか爲めか少しく注意すべし

其十七　（明治二十七年二月二十二日上海發）

書中宗方大亮とは宗方小太郎氏の事なり。

庚申、日本橋畔よりの惠柬一讀す、平素之文章に似ず頗る感情に驚馳するの句多し、覺へず僕の心神を盪動せり、況んや近來當地曇濛鬱悶の折柄、亦一層の情を感せり、殊とに梅花未相開かず、二分三分位也の語、去年の當日を想ひ出だし、感慨轉た勝へざるものあり、幾んど飛び立つ思有之候、僕最早支那の粟を食むこと半年、稍や土着の心を增せしむるも、中夜夢想猶故國を脫せず、まして高潔淸瘦の梅信を耳にするに於てをや、嗚呼去年臥龍梅を看るの當時、其光景宛然猶目に在り、感慨々々々々さて新誌撥刊之事、甚殘念千萬、固より到底永續之見込なき事は、小生の鈍眼なるも夙に察知せり、然れども如此急遽倒斃を見るに至るとは、返す〳〵も殘念なり、廢刊の事は先月上旬手塚氏より、其趣を報したるを以て之を知る、其報書を讀むに、字々血涙句々悲慘、且つ其筆蹟を見るに、頗る晦澁暢ひず、紙面處々涙痕あり、僕之を見て覺へず落涙岑々たり、因て僕はセメテ庚寅新誌の名たけは存し置くべく樣手塚氏へ勸告いたし置き候、嗚呼手塚氏は四年新誌と情義を同ふす、之れと離るゝこと猶は妻子と離るゝの思ありと、自ら言へり左もあるべし、僕とても三年の深緣あり、豈一滴の涙なからんや、殊とに憂ふる處は三ヶ年の間僕萬事一身に負擔せり、然るに

僕去るや、僕が半年を出でずして廢刊を見る、僕甚だ其銀主に對し濟まざる所のもの有之候、所謂「阿川は尻喰へ觀音」なりと、或は評するものあらん、是れ僕の最も憂ふる處なり

兄が信府日報に赴くことは、去月上旬手塚氏よりの報に依て知れり、僕も到清而來非常なる不快と苦痛とを嘗めり、顧ふに其の實況僕語るとも兄信せざるべし、幸に天太良を見捨てず、吐血も最早癒ゆと自信する程に至り候、今日は吾信友と大白を浮べて豪談する程となれり、兄安神せよ、僕も當地語るべき友なきも、獨り宗方大亮なるものを得たり、是は年已に三十學あり、識あり、殊とに支那には十七年清佛戰爭以來、十一年の間四方內地を跋涉し、爾後日清貿易研究所の創立委員にして、通商綜覽も彼れの手に成りしものにて、支那の事談す可し、僕は每日是れと往來時事を談するを以て無上の快樂と爲せり、今日大白を浮べしも、必竟彼れが今晩の船便にて漢口に至るが爲めなり

僕は最早決心したり、今月末に北京に至らん乎、國に歸へらん乎と、多分北京に赴く方眞に近かし、萬一國に歸へれば、直ちに東京に赴くべし、亦共に談笑することあるべし、假令北京に至るも、今夏は一旦歸國の覺悟なり、茲に兄に談すべきは、兄倘し日本に於て當分ブラ〳〵なれば寧ろ決然思を飜がへし、支那に來りては如何、支那頑固と稱すと雖ども、規模の大なる、文物の盛なる、迚ヲモ日本人の想ひ及ばざる處のものあり、近來の大勢は、駸々乎として東洋に注蝟せり豈爲すべきの地にあらざらんや、倘し兄の決心するあらば、僕も兄と共に大に支那內地に運動を試みんとす、男兒坐して六十餘州を蹂躙せんよりも、寧ろ進んで四百餘州を睥睨せん、其雄圖豈同日の論ならんや、兄の心果して如何、支那は法律制度の七面倒なく、實に自由國なり、鯤鯤を振ひ、鵬翼を張る、支那を措て、亦他に國なし、如何々々船賃も天津までなれば、神戶より三十九圓を要すれども、上海までなれば凡そ神戶より二十圓位なり、兎に角直ちに返事せよ、不宣

其十八　（明治二十七年三月十日上海發）

拜白只今兄と手塚氏と高山氏との書狀同時に來る、先づ兄の手柬を開展す、高橋をして庚寅の名目丈生存せしむべき御心事感佩々々、手塚氏の書柬に妻は二月八日國へ還へし、高橋武正と三谷とは已に解職、新誌は三月一日を以て運命の生存を決す、故に三月十六日の發兌を見ば、永續なるを知れと云ふ臨書撫然信府日報は僕の

豫想とは別物にて、基礎牢固なるよし洵に兄の爲め安堵せり、僕の將來の爲め兄心を碎くものに似たり、厚情萬謝、僕は業已に天涯の漂客天を笘にし、地を枕となし、雲雨は我が裳衣なり、四海比隣億兆同胞何れ行くとしてか我が栖居ならざるはなし、到處青山骨可埋、兄已に鰯の頭となる、或は漂然兄を訪ふ事あるべし、請ふ能く歡遇せよ、然らずんば僕白井小助を學び、兄を苦しめん、兄の支那に來らざるを以て敢て卑怯因循とせず、兄の境遇と性稟とを知ればなり、兄には敢て支那行を望まず、歐洲に至らんことを欲す、希くは蘊畜時機を待て、宗方太亮とは、兄の考の如く宗方小太郎なり、渠れ膽と識に乏しからざるも、日清交際の密邇ならざる中は恐らくは、事業を爲す能はざるべし

其十九　（明治二十七年五月廿六日上海發）

鐵膽上海出發前の書なり、方さに日清戰爭破裂の前なり。

拜申、近來大無音仕候地方新聞の御大將知らず、意に適するや否や、小生爾後少々胸中不平の事起りしも、今や悟る處ありて、本日當地出發、香港新嘉坡を經て、暹羅に渡る覺悟に候、少々無理肝癪之旅行なれば、或は少々身を勞する事可有之候得共、又は

覺悟之前に御座候、渡暹の上は一報可申上候、先は出發に臨み一筆向暑の候御用心肝要にそんじ候

再白小生毎夜の夢頭、支那西洋あるのみ、殆んど日本の事絶へんとせり、去春二月而來日本の萬象絶えて目に映せず候

其二十　（明治二十八年九月二十二日磐谷發）

本書は圖南商會設立の爲めに歸國せんとする前の書面なり。

虔申來る九日拔錨の佛蘭西メールに乘り込み、一先安南國に渡り又更に上海に赴き、十月初旬東京に出づべし三秋の久しき、誠に懸戀の至に堪へず候、希くは萬事擲棄して東京に來會せよ、臂を執て東洋の大勢を語るべし

其二十一　（明治二十九年六月二十八日東京發）

鐵膽昨年一たび東京に歸て圖南商會を設立し、前田又三郎を伴ふて磐谷に赴き此年再び歸り、之を擴張して株式會社となすの議あり、余は其の支配人として從事するの約をなし、一切の計畫をなす、議一變して余は信州松本に歸る、磐谷へ同行の約束も困

縣となれり、當中森村氏とは森村市左工門氏下村氏とは下村善右衛門氏富氏とは富豐吉氏なり。

扨白、松本發の御書面拜見、夫の下村氏は手塚氏の處まで當度は出金出來難き旨申通し、手塚氏平氣にて之を引受く、僕驚て之を森村氏に報す、森村氏不平なり、即ち非せ行て、又下村氏を訪ふ、不在なり、去て野村氏を市宿に千葉より徹夜にて訪ひ富氏と會合談する處あり、更に又昨日午後下村氏を訪ふ不在也、今早朝又下村氏を訪ふ業已に橫濱別莊に到りし後なり、直ちに跡を尾して橫濱野毛町三丁めの門を叩く、又業已に外出の後なり、只今茫然歸京仕候、右等の事情につき事業は多少遲延すべく賢兄同行も今確言いたし難く何れ貴地の方今少しく手を切らぬ樣願上候方角違の仕事肝癪に障る事多し胸惡るき事多し

其二十二　（明治二十九年七月二日東京發）

扨日來の御盡力にて內部の情況を報じたる書なり、余は眼睛を呼して安靜關商會の會營組織に關して云々の如しと云へるか故に彼れ辨せるなり、安藏とは野心を包藏して表面君子の如きを云ふ鹿飾とは野村庄之助氏の號なり。

度白芳翰拜見、過日の事業につき、種々御盡策難有拜承仕候、鹿飾を訪ひしは下村氏盛龍の結果、森村氏不平の降尖を避くるが爲め、且つ根本たる棄れ等の心事を確むるに御座候として野村庄之助來京せり、武井忠五郎氏と同行なり、武井とは木更津に於て鹿飾面會の約あり、會了の后、晴嬉乘船せしなり、鹿飾は二泊の上歸鄕、武井は今尙成瀨に同宿、今朝は共に森村氏を訪ひ將來の方法につき意見を聞けり、森村氏の噺に今二三人の同志を募るべしと、固より募らざるべからず、武井と同謀是れより紫手可仕候、縣氏も今朝來訪せり、是は千葉歌道發起人誘說の爲なり、武井直ちに發足人となり、二百株を引き受けり、武井氏は今四五日同宿の筈なり、發願は又々熟頻下剃の昔報道せり、草本は昨日來訪せり、目下芝口の蓬萊屋に止宿せり、現今は森村氏を丸潰大器より重く仰き居候、圣く渠れの手にて左右せられ候、武井君は夠かより森村の師弟と爲る方得策なりと主張し、野村氏と一衝突を起したり、今日森村氏に面會せしめたる結果、登々其度を高め申候、武井氏は少しく目か鬼へ申候原氏の書によれは武井氏は遠離事業を獨りて專ひ取りたるが如くに見へ、武井は大に遠慮顏なも、固て自身は決して然らず、野村氏よりの依頼を受けて着手したりと、辨

を爲し、其結果遂に是はり原と高橋を說き落して、加入せしめることに相成り申候
世の中の事は妙なり、玄徳の目には隨分面白し、若し當地にて行かねば又々兄の心
を傷ましめん、小林樟雄氏には未た面會せず、是非面會したしとの趣きにつき、岩本
主人となり、近々閑靜の地を撰らび、會合の運びに相成り居候、ナイヤオムは屢々來
訪、昨日は川崎に連れ行き、麥藁細工を一覽せしめ申候、萃りに弟に心を傾け岩本、山
本、大山抔には一切關係せず、偏へに君に賴るドヤ板本に會はして呉れと申居候
返す〳〵も弟を以て玄徳流ナゾのシヤレは御禁物に候、田夫野人は眞面目に引受
け候ゆゑ、早々頓首

其二十三　（明治二十九年八月二十七日東京發）

度申、廿三日付之朶雲なつかしく拜見いたし候、是迄もなく恐札差止く可き之處、御
高察の通り先々羽はり京都へ下り、九月には當地へ御立寄之趣御報知有之候に付
御不在と心得故、夕下差控へ居候義に御座候、去十日前后名古屋京都大坂神戸へ龍
越候につき、京都に於て御面會せんと手を盡し候得共、覺に曖昧の中に葬られ其意
を果し得ず、甚た遺憾千萬只兄の上京を竢ち居候のみ、夫の岩本千綱は別に拾萬圓
にて株式を組織し、切に合同を申込み隨分七面倒なり、兎に角紛々たることは願み
ず來月五日頃出發の心得に御座候、兄とは同行の約有之候につき種々心を配り候
得共殘念ながら當度は御猶豫奉願上候、候今年末若くは來春歸朝の節は必らず御
同行可申上候、僕は近日頗る腦を痛めるに付き過日來千葉宿毛の海氣館の海水浴
に臻り、其后諸方葬せ遊び候も皆氣に喰はず、不圖思ひつきたるは夫の目黑の不動
の瀧なり、直ちに試み候處思の如く遊客少なく冷瀧亦頗る腦によろしく因て該地
第一等の酒亭橋和亭に乘り込み極上等の一室を借り受け、東京の際を窃み、一泊一
冷心を樂ませ候、現に昨日も午前事務を了へ、飄然該亭に赴き泊、今早朝瀧浴一番も
て歸京仕候、先年將軍と同遊の事を思ひ出たし、徐ろに懷舊の情を興こし候、今年の
亭は先年の亭にあらす、今年は妓的も四人在り亦新橋の的物も四五名百姓家を借
り受け、瀧保養に出懸け居り候同是同浴之友なり、兄は僕の出發まて上京は六ヶ敷
や願くは今一度面會致度御差繰奉願上候先は爲其早々頓首

其二十四　（明治二十九年九月十四日神戸發）

度申、東京へ向け御呈出之芳狀拜見、直ちに御返書可呈出之處、例の俗事紛々に妨け

ら れ、竟に返答不致、失敬仕候今年末若くは來春歸朝之節は、必らず御同行可申上候
岩本一派の組織も圖らざりき、僕二十年振りに遊歷せし宍戸隼太なるものに妨け、
られ、殆んど瓦解せり、是よりは僕の運と腕とに憑て遞羅事業は左右せられ申候、東
京圖發の前日、森村市左工門氏を大磯に訪へり、共に晩盃を傾け、薄か精神を顯はせ
り

再白、生は十一日、早朝東京出發、海上風波の爲め稍やく只今到神、明日正午被備の
土佐丸にて香港へ向けのり出し、夫の中村背水は本月末チーキ封伐り出しの爲
め渡遞すべし、外務省の小村氏を訪ひたり遞羅には公使館を置き領事を兼ねる
都合なりと云ふ是より遞羅多し

其二十五　（明治二十九年十二月十四日磐谷發）

遞羅着發後の書なり此時チロルンクルン街に移轉せり。

度申、無事當港着來十七日午後發の英船黄蓋號にて渡遞可仕候、遞羅王國は業已に
爲め、並に香港よりは目下積荷稀少便船無之爲め、非常の延着、稍やく下記の處へ轉
居本日より開店仕候、中村彌六、馬場新八等は先日到着、日夜奔走罷在候

チロルンクルン街に移轉して間もなく又轉居す、三十年四月又渡航す此書は其の中
途香港より來れる者なり。

度申、無事當港着來十七日午後發の英船黄蓋號にて渡遞可仕候、遞羅王國は業已に
出版相成り候や、此狀着次第磐谷へ向け御返信待入候、益田三郎は四人同行不圖同
行同船せり、古賀は健全に隨へり、山口にては母と會し、温泉に浴し近來の快を覺へ
候、先は爲其早々頓首

其二十六　（明治三十年四月十五日香港發）

其二十七　（明治三十年五月十一日磐谷發）

遞羅王國出版の協議成り、余之を執筆する任に當る、時に余は中央新聞記者たり。

度申、十六日付之芳翰拜見、遞羅王國最早出版後と思ひしに、未た了せずとの報に接
し、時機を失せざりしかと窃に憂ひ居候、此狀着次第御出版奉願上候、稻葉公使の序
文妙也、御加入被下度、世界主義平等主義は御説の如く、公平也可服膺候、磐谷タイム
ス昨日より僕の手より送附す、（是迄はタイムス社より直送なりし）右タイムスは御
一閲之上は、森村氏へ御轉送被下度、御轉送の初に阿川より送り呉れとの一言御傳

へ置き被下度、稻萬公使へ對等條約の說法贊成に御座候、到着之上は實行すべく、其內は用心、古賀は十年前の快象にあらず、凡夫に少し毛のハエタ位也、恐る可き點なし、吾兄の先見服々々

其二十八　（明治三十年八月二日磐谷發）

明治三十年の卷、余布哇に赴き、歸朝後一番に發す、其の返書なり。

庚申、六月三十日付之花札久振なつかしく拜見仕候、御歸朝之早きには一愕仕候、布哇問題は究竟如何、可相成候や、御高見御洩らし被下度、人間は二十五を超へは、其發達は驚くべき程進むものには無之、吾兄も一寸布哇に往たとて、左程變異は無かるべし、前田又三郎はかのおつると共に、去六月廿六日歸朝致させ申候、最早歸鄉之事と存じ候、當地も稻萬公使來て以來稍や外國人の注目する處となり、條約にも外人が容喙せるよし稻萬閉口の姿なり、公使は八方美人を學び只だ〳〵日本人醜業婦にまて愛嬌を振り蒔くが如く、腰の弱きには手の付け樣なし、稻萬序文の事は萬承諾せり、併し數月を要すへければ貴地にては品川子の題辭を得たる上は稻萬公使の序文を待たず、速に御出版希望の至に勝へず候、武井は郵株下落の爲め、二萬圓の損害に懸り候よし、所謂泣顏に蜂とは此事也、野村は叔父死去のよし、古賀快象は去六月歸朝最早歸着せり、役に立たず、村夫子而已矣、噫世界には人物なし、深川の久次米材木商店より、林登門なるもの材木視察の爲め當地に來り、ッゲノ木千本を積んで歸へれり、此者に遲羅新聞數枚を托せり、此ものは材木に付ては共に語るに足る、就て御聞被下度、僕とは當地に於て最も親しく交際せり、新聞の材料充分あるべし、ドーダ何とか事故を設け、遲羅漫遊如何、待入候、前田已に去れり、好き番頭所望なり御心當なきや、布哇並に目下の近情至急詳細御報知鶴首希望仕候、夫の岩本千綱は目下芝口一丁目迷菜屋に投宿せり、夫の山本銀介は安南に於て逝去せり、不惡なり早々

其二十九　（明治三十年九月十三日磐谷發）

庚申、八月二十一日付の芳柬拜見、小生は都合有之、今年中は歸國致さず候間、遲羅王國至急御送附被下度候、右は小生が商業擴張の一手段と可相成候に付、倘出版費用不足候時は、辨償可致候間、兎に角至急奉願上候、快象の早歸朝は深き理由あるにあらず、決して圖南商會規模狹少なるに不平を起こしたるにあらず、到盤馬車に乘て

商會に入るや、渠れ驚きアー立派なる店だと云ひし程なれば、此點について不平なし、又僕が快象を冷遇したるにあらず、寧ろ渠れは僕に對し氣の毒な感を抱きし程に御座候、其歸朝の原因は御說の如く炎熱の候に來り、荐りに暑つし〳〵と叫び、手に團扇を捨てず、バタ〳〵遣かし、手當次第扇子を攫み取り幾本揮り破りしか殆其數知れず、と前田か屢ッブヤキ候事と、俄に故郷か戀しくなりしは、慥かに其原因なれとも、其主なる處は渠れ初め以へらく、外國の地英語を解し得は事足れり矣商事成な然りと、然るに商會に來て見れば悉く遲羅語、前田は帳簿を把て帳場に控へ、藤田常松なる小僧は客人の命に應し、物品を持運ぶ、商會は此二人にて足れり、亦扇んぞ啞同樣なる快象を要せん、全く快象は不要の人間なり、故に快象自ら僕に語つて曰く余が如き者を店に養はんより、藤田の如き小僧を養ふ事利益なりと、是れ其の主なる源因、其次は宛かも雨氣に際し、物品の賣れさる時に加へて、前田とおつるは交る〳〵病床に臥し、外國醫の五圓の每回診察料を取らるゝを見、其上に啞の如き食客居りてはと切に氣の毒に思ひたること是れ其次の原因なり、其次は快象性頗る潔癖遲土の汚、遲人の臭をみて渠れ鼻をツマむ事度々有之、若し食事の時遲人がマークを咬みながら、赤黑き唇を反して談する時は、渠れ其臭に勝へず食事を止むることありし程なり、先づ右等の源因に御座候、到底快象は實行家でなし、僕過矣人を見るの明なきこと兄に讓るべし、然れども長道中自ら酒を喫せざるに僕の如き好酒家の談相手と爲りて娛ましめし事と盤谷滯在中每夜僕に向て歐洲の歷史と耶蘇教の談話を爲せしことは頗る面白かりし、前田はおつるとは長崎に於て分れ涙金を遣る樣に致候處、野村は曰く、凡て大事を爲さんと欲せは、其位の瑣事を顧みるを要せず、捨て置て可なりとて取り合はず、前田も鄕里に歸へり甚だ不面目、野村氏も好遇せず、因て速に渡遲致度懇請すれども僕は素手で來る事は許さず、店には目下藤田と申す小僧と高木と申す遲語に通曉する者と夫の日清貿易研究所中鉢々の聞へありて、曾て上海に於て斯人間なればと思ひ居たる角田隆治郎、當度益田三郎が材木伐採の爲め通辯上顧問的に連れ來りたる處、益田と衝突分離したるに因り、僕の處へ投せり、洵に役に立ち候、此外に遲婦一名を使役致居候につき、不足は無之、僕は十月歸朝可致筈の處、先達賣上金を送り、荷物を徹し、今日中に到着し了る、之を賣捌には少なくとも三ヶ月間は要すべくにつき、今年中は歸朝出來難く候

御忠告之日本銀貨買占は、運矣々々、丸に扳目なきチャン〳〵今春より當地へ買占

に來り候趣にて、最早當地には無之、探索の上僕か百圓程は有之候得共、是とても壹
割の兩換貸を要す、隨て銀行爲換も暴騰壹割五歩、小商賈の利益は悉く爲換料に支
拂はさるへからす、御說の如く日遲貿易頗る窘頗屯因て僕は內地に一支店を開き、
物產を漸次に買入れる事に決し、過日來諸方探驗に廻り居候、佛蘭西の占領したる
チエンタブンよろしく考へられ候
今日は荷物到着の日にて頗る繁忙なし居候につき、茲に擱筆重々ながら遲羅王國
至急賴み上候、稻萬公使は多分十月歸朝、遲羅公使には上海總領事大越が來るとの
風說あり、實際如何、小林樟雄氏と田村三治氏の對話宛も其現狀を視るの思あり
今頃は定めし好時候、一杯遣るへきの秋、羨慕々々當地は炎熱如燬燈醪以て慰すの
み、到遲の途次、尾の道の酒亭に上れり、風景絕佳、今尙在于目矣、噫ゝ日本は美邦なり、
先達は兩國橋落ちたる由、定めし混雜なりしならん

其三十　（明治三十年十月二十九日磐谷發）

余遲羅王國を編して東京經濟雜誌社より發行す、其內三十部を鐵腸へ送る。

度申、遲羅王國三十部御送り被下慥かに落掌仕候、種々御高慮の段奉謝候、兼て御願
申上置候人名へ夫々御送附被降候や、尙未たしに候得ば御面倒ながら至急御賴み
申上候、さて當度當國電氣電燈會社より試驗の結果、日本炭を購入方、稻垣公使へ依
賴候に付き、公使直ちに炭は三菱、船は郵船へ申遣はし候處兩方とも期限（十月一日
限千噸）切迫につき斷はり手紙參り候、然れども此仕事は中々面白き事につき、遣て
見たらドーダと、公使態々使を立て小生を呼び相談致し候に付き、小生早速承諾い
たし候、因て公使は電燈、電氣兩會社は勿論、其他の口をも約條締結の任に當り候事
を約し申候、成程此仕事一番遣つて見たく相なり候間、何卒兄は貴地に於て船と石
炭の方御盡力被下度候、船と石炭との出口出來候はゝ當方に於て直ちに公使と共
に賣買の條約可致別東は右に關する公使の返書につき材料の一端に是出申候、當
國王は來十二月歸國可致、其迄は條約締結見合の事に御座候、公使館無事に苦む、當
地の領事は一昨日新嘉坡より到着、御世話人ばかり多くて御世話を受くるもの更
に來らず、蓋し條約の如何を見定めてからならん乎、過日森村組に銀主相會し、協議
の結果、小生を呼び寄せ、事業の伸縮を決する旨申來り候へども小生は來春ならで
は歸り不申候、先は右御禮旁御願申上度如此に御座候早々頓首

其三十一　（明治三十年十二月六日磐谷發）

歸朝前の書翰なり。

虔申、御手紙拜見、小生は今月廿六日出發、歸朝可致に付き、夫の岩本に於ける、田舍者の渡遥は、夫迄出立御中止なさるべく、小生不在にては事辨せず、倘し岩本同行にては小生不在に乘し搔き廻はすべし、旁御中止方御取計被下度、稻萬公使は國王歸朝までは拱手茫然たり、國王は今月十六日午前十一時歸國すべし、露國公使と共に歸へるべし、露公使歡迎の爲め準備甚盛なり、前田は目下京橋區の撒水に從事せる旨通知來り、哀れなり、倘し今度歸朝謀成れば兄を偕ふて來るべし、一見するも一興なり內閣はゴタ〳〵するよし

其三十二　（明治三十年十二月十二日磐谷發）

虔申、十一月廿日の芳札拜見仕候、三河の酒井等一件相運び候とも小生歸朝までは御引止め被下度、小生は本月廿五日出發歸朝可致候、稻萬公使の件、小生は此位の見易き仕事は無之とぞんじ候、仰越の一件、早速公使へ取調方依賴致置候、目下小生方には角田と申す英語を解するものと、高木とて遥語を解するものを抱へ居るにつき如何なる取調も出來可申、此度の調査の如きは、左程困難には無之候、電氣會社には業已に石炭を須ゐ居候、さて又此度小生召喚につき、御憂慮被下難有、小生は兼て申す如く、一生涯には一度乞食と入獄の境を經度考居候得共、天未だ此境に入らしめず、殘念にぞんじ候、最早此書限り書面呈上不申、大兄よりも御呈出無之樣願上候委細拜眉之上萬々可申上候先は爲其早々頓首

其三十三　（明治三十一年四月二十八日鹿野山發）

此年鐵膽又歸り來り直ちに千葉縣の資本家を訪ひたる時の書なり、當時余は松本君平氏と共に太平洋協會を設立し共に幹事たり演說講演に從ふ、其の講演筆記は松本氏の雜誌「大日本」へ掲載したり。

虔申、氣分惡しく飄然鹿野山に登る、山頭の風光不可言、氣未暖人未登頗る清閑、清閑の餘大日本を讀む、其大日本なる題額は松本氏の稟性と云ひ、學問と云ひ、其の紙面に顯はしたる挿畫、論文、其他渾ての事實より如何にも不適當の樣、考へられ候、右は全く世界的に近し、併し世界的と云ふては餘まり廣ろ過ぎるゆゑ、兄の過日の演說

の如く、太平洋と改めては如何、左すれば題額旭の處は波に變へ、其波の上へ太平洋の三字を記せば頗る妙なり、隨て其社名も太平洋社と改め候へば、一つは太平洋協會の機關とも相成、名實相適、一擧兩得、其賣高も從つて增加すべく、兎に角、大日本なる名義は品川子が世界なる雜誌を發行するが如く、甚不妥當なる樣愚考仕候、清閑の地局外者の評御一考の價値可有之、松本君とも御相談可然候早々頓首

其三十四　（明治三十一年九月十四日磐谷發）

此年歸朝後の書面なり。

虔申、先達到着之一報いたし置き候處、御入手被下候や、當地語るの人なく孜々子立無聊不可言、唯だ鬱悒一斛排悶の外なし奇事珍聞御報知を俟つのみ播州舞子海濱の遊は愉快なりし爲其早々頓首

其三十五　（明治三十二年三月二十二日磐谷發）

高山長幸氏當時三井銀行本店副支配人となり、高橋光威氏は歐米漫遊の途に上れり。

虔申、久振蘭札に接し、なつかしく拜見仕候、高山は本店の副支配人となり候由、是は渠れの性質上適當の途に入りたる結果なり、雄峰も歐米漫遊の途につき候由、有志者必成の謂なり、雄峰廿四年初めて面せしとき、已に其意を示せり、遂に今日に至りて成れり、可祝々々、鹿傍は不相變颺々乎として居るならん、渠近來東京に於て某子爵事の材料と爲すに足る、先つ一握千金的の事適當ならん、渠れの容姿は以て一仕と談し、貳萬圓計工面して、小生の事業と提携云々の事申來れり、此等は彼れに出來得べき事と存せられ候、兄一臂の勞借し賜へ、是れ決して小生の爲のみならず、抑亦渠れの爲なり、副島八十六渡遞せり、渠れは當地の櫻木商店主山崎喜八郎等と、大隈伯の手を以て、諫早の山本喜三郎を說き付け、石炭二千噸と雜貨を滿載して盛に貿易を營めり、其山崎の店は僕の家より僅か十軒ばかりの距離のみ、爲其早々頓首

其三十六　（明治三十二年五月十五日磐谷發）

遞羅東海巡遊に上る後報なり。

虔申、夫の山崎喜八郎が諫早の山本喜三郎の石炭二千噸を日本船幾內丸にて積み來り、併せて雜貨を滿載して來り、日遞商會と題し、盛んに遞羅事業を營み候旨、先達

申上置候所其後石炭は、銀行に抵當と爲し、漸やく壹萬圓を借り入れ、ホーホーの體にて歸朝致候、其損害莫大のものに御座候、既に石炭に失敗して、日本船も會員も大半歸れり、雜貨店の方は如何と見るに日遲商會總監督長高垣なるもの什て少しく禪學を學びたりと聞きしが、遂に山崎と大衝突を起し、其結果斷然分離したり、山崎は物品悉皆日遲商會より引取られしにつき閉店致候、而して日遲商會は小生の指揮の下に家屋を借り棚を買受け、堂々一旗幟を擧げたり、日遲商會は當度三萬圓の損失なる由、此れが回復の道を圖るまでは如何なる苦辛を嘗めても厭はずとて會員一同勉強致候、山本喜三郎氏も炭礦を所有せる由なれば、事業の見込相立たば數萬の資本を投ずる決心ある樣見受けられ候、さて小生も此儘にては面白からず、因て來廿日當地を發し、佛蘭西領に向へる沼海各港並にカンボヂヤの中流を貫き、夫の佛領に歸したるメコン河を溯り、遲佛境界守備の實況、並に該地の物產を取調可申候、果して成效せば、其裨益決して鮮少にあらざるべし、實見之結果殖民事業を起すやも測られず、委細歸磐之上御報道可申、實見記も新紙材料として御報知可申上候、其內御身御大切先づ一ヶ月位にて視察を了ふ可し、早々頓首

其三十七　（明治三十二年七月十六日磐谷發）

當時余東京每日新聞を主宰せり。

虔申、東沼海探檢は目下西南の季風吹き荒み、船頭縮首如何程銀貨を揮かしても應せず、僅かにチャンダブーン迄漕ぎ付け、茲に於て同行者中二名熱病に斃れ、竟にメコン河中を溯ることを得ず、空しく一旦引還り候事、殘念千萬、來十一月を期し、必らず實行可仕候、併し磐谷を出て、昨日歸宅の間四十五日を消費し、其間內地陸行をも致候得ば敢て興味はなかるべきも亦遲羅を知らざるもの丶爲めには多少利する所あるべきにつき、近日頭の清き時把筆投稿可致につき、御斧削の上御登載可被下候

兄今每日新聞一人舞臺なる由、凡そ人は元氣盛滿の時必らず一花咲くべきものなり、兄の年齡境遇實に一花咲かす可き時なり、此時機を失する時は元氣消耗亦何事をも做し得ざるべし、其元氣の盛旺なる時は、百事皆通者也、世の批評事の是非を問はず、構はず遣て遣て遣り飛ばし賜へ、必らず成效するものなり、萬一失敗するとも、其名業已に世間に布き渡れば亦可なり、復曷んぞ躊躇するを要せんや、此時機を失

せす細君をも必らず迎へ賜へ、此時機を過ごしては君は決して好配を得ること能はず、僕今日之を明言して置く者也、夫の岡十郎は今度十萬圓の捕鯨會社を設立、其器械買入並に漁業視察の爲め諸威へ出懸けたる旨香港より通知せり、渠れには、此類の仕事至極適當ならん、渠れ又山口町に長周日報なるもの獨立にて設立の旨申越せり

其三十八　（明治三十二年八月九日磐谷發）

度申、御承知の如く、當國には二百萬の支那人入り込み、商機成な渠れの掌中に在り、其間に微力なる日本人、一旗幟を樹てた處で、追つく噺に無之、故に眞正に當地に於て仕事を爲さんと欲せば、支那人を使役する乎之れと組合ふ乎、此二者に出でざるべからず、然るに茲に僥倖にも當地の大商英利號なる支那人、共同事業の申越を爲せり、先づ初め三萬圓宛の資本を平等に支出し、日遥兩國に店舗を置き、双方に日支一人を交置し、自然に事業を擴張、資本を増加す、其の第一着手には英利號主人と小生と日本に渡り、其基礎を造ると云ふ方法に御座候、其旨野村氏へ相談り候處、大兄や富氏にも謀り候得ば兎に角其支那人を連れ來るべし、金はドートカ工夫すべし

との回答を得候、然るに支那人には其儘相噺候ては踟躕出發せざるゆゑ、金は出來るから同行して來れと、友人より回答有之候と申候處、支那人大に悦び、直ちに出發可致筈なれども、自身目下病氣に罹り居候につき、來月末出發可致、尚是れより香港の兄へも通知して呼寄せ、同行可致旨、相答へ、假に其約を結び候、英利は當地の豪商小生等の如き相手になる筈なきに似たれども、去る廿九年開店以來兄弟の如く親切に商業上の指導を爲し呉れ候ものにて今以て小生が商人にあらざる事を嘆し居るが如き間柄につき、遂に此度の如き事に立至候儀に御座候、故に倘し連れ行きて金の出來なきときは、非常の難境に陷るべきにつき、今よりよろしく御準備爲置被下度奉願候

さて此度の旅行はメコン河畔に至り得ず、裁かにチャンタブーン迄にて引き還へし候につき、面白き事實も無之、又近來曾て筆を把らされば文章も頗るマヅシ、何卒痛く御叱正御敎術の上御登載被下度、倘し貴紙に差支有之他紙にてもよろしく候間御登載の上は其紙面御送附被下度、先は爲其早々頓首

其三十九　（明治三十三年一月十六日磐谷發）

庚申、昨年末馬來半島探險に出懸け思懸けなき大病に罹り、去九日歸磐仕候、歸朝も爲めに四月頃に相成可申候、さて今度稻萬公使が當國王より釋迦の骨を貰ひ受け、別紙の通り奉迎の檄を飛ばせり、當國には別に仕事もあらうに、ツマラヌ佛骨騷き物好きにも程があると、全文を擧けて御ひやかし可被成候也、武井氏死後富氏の消息御聞かせ被下度候早々

其四十　（明治三十三年六月八日磐谷發）

是れ余が受取りたる鐵膽最後の書にして、彼れは此年七月三十日新宮坡に於て永眠したり。

庚申、四月一日付之芳東拜見仕候、如仰品川子武井君等の逝去世は寂寞を覺へ候、小生も去年馬來半島着意外にも最も恐るべき病氣に罹り、引續赤痢持病等兼ね到り申候、併し病氣少し怠りなば今月中に歸朝、又々一計畫を策す考に御座候

鐵膽書翰終

友人阿川鐵膽

石川半山

不思議なる因緣で、鐵膽阿川太良と我輩とは、兄弟も啻ならざる交情を結んだので彼れの遺稿を編纂して、彼れが生前の友人に頒つは、殆んど我輩の義務の如くに感せられる、我輩は又彼れが世に傳ふべき一個の人物で有つたと思ふので茲に彼れの事に付て少しく昔の記憶を喚び起して書いて見たいと思ふ

庚寅新誌社へ入る前の經歷

我輩が初めて彼れに逢ふたのは、明治二十四年の五月、芝公園の庚寅新誌社に同社長手塚猛昌氏を訪問した時で有つた、手塚氏は座に在る彼れを我輩に紹介したので逢ふたが、一見して「此男は中々人物だな」と思ふた、其の濃い太とい眉と眉との間が、狹窄して居るのと其の兩眼の光が人を射るのが、一寸逢ふても直ぐに我輩の注意を惹いたので有る、當時庚寅新誌社は手塚氏の自宅に設けられ、氏は慶應義塾の

教師を務むる傍ら此の雜誌を發刊し、自宅に鐵膽と木場と木村の三人を置て居た
鐵膽は會計、木村は編輯、木場は集金で有つたが、我輩は當時慶應義塾大學文科の學
生で、庚寅新誌に寄書をして居た、
それから間もなく庚寅新誌社が大發展をなし、京橋區八官町へ一戸を借り受け、社
と社長の宅とを分離し、手塚氏は愛岩町へ移轉し、且つ慶應義塾の教師を辭して、專
心に庚寅新誌の經營に任し、同時に社員の改革を行ひ、木場と木村とを罷めて、別に
新社員數名を入れ我輩も亦此の機會に於て編輯の一員に入社した、鐵膽は會計庶
務の主任として此の八官町の社に住し、我輩は毎日通勤して此の樓上に彼れと机
を並べて事務を執つたが其の內に高山長幸君(現在衆議院議員)が入社したので、鐵
膽と高山と我輩の三人共に互ひに其の經歷を語り合ふたが、鐵膽は此時年長者で
二十八歳で、我輩の記憶に依れば、それ迄の經歷は左の如くで有る
阿川氏は長州萩の士族で有る、鐵膽は少年時代より學を好み、儒者馬島春海翁に
就て漢學を修め、又福岡に遊學す、其父早く永眠したる爲めに、母と弟と妹とを扶
養する爲め、尙青年にして郡役所の書記に出仕した、然れども彼れが齷齪たる活
氣は、毎日簿書堆裡に出頭沒頭して、空しく刀筆の吏として光陰を徒消するに堪

えず如何にもして帝都に出でんと焦思して居る際、偶ま帝國議會が開け、富豪吉
富簡一氏が衆議院議員に當選して上京するに付て、書記を一名入用と云ふ事で、
鐵膽に交渉が有ッつたら、彼れは大に喜び、早速郡役所を辭して、吉富氏の書記と
して東京へ出でた、而して第一議會が閉會して、吉富氏が歸國せんとするに當り
彼れは尙暫らく東京に留まりたき希望を述べ、吉富氏は乃ち之を其の同縣人た
る手塚氏へ紹介し、遂に庚寅新誌社へ入社したので有る
彼れは文章も巧みに書いたが、特に其の書は褚遂良を學び、一種氣韻の高い字を書
いた、漢學は中々出來て居て、文章の中には隨分六ケしい文字を使ふた、手紙にも時
々漢文で書いてよこしたのが有る

庚寅新誌時代

彼れは八官町の庚寅新誌社に起臥すること二年餘で有つた、高山君や我輩は通勤
で有つたが、彼れの外に三四人社內に起臥した社員が有つた、彼れは一切の會計事
務を一人で管掌して居たのみならず、論文も書けば雜報も書き、編輯をなし校正を
行ひ、雜誌が出來て來ると之を包裝して、切手を貼て之を發送する事迄も、自ら手を

下して務めた、我輩の如きも其の名は編輯員で有つたが、庚寅新誌を各新聞へ廣告する廣告文も書けば、帶紙をも書き、發送の方も助けた、社員は悉く八人臧で、毎月二回の發行で有るが、中々能く働いた者だ、而して其の受くる所の報酬は、多い方では なかつたが、社員間の交情が如何にも親密で、互ひに相助け合よて往つたから、隨分愉快で有つた、

社中は社長を除くの外、悉く獨身者で有つたから、鐵膽を塾長に戴ける漢學塾の趣が有つた、或る者は老婆でも雇ふて、炊事や掃除を司掌せしめたら良かろうと云ふ說を立てたが、鐵膽は之を排斥して曰く、ドウモ婦人は不潔な者だ、婦人と同接は若い婦人でもイヤだ、況や老婆に於てをやと、非常の潔癖で、一切下婢を雇はず、鐵膽を始め、社中に居る者は、辨當屋から辨當を取て暮らして居た、

彼れは酒を好み、每晩酒を飲んで居た、時として大きなコップへ冷酒を注て、机の上に置て、之を飲みながら事務を處理して居た、時間と金の餘裕の有る時は、酒樓へも登ッた、時としては藝妓を招いて、太鼓や三味線で、馬鹿騷ぎをやらせて、詩吟や劒舞をやッたことも有る、然かしながら總べて長く遊ぶ事が嫌ひで、ソッと騷いだかと思ふと、眞ぐに切り上げて歸る方で有ッた、或る年の大晦日に、鐵膽と我輩共が愛宕山上の愛岩舘へ往て、酒を飲みながら馬鹿騷ぎの中に、年を取ッたことも有る、今の東京ホテルが其頃は日本料理屋で二階に廣い座敷が有ッたが、大晦日だから、外に客が無いので、大騷ぎをやッたことが有る、料理は刺身や鮓の物、總べてサッパリした者を好み、特に長州流の鮒のセゴシなどは、自分で手を下して作ッた、平生睡を崩すことが嫌ひで、常に正座して居た、昏て彼れが胡坐したのを見たことが無い、遥羅から歸て來て、樸は行儀が惡るくなッたよと言ッたけれどそれでも滅多に彼れが膝を崩したのを見たことがなかッた位で、彼れは常に正座して人を正視し、峻嚴犯すべからざるの威風を具えて居た、非常な癇癪持ちで一旦怒ると中々激烈だが、平生は親切で、人を容るゝの量が有ッたから、社員は皆彼に服して居た、隨分勉强家で如何に事務が堆積して來ても快刀亂麻を絶つが如く敏活に之を處理して、些少の滯滯を見なかッた

渡清の準備

庚寅新誌に從事して居る二年ばかりの間、我輩は殆んど每日彼れと逢ふたが、或る日彼れと前途の運命に付て語り合ふた時、我輩は無遠慮に其思ふ所を語つた

我輩の見る所では、君は氣の毒だが、到底駄目だ、今や天下の大勢は、我が日本を世界の日本となしつゝ有るではないか、然るに君は人物は良いかも知れないが、英語に通せず、西洋の學問をして居ないから時勢に遲くれて居る、今日に於て唯漢學ばかりで世の中に立つことは六ケしい、ソウかと云ふて君が今から洋學でも學ぶ樣なら良いが、それは君の事だからやる氣は有るまいし、又若し始めた所が日暮れて道遠く、ソレが物の役に立つ迄には歲月が懸て、先づ成功の見込みはない、故に氣の毒ながら君の前途は、先づ長州へ歸て村夫子となる位の者だ、兎ても此の活きた大舞臺の役者になることは出來まい

我輩のコウ云ふ無遠慮な批評を聞て、鐵膽は別に怒りもしなかッた、當時彼れは二十九歲の青年で有ッたが、尙年少なる我輩の目からは、彼れか餘程の大物の如くに見えたので、兎ても見込みがないと思ふ所を正直に言つたので有る、彼れは酒を飮みながら我輩の說を聞き了り、首肯いて言ふ

ドウモそうかも知れないが、ドウすれば僕の前途に發展の道が有るだらうか、君の考へが聽きたい

我輩も首を傾けて、彼れの爲めに考へて見た

ソウだなア、止むを得ずんば一策ありで、海外へ飛び出すのだなア、然るに君は洋學が出來ないから、歐米へ往ッたッて仕方が有るまい、先づ支那へでも往ッたらは或は何事か出來るかも知れない

彼れは我輩の此の言を聞くと、微笑を漏らし

僕も先日來頻りに其の事を考えて居るのだ、支那へ往くに限ると思ふて居るのだ支那が先づ僕等に適當の天地だと思はれる

之れは明治二十五年中の事で、それから三四週間立つと彼れの机上に、上海で發行する漢字新聞「申報」が來た、彼れは其の友人に依頼して、此の新聞を取り寄せて、支那研究を始め、窃かに支那に往く準備をしたので有る

清國へ渡航

明治二十六年七月、鐵膽愈々支那へ出かけることを決意して、之を友人の間に發表した、其の費用は多く長州の友人から得た者で有る、吉富簡一、西村禮作其他の諸君が、其の志を壯として資を給したので有る、そこで庚寅新誌を辭して、大坂へ出でたが、大坂で支那服や辨子なども用意したと云ふ事だ、九月には天津へ着し、北方の事

情を視察したる後十月に上海へ出でた、其の調査した事實や、當時の形勢は、支那實見錄及び當時彼れが我輩へ寄せたる書面に依て想像することが出來る(書翰第十一、第十二、第十三第十四、第十五、第十六、第十七參照)

何でも支邦に居る內に、哥老會へでも入り込んで、何か四百餘州を震蕩する樣な計畫を立てた樣で有るが、ドウも甘まく往かなかツた樣だ、宗方小太郎君とは餘程親しく往來して居たと見え、鐵膽の書面にも之を記して居るが、先般我輩が上海に於て久し振りに宗方君に會した時にも、同君が鐵膽を追懷し、日淸戰爭前に於て日夕往來して居た時の事を語ツた

上海より磐谷へ赴く

別に收入の道がなくて、唯消費するばかりで有るから、携へた金は段々に無くなツた、而して其の企てた事もトント行はれず、上海に於ては大分窮狀に陷ツたと見えて、我輩の所へ歸國したいから其の旅費を送て呉れと言て來た、當時我輩の手許に餘裕のない事は鐵膽の能く知る所で有ツたが、それが特に我輩の所へ言ふて來た所を見ると、モウ既に餘程窮して居た事が分かる、我輩は乃ち代々木の別邸に品川彌二郎先生を訪問して、金子借用の相談に及んだ、而して先生から得た所の金を鐵膽へ送る時に、左の意味の言を附した

此の金は君が日本へ歸る旅費として、之を送るのではない、曾て君に語ツた如く君は日本へ歸ても別に國家が君を必要とするほどの事はないのだ、君は長州へ歸て村夫子となるの外はないのだ、ソウ云ふ人に歸て貰ふのは、日本國民としては寧ろ迷惑で有る、それよりも寧ろ上海に於て餓死するか、又揚子江へでも飛び込んで死んで呉れた方が良い、然かしながら若しも君が此金を利用して、何か或る發展をして呉れるなら、僕は非常に喜ばしいのだ

ソウすると鐵膽は果して歸朝しなかツた、彼れは暫時にして先づ香港へ飛び、次て遲羅の盤谷府へ渡航した、時は明治二十七年の五月、日淸戰爭の起る前で、此の戰爭の起ツた時に、彼れは既に盤谷府の人で有ツた

盤谷の放浪生活

盤谷府へ到着して後、彼れは諸友人の所へ手紙を寄せて其の風俗を叙し、且つ當分文部大臣バラウォングセ親王の邸に寄宿して居るか、郵便は總べて此親王邸內阿

川として出せよ」と言て來た

我輩共は其の得意氣に見ゆる書面を見て、彼れの幸運を喜び、彼れはやがて明治の山田長政ともなるで有らうと想像して居たが、後に彼れから聞く所に依れば、事實は大違ひで有て、彼れが國商商會設立の爲めに歸朝する迄の生活は、殆んど常人の堪ふ可らざる苦境に陷て居たので有る

彼れが磐谷府へ往ッた時、文部大臣の邸内には、岩本千綱、山本安太郎其他の日本人が居たから、彼れは此等の團體へ身を寄せたので有る、然るに彼等は永く鐵膽を其の邸に置くことを望まなかッたので、鐵膽は止むを得ず他へ轉せざるを得なかッた、當時公使館もなければ領事館もなく、在留の日本人も至て少ない所へ、言葉も出來ない鐵膽が、此等の團體の外へ投げ出されたのだから堪まらない、金はなくなる携へて來た者を賣ッたり質に置いたりして支へて居たが、それも段々乏しくなる本國の舊友へ此の窮狀を書て送れば誰れでも之を救ふだらうが、剛情我慢の彼れは縱令餓死するとも、ソンな意氣地のない事は爲し得ない、ソコで段々窮して來て、後には浴衣一枚となッた、其浴衣も諸所に穴が明いて來た、彼れは藥を取て其の穴をくゝッて居たから浴衣に諸所ひッつりの出來たのを着て居た、最初は遥羅土人の家を借りて居たが、家賃が拂へないので追い出され、郊外をウロ〳〵する内、馬小屋の一部分崩れて捨られたのを發見し、それへモグリ込で寢て居た、食ふ者がなく三日ばかり何も食はずに寢て居ると、一人の僧が通りかゝり、言葉が通じないから手眞似で漸く彼れが餓えて居ることを知ッた僧は、其の寺中から米を出して彼れに與へた、それから其僧が毎日米を與れ、或る時は寺院へ連れて往ッたことも有て、餓死だけは免れた、當時在留民の中に、佐々木喬太郎君と云ふ人が有ッた、土木技師か何かで有ッたが、鐵膽の人物を尊敬し、其の困窮に同情を寄せ、時々一バーツ（日本の金五十錢位を與れたさうで、鐵膽等は之を得ると、直ぐに賭場へ往て、其の運を堵し負ければそれ迄なり、勝ッた時は好む所の酒を飲んで、其の鬱を散したと云ふ事で有る、

此の窮狀に陷て居たことは、彼れは深く之を秘して居て、何人にも語らなかッた、又其の當時の磐谷在留の人にも其の窮體を見せなかッたから、佐々木君と雖も或は彼れが三日も食はずに居て、僧に救はれたことなどは知るまいが、歸朝中或る時我輩が彼れの秘書中から其の當時の日誌を發見した爲めに、彼れが笑ひながら一切

此の困窮の中に於て、彼れが大に助かッたのは賭場である、負けて大に困まッた時も有るさうだが、公開の賭博場へ入て、時として大に勝て、資を受け出したことも有ると云ふ事だ、而して此の如き放浪の生活の間にも、我輩共の所へ送る手紙には、依然として文部大臣邸内と記し、少しも其の窮状を記して居なかッた、而して我輩共から文部大臣邸内阿川として送る手紙は、此の邸内に住める日本人の手を透して受取て居たので有る、

日清戦争の以前明治二十七年の六月に、盤谷へ入て以来、翌年の九月迄、彼れは此の如き放浪の生活を続け其の間に遥羅語を研究し、其の風俗に通じ、意気少しも屈する所なく、何事かを成さずんば、空しく日本へ歸らずとの決心を以て、身には破れた浴衣を纏ひつゝ昂然として盤谷の市街を濶歩し、在留人をして、彼は将来何事かをなすべき人物なりとの畏敬心を起さしめて居たので有る

最初の相談

日清戦争の平和克復後、間もなく彼れは一書を我が同志の間に寄せて来た、曰く

此の盤谷府には支那人の手を透して賣り込んで居る日本の貨物が、中々澤山に

有る、其の價格が中々高い、之れを日本人の手に依て輸入したならば、随分利益が有ると思ふ、自分は勿論商人と云ふガラではないが、日遥貿易の先驅をなして以て聊か國家に盡して見たい

差當り今回王室から日本の絹ハンケチの御用を引受けたから、至急三百圓ばかり見本として極上等の絹ハンケチを送て呉れ、然らば之を第一着手として、一攫千金の事業を起すべし

此の書面に接したる我輩共は、果然、鐵膽は遥羅の王室へ入り込んだ者と思ふた、正可に此の書面が、盤谷郊外の馬小屋の中で書かれた者とは思はなかッた、時に日本は日清戦争の後で、價金は取れる、事業は勃興する、國民は一躍して第一等國となッた積りで、眼を海外に轉じ、國民一般に浮足の風潮で有ッたから、此の鐵膽の書面に對しても、我輩共は眞面目に研究をした者だ、我輩は戦争前に信州松本に往て信濃日報社長兼主筆となり、此時には既に二三の地方的事業にも關係して居たから鐵膽は他の友人と共に我輩へもコウ云ふ相談を持ちかけて來たので有る、然るに千葉縣の豪農野村庄之助君は、此の書面に接して、左の如く答へた

日遥貿易の先驅は賛成で有る、之れが爲めに資本を支出する事は承知したが、唯

今三百圓ばかりのハンケチの見本を送るが如きことは出來ない、君が歸朝して其の計畫を語るならば、其に此の事業をやッて見ようと思ふ、兎に角一度歸朝し玉へ

庚寅新誌には高橋光威君(現衆議院議員)も居たが此の野村君は高橋君の親友で鐵膽は數回面識が有るから、野村君からコウ云ふ答をやッたので有る、我輩も亦此の議に與かり、野村君の意見に同意して、彼れが歸朝を促かすの書を送ッた

然るに彼れは此時穴の明いた浴衣一枚の外は、何者をも持たなかッたので有る、三百圓の絹ハンケチが來れば、之を賣て歸朝の旅費も出來るし、衣服調度をも整へることが出來るが、唯歸朝すれば資本を出すと云ふ手紙に對しては、彼れも聊か首を傾けた、而して遂に一策を案出した、此時磐谷に島崎天民と云ふ彫刻師が有ッた、曩に遞羅政府へ雇はれて來たが、此時恰かも滿期解雇となッて歸國に決し旅費の外慰勞の手當などをも得て、幾底大に餘裕の有る事を知て居た鐵膽は、直ち彼れを訪問して、野村君の手紙を示して說いた

內地の富豪から、コウ云ふ手紙が來たから、自分は一度日本へ歸て、此等の富豪と謀り、大に貨物を携へ再び磐谷へ來て日遞貿易をやりたいと思ふ、就ては君も此の事業に一臂の力を貸して貰ひたいと思ふが、ドウだらう

天民は暫らく磐谷に來て居たから、日本との關係は漸く薄くなッて居る、今回滿期解雇で歸ッた所が、日本に於て果して面白い仕事が有るや否や分らぬ、若し此の口遞貿易事業が起て、ソレへ身を投じて再び磐谷へ來ることが出來れば、それは自分の希望する所で有ると乘り出した、そこで鐵膽は相談を持ちかけた

然るに僕が此の風俗で歸ッた所が徒らに資本家共を驚かすばかりで仕方がない就ては僕の服裝を作る費用と、それから東京迄の旅費を一時君の所で立て替えて呉れ玉へ

天民は前途の希望を此の事業の上にかけて居たから、快よく其要求を容れ、財嚢の一部分を出して鐵膽の服裝を作り、且つ同船して日本へ歸ッて來た、二十八年の十月に鐵膽が東京へ歸着した時、彼れの風采は堂々たる者で有ッた東京へ着くと曾て吉富君に隨て寄宿した京橋區數寄屋町の成瀨館へ宿を取て、諸方の舊友へ電報を打ッた

圖南商會の設立

鐵膽の打ッた電報に應じて、野村君は千葉縣から出て來る、我輩は信州から出京する、在京の手塚猛昌君其他の舊友も集まると云ふ風で、玆に日遲貿易の先驅をなす相談が始まッた

我輩は鐵膽に會して、先づ兩人で其の計畫を相談した、彼れは詳かに磐谷の情況を語ッた、如何に放浪生活にしても、一年半も此の都に居ただのから、氣候や風土や人情風俗の類には、能く通じて居た、然かしながら其の日遲貿易の發起者として必要なる調査に至ては、茫として少しも要領を得て居ない、例せば米とチーキ材は遲羅の產物中の重もなる者で有ると云ふが其の一年の產額は如何程で、其の每年の輸出額は如何程なるかと、問ふとそれは知らないのだ、日本の雜貨が磐谷に於て非常に高いと云ふて、陶磁器の類や提燈其他が、何れも十倍若くは十五倍の價格で有ると云ふて、一々に其の高價を語るけれど、さて其の運賃から稅の關係、保險率の如きに至ては、茫として少しも調査がしてない、是に於て我輩は彼れに向て諄々として說いた

君の話は兎ても然るべき商業家の前へ持て往くことは出來ない、幸ひに野村が金を出すと云ふなら、第一回は日遲貿易調査の積りで、之を始めるが良い、それにしても話が餘まりに茫として居るから、我輩が此地で出來る限りの調査をしよう、君は豪放磊落の一點張りで總べて豪傑笑ひで誤魔化すが良かろう

鐵膽は頭を撫でゝ大笑し、商業は勿論僕の長所ではないが、國家の爲めに之に任するので、兎てもソンな數字入りの細かな計算は、メナム河の滔々たる濁流を飮んだ磐谷通には出來ない、ドウか宜しく賴むと言ッた、それから大體の方針は一決し、廣く世の資本家に謀らず、野村君の一手で、試驗的に雜貨を持て往くと云ふ事になッた、そこで野村君の居村の村長を務めて居た富豐吉君が、內地の物品買出主任となり、村役場の書記を務めて居た前田又三郎と云ふ靑年が、磐谷の店の會計主任に任じ、鐵膽は前田を伴ふて、橫濱から佛國メールで出帆した

關係者一同が貿易に經驗がなく、本尊の鐵膽が豪傑肌で數字は一切分らず、唯日遲貿易の先驅と云ふ一語を吹き立てるのみで、何か相談を始めることになると、直ぐに料理屋か待合に集まり、相談の用件が一二時間で濟むと、後は酒宴と云ふ風で有つた、今でもソウで有らうが、日淸戰後事業熱の勃興した當時に於ては、特に其の風が盛に行はれ、萬事を政府の保護金に飽て居る郵船會社式でやッたのだから堪まらない、鐵膽が歸朝してから出發する迄、此の商會の創立費用一切が、船に積み込ん

だ雑貨の原價と殆んど同額で有つたと云ふ一事でも、大概此時の企畫の情態が想像される、我輩は野村君に向て「藝者を一人受け出しても、五千圓や壹萬圓はかゝる世の中だから、君は日還貿易の先驅者と云ふ名前を買ふ積りで出し玉へ、利益をアテにし玉ふな」と言つたが、然かしながら鐵膽の話は、總べての雑貨が、十倍から十五倍に賣れると云ふので、關係者一同は酒樓の費用も、待合の費用も、總べて磐谷から戻て來る積りで、盛に景氣を附けた者だ、當時我輩は此の事業の參謀總長と云ふ資格で押し廻はし、鐵膽に向て「君は玄徳で僕は孔明だ」と言つたが、さて愈々設立に決して商會の名義を何と附けようかと云ふ一段になると、鐵膽は莊子の中から取て、圖南商會と附けた、鵬翼扶搖を搏て上る者九萬里と云ふ、大きな空想を描いた者だ

プレンテワオン時代

鐵膽は前田又三郎と雑貨とを携へて、磐谷に赴き、プレンテワオン街に一商店を開いた、試驗的に持て往つた者で、悉く賣り上げても、壹弐萬圓の物だから、決して立派な商店ではなかつたが、然かしながら其の時代には日本の商店が至て少ない時で有つたから、珍らしがつて買ひに來る客が多かつたさうだ、唯何分にも商賣に慣れず、特に此の土地の商業上の風習に通じない爲めに、種々の滑稽な事が有つた、今其の一二の事を語るなら、第一は多くの僞貨を受取つたことで有る、磐谷には支那人が澤山に居て、盛に貨幣を僞造して居る、政府の取締が行届かない爲めに、銀と土でバーツ銀貨を作る者が多く、之れが一見して眞物と贋物とを判別することは、六ケしい迄に巧みに作て有る、左れば磐谷の商店には大概貨幣の鑑定人を置て、客が拂ふ所の貨幣を一々鑑定して僞貨は決して、受取らないが鐵膽の店には此の鑑定人を置かなかつた爲めに、最初は澤山の贋貨を受取つたと云ふ事だ、或る日大變に賣れたと云ふので、計算をして喜んで居ると、或る巡羅通が來て其の貨幣を調べたら殆んど三割方僞貨で有つたので、會計の前田が泣かんばかりに失望したと云ふ事だ、第二には店の商品を頻々と盗まれた、磐谷には盗賊横行で、白晝往來の人の帽子を頭から叩き落して盗んで逃ける奴さへ有る所だから、商店は總べての品物を硝子の有る棚に入れて一々錠を下し、客は外面から之を指摘して價格を定め、賣買が出來て後、錠を明けて之を渡す習慣で有るので、鐵膽も其點は注意して一々錠を下して居たが盗賊共は中々巧妙で、先づ棚の下方に在る物を買ふ風をして、店員が錠を明けて之を取り出さんと身を屈して居る隙を窺ひ、手早く棚の上部に飾て有る

品をさらつて持て逃げる、或は三四人が黨を組んで來て、一時に種々の品の注文をなし、店員の狼狽して居る所を附け込んで、盜んで逃げる、甚しきは一人が何か盜んで逃げるので、店員が追ひ縋けて之を捕へ、ガヤ〳〵爭ふて居る内に、外の盜賊共が勝手に盜んで逃げる、店員の捕へた盜賊を巡査に渡すと巡査は一バーツか二バーツの賄賂で直ちに之を放つと云ふ風だ、それから第三には日本流に多くの種類の品を少しづゝ持て往つたから、賣れない品は何時迄も賣れないが、賣れる品は一週間位で賣り切れて、後から來た注文には應ずることが出來ない、現に提燈の如き者も、遥羅人が珍らしがつて大に買ひ、忽ちの内に、持て往つた品をスッカリ賣り切つたが其の以後買ひに來る者には、モウ渡すことが出來なかつたと云ふ事だ

大發展の計畫

翌二十九年の五月、鐵膽は歸て來た、時に東京の事業熱は殆んど絶頂に達して居た而して鐵膽も大分商業上の調査をして來て居たから、之れなら最早や他人の前へ出して、之れが日遥貿易の先驅者で御座ると云ても良い位になッて居た、そこで我輩共は協議の末、五十萬圓の株式會社を設立する計畫を立てた、之れが爲めに我輩は外務省へも往けば、農商務省へも往く、當時の商工局長安藤太郎君に度々會見して、調査の資料を得、それから定款も作り、スッカリ計畫が出來たから、愈々世間へ打ち出す時の會社の發起人を勸誘する運動を開始し、森村市左衛門、木村利右衛門、下村善右衛門、武井忠五郎、其他の資本家が續々贊成と云ふ事になッた

此所に一言すべきは森村君が此の事業に關係するに至つた由來で有る、此頃手塚猛昌君は時事新報社に入り、有力なる實業家と相知り、森村君をも知て居たから、手塚君から、森村君へ日遥貿易の話をなして贊成を求めた所が、森村君は兎も角一度鐵膽と面會したいと云ふ事で有つた、そこで鐵膽は森村君を訪問して、詳かに其の志を語つた、森村君も曾てニウヨルク市に於て日米貿易の先驅をなし、種々の艱難に打ち勝ちて今日の盛業を得た人で有るから、此の日遥貿易の先驅者に對して少からぬ同情を寄せ、種々の質問をもなしたる後、結局贊成と云ふ事になつたが、遂に一の條件を持ち出した

それでは贊成致します、資金も出します、然かしながら唯手塚君の紹介で、貴下に御面會したばかりでは、少し躊躇する所が有りますから、誰れか私が滿足する所の然るべき人物から、一本貴下を私へ紹介する手紙が戴きたい

之れは森村君が鐵膽に對する要求で有つた、鐵膽が歸て來て我輩に此事を話すので、我輩曰く

それは森村君としては尤もな話だ、我れ〳〵書生の事業は、失敗が當然だ、其の失敗に對して森村君が一人で責任を取り、世の物笑ひとなることを恐れるのは當然の事で有る、勿論我れ〳〵は失敗を賭しても日遥南國の進歩の爲めに之を試むるの必要を感ずる者で、森村君も亦我れ〳〵の志を壯として、寄附金をする意味に外ならぬのだから、我れ〳〵は其の要求に對して誤解をしてはならぬ

鐵膽亦能く其の意味を諒解して、我輩の意見に同意したが、然る時に森村君への紹介人は誰れに頼んだが良かろうと云ふ問題になつた、鐵膽は吉富簡一君へ書面をだすうかと云ふから、我輩に策が有るから」と云て、直ちに車を命じて九段坂頭の品川彌二郎先生へ驅け附けた、折柄多數の來客が有つたので、其の客の歸るのを待て、熱心に圖南商會の現情を説明し、遂に森村君の事に及ぶと、先生は遂一聽き取られたる後、

森村市左衛門とは面白い男を捕へた者だ、今の紳商の中で、曾て一文も政府の保護に依頼せず、自分の腕一本でやり上げた男は彼れ一人だ、未だ一度も逢ふた事はないが、其の獨立獨行の精神には此の彌二も窃かに感服して居る男だ、宜しい阿川を連れて來玉へ、能く森村の事を話した上に、手紙を書かう

成瀬館へ歸て、此の話をして鐵膽と兩人で出かけた、品川先生は鐵膽に向て諄々として森村君の感ずべき人物なる事を説かれ、一本の書面を書かれた、其の文面は忘れたが、ドウか鐵膽を貴下の門弟として、一人前の貿易家になれる樣に御依頼申すと云ふ樣な意味で、鐵膽に向ても、森村を先生としてアノ通りに成功せよ」と戒しめられた

鐵膽が此の書面を携へて、森村君の所へ往つた時、森村君は十分に滿足した、兼ねて一代の精神家として尊敬して居る品川子爵から、此の御書面を戴いた以上は欣んで御助力申すと言て、資金も出せば、貿易上の經驗談も有り、鐵膽は品川先生の教に從ひ、之を師として事へ、森村君も亦通常の資本家と事業家の關係を離れ、之を門弟の如くに見て、親切に世話をされた

然る時に森村君は一の説を出した、コウ云ふ事業は最初から北々しくやるべき者でない、意氣の投合した人物ばかりが、此の貿易事業の爲めに寄附金をする積りで出資し、それを匿名組合にして、表面に立つ者は阿川君一人としたいと云ふ説を出

した我輩は此の株式會社が成立したら、其の主腦となつて働く積りで、信州の方は一段落を附け、鐵膽と共に磐谷に赴き、實際の情況を視察して歸て、東京の本社に於て、一切の事務を執る豫定で、信州に於ける關係の事業へは、それ〳〵書面をも發した、何しろ森村君の聲望は、關係者一同の仰慕する所で、其の意見には何人も反抗することが出來ない、野村君は多少の不平を抱て居たが、我輩は此の照名組合說が出づると同時に、九段の品川先生を訪ふて、御手紙に依て、森村君は贊成しましたが、株式會社には反對で、寧ろ匿名組合としたいと云ふ意見で有ります、先生は之に對してドウお考へになりますか」と問ふた、實は我輩の心では、品川先生が若し株式會社にする方が良からうと言はれたら、其の言を以て森村案を撤回せしめて、株式會社にする積りで居た所が、先生は全然森村案に同意で有つた、我輩は先生に向て照名組合の不可を論じ、五萬や十萬の金では、何事も出來ないと思ふ、今日事業熱の勃興して居る機運に乘じ、花々しく五十萬乃至百萬圓の日遲貿易會社を建て、發起人として森村、木村、下村以下の連名を並べて、天下に呼號すれば、資本は立ろに集まる、而して堂々と打て出でなくては、日遲貿易の先驅者たる事業は出來ますまいと言つたが、先生例の癇癪で、何を書生の空想を吐くか、此の事業熱は國の禍だ、今に恐慌が來るぞ、獨乙や米國の戰後の例を見い」と一喝された、それから癇癪の序を以て我輩が北信鐵道を計畫して居る事迄をも罵倒せられ「書生の空想で、種々餘計な事をして、地方の眞面目な資本家に迷惑をかける樣な事は、戒しむべき事だぞ」と、散々の不機嫌で有つた、事此に至ては萬事休すだから、我輩は森村君にも逢はず、直ちに參謀總長の印綬を解て、飄然として信州へ去つたが、我輩は暫らく東京へ出て、特に書面を以て辭意を通じた結果として、其秋信州を去らざる可らざるに至つた、而して國南商會は愈々匿名組合說に決定し、野村君が多少の不平を唱へ、下村君が加入を謝絕するなどの混雜が有つたのみ(書翰第二十一、第二十二參照)で鐵膽は比較的に纏まつた資本を抱て渡遲し商店を擴張してチヨルンクルン街に移轉した

遲羅王國の出版

五十萬圓の株式會社を起して、大に日遲兩國の爲めに企畫する所あらんとした時、我輩は先づ日本國民の間に遲羅の事情を知らざる者の多きを慨し、鐵膽の携へた材料と我輩が別に調査した所の者とを集めて「遲羅王國」と云ふ一書を著はす事

に定めて居た、然るに會社が匿名組合になつた爲めに、此の出版も中止して居ると、翌明治三十年の一月に歸て來た鐵膓は、是非共之を出版して呉れと言ひ出した、此時我輩は信州から東京に歸て、中央新聞に從事して居たので、出版の便宜は持て居たが、中途布哇へ旅行した爲めに、大に遲くれ、其の夏に至て東京經濟雜誌社から出版し、圖南商會編纂の銘を打ち、卷尾の發行人の所へ我輩の名を附した、之れへ鐵膓が一篇の序文を書いたが、其文は左の如き者で有る

予や思ふ所あり、明治二十六年六月、孤劍颺然支那に遊ぶ、北は北京を窺ひ南は南京を視る、漫遊一ケ年、歸裝已に成り、途次上海に出づ、會ま說を成す者あり、曰く、日本人某遐羅政府より土地を借る、其面積頗る大以て千民を殖すべし、契約書現に彼れの手にありと、予、廼ち往て其の門を叩く、已に去れり矣、是に於て更に香港に渉り之を質す、較や信すべき所あり、因て直ちに航して遐羅に臻る、眞なり、方に是れ二十七年の六月なり、是より南船北馬探檢視察すること一年有餘、抑も遐羅の國たる氣候炎熱、土地肥沃、良穀野に滿ち、佳樹山を蔽ふ、已に天產物に富み、又氣候炎熱、是を以て人民惰弱絕へて物を作るの道を知らず、製作の品悉く海外より來る、其價頗る昂、試みに市街を散步すれば賣るものは擧な外國人、買ふものは盡く遐羅人、主客轉倒も亦孔だしと謂つべし、審かに其の賣品を察するに、雜貨は日本の品十の七に居る、而して皆支那人の手に濟りて之を鬻けり、是に於て予初めて筆硯を投して牙籌を把るの念起る、二十八年九月歸朝之を知友に謀り、盤谷府プレンテワウォン街に一の雜貨店を開けり、之に頒して圖南商會と云ふ、翌二十九年五月歸朝更に資本を增加し同年十月チョルンクルン町に轉せり、現住の地是なり、今の商會は洵に微なり、寔に小なり、是より鵬翼萬里圖南の志を成さんとす、日淸兵を搆へて以來、人心茹りに外に嚮ふ、矧んや又航海奬勵法の之を助くるものあるに於てをや、是時に當て南天の樂土たる遐羅國の事情を社會に示すは、即ち是れ薄か商會か國に報くすの微衷なり、蓋し此本を讀む者、其天產の豐穰を見ては垂涎すべく、其元氣の消耗を見ては落淚すべし、落淚する者は往いて助け垂涎する者は往て取れ

圖南商會主人　阿川太良誌

品川先生へ此の草稿を持て往て、何か題辭を書て下さいと云ふと、先生は直ちに筆を執て「力德義」と云ふ三字を書かれた、之れは吉田松陰先生が殖民政策を說いた中に在る骨子の文字で、先生は之を書いた後

殖民政策の要は、此三字に在る、力ばかりで壓服しても仁ケる者でない、徳がなくてはならぬ、義もなくてはならぬ、左りとて徳義ばかりで、力がないと馬鹿にされる、即ち力徳義が大切だ

先生は韓國に於ける日本の失敗を例に引て詳かに此の三字を說明されたが、其の聲は今尙我輩の耳底に殘つて居る、全體遞羅公使の稻垣萬次郎君にも序文を書いて貰ふ積りで之を依頼し稻垣君も之を承諾して居たが、出版を急いだ爲めに間に合はなかつた

五年間の商店經營

鐵膽が磐谷に商店を開て以來、五年間の經營は、彼れが手腕の非凡なるを示した者で有る、外の商會は忽ち起て忽ち倒れたが、彼れの國南商會はブレンテヲオン街からチヨルンクルン街に移て、年を逐ふて發展し、あらゆる困難と戰ふて竹て屈する所なく、此の蠻烟瘴霧のメナム河畔に旭日の國旗を飜へし、大病に罹て其の生命の且夕に迫る迄之を維持し得たのは、決して尋常人の企て及ぶ可らざる事と考える此時代に於ける磐谷の情況は、今日より殆んど想像の出來ない者で、彼れが初めて

商店を開いた頃には、日本の領事館もなければ公使館もなかつた明治三十年松隈內閣が成立して、人材登庸を始め、東方策士稻垣滿次郎君を辨理公使として磐谷へ派遣し、愈々日遞條約が締結されてからでも、尙暫時の間は日遞貿易は決して盛大に行はれなかつた、蓋し之を行ふに緊要なる諸種の機關が具備して居なかつた爲めで有る、それ故に中村彌六、馬場新八の諸君が、チーキ材を買ひ出しに往つた事業も（書翰第二十五參照）永續せず、山崎喜八郎氏が山本喜三郎君の後援を以て、日本船幾內丸を率て磐谷に乘り込み、日遞商會を設立した事業も、失敗に了り（書翰第三十五參照）遞羅通として世に知られたる岩本千綱君の種々の計畫も悉く失敗に了つた、其外日本商人の來て商店を開いた者の大半は失敗した、此の間に於て獨り豪放磊落なる鐵膽が、其の身の病に斃るゝ迄、此の國南商會を維持し得たのは、誠に彼れの人物の尋常でなかつたことを證する者と謂はなくてはならぬ

勿論商會の內幕には、種々の事も有つた、然がしながら彼れが其の病に斃るゝ迄、決して破綻を生じなかつた、彼れは單に雜貨店を經營したばかりでなく、隨分大きな仕事にも手を出した、遞羅政府の銅貨鑄造の事業を受負ふて、大坂の造幣局で鑄造して貰らへば隨分巨利を博することが出來ると云ふので、稻垣公使の助力を借て

之を企てた事も有つた、又磐谷市内の電氣電燈會社より日本の石炭を購入するに付て、之れが引受方を稻垣公使から依頼されて、大分計畫した事も有つた(書翰第三十參照)然かしながら何れも十分の成功を見なかつた

五年間に彼れは度々歸朝したが、其の歸朝する毎に、何か大きな計畫を携へて來た其の智慧のゆたかなるには我輩の如きも、殆んど感服して居た、外見は如何にも疎放に見えたが、實は中々緻密な頭腦を有して居て、事業を成すべき資格を具えて居た、一寸之を比較すると遜信大臣の後藤新平君に似た所が有つた、日本に滯留中は或は商會の資金を作り、或は委托販賣品を集め、又特に遜羅へ向く樣な物品の製造を、各種の製造所へ依頼して之を携へた、年々に商業上の經驗を積んで、此の模樣なら將來立派な商業家ともなるで有らうと、彼れを知る何人も期待して居たが、不幸中道にして病に斃れ、關南商會も亦彼れと共に倒れた

當時政府の方針

日遜貿易の先驅者として、彼れの事業が大に發展しなかつた事は、我輩共此の商會に深い關係を有する者の均しく遺憾とする所で有るが、之れには多くの理由が有る、而して其の最も大なる理由は、政府の方針が我輩共と見る所を異にして居たからで有る

松隈內閣の外務大臣大隈伯爵は、其の豪壯なる意氣を以て、稻垣君を草莽より拔て遜羅公使に任じ、以て大に日遜兩國の親交を增進せしむるの方針を立てたが、此の外交方針は、大隈伯爵の退官と同時に一變した、伯爵に次て外務大臣となつた所の西德次郎男は、久しく露國に在て、歐州の形勢に通じ、日本に於ける親露主義の頭領で在つた、親露主義は即ち明かに親佛主義で有る、彼れは北方に於て露國と握手し南方に於て、佛國と交歡するを以て、日本が東洋の平和を維持する所以なりとの意見を抱持した人で有る、而して松方內閣が崩の浦に沒落して、英國のヴヰクトリア女皇ジユビリイ式から歸つて來た伊藤侯爵が、第三次伊藤內閣を組織するや、西男爵は依然として外務大臣たり、伊藤首相と語て意氣全く投合し、政府は親露親佛の方針を執る事となつた、

稻垣滿次郎君は此の如く政府の方針の一變せるを知らずして、新に日遜條約を締結して歸朝する時、歐州公法學者の泰斗にして、當時遜羅政府の顧問として、少からざる勢力を有して居た伯耳義人ローレン、ジヤクミン氏を同伴した、彼れが磐谷を

出發する時、心窃かに期すらく、日遥條約の締結とローレン、ジャクミン氏の同伴は以て滿天下の注意を我が一身に集注するに十分なる價値を有すと、何ぞ圖らん、内閣の交迭は、政府の方針を一變せしめて居て、彼れは意外にも頗る冷やかなる待遇を受けた

彼れは歸朝後、直ちに宮城へ參内して、謁見を賜はるや詳かに日遥條約締結の次第を奏上した、陛下は彼れの奏上を終りたる時に

滯りなく大任を了し、滿足に思ふ

との勅詞を下し賜ふた、彼れは滿身に此の光榮ある勅語を浴びて、昂然として去て總理大臣官邸に赴くと、案外にも伊藤首相は極めて冷やかなる態度を以て、彼を待遇した

日本は常に大局の上より打算して、外交の方針を定めなくてはならぬ、抑も遥羅は君も知れるが如く、佛國の勢力範圍で有る、日本が今日に於て遥羅に接近するは、却て佛國の嫉視を招き、其の反感を招くの虞あることを顧慮しなくてはならぬ

伊藤首相は稻垣君に向て、此の意味を敷衍したる大說法を浴せかけ、彼れが沿なと

して日遥條約の効能を說かんとする勇氣を挫いて仕舞ふた、此時の稻垣君の失望と煩悶は、實に非常な者で有つた

稻垣君は其頃獨身で、帝國ホテルに宿泊して居たが、一日我輩の所へ書面を以て、用事が有るから面會したいと言て來た、往て見ると、此の轉末をスッかり話して、自分の計畫がスッかり外づれ、ローレン、ジャクミンに對しても面目がないと言つた、彼れの考按では政府が主となりて朝野を擧げて盛にローレン、ジャクミン氏を歡迎し、日遥條約締結祝賀會のお祭り騷ぎを演じて以て內には國民の心を遥羅に傾けしめ、外には遥羅をして日本に依賴せしめんと企てたので有るが、何ぞ圖らん、伊藤首相はローレン、ジャクミン氏の歡迎ドコロではない、日遥條約其者の發表さへも或は佛國の感情を害し、延て露國の感情を害しはしまいかと、戰々競々として居てドウモ稻垣はやり過ぎて困る」と首を傾けて居たのだ、加之ならず稻垣君は大隈內閣が登庸したる人材で、外務省の閥外の者で有るのみならず、前內閣の時代各省に登用された人材は、內閣交迭と同時に殆んど悉く一掃されたるに、稻垣君のみは獨り其地位を保て居るので、政府の內外から嫉妬を受けて、攻擊の中心となつて居た

曰く稻萬は策士で有る、曰く稻萬は法螺吹きで有る、頻りに其の人格を攻擊するの

で、伊藤首相は遠からず稲垣君の首を斬る積りで居た稲垣君は此の巨細の事件を
我輩に語りたる後に曰く
僕は遥羅公使を罷めることは何とも思はぬが、僕が罷めたなら政府は必ず遥羅
の公使を廢止し、折角僕が苦心して着手した日遥の親交に、傷が附くことを恐れ
る、そこでドウか此際民間の輿論を以て、政府を刺激して貰らひたいと思ふ、民間
の輿論が、日遥條約の必要を認め、日遥兩國の親交を必要とすることを政府に知
らして貰ひたい、君は國南商會の顧問で遥羅には特に關係が有るから、兩國の爲
めに之を願ふ
我輩は快よく之を引受けた、其内に東印度協會の集會が開かれて、稲垣君も出席す
る事になり、我輩と大井憲太郎君が演説をする事になつたから、我輩は此の集會の
席上に於て盛に日遥條約の成功を頌贊し、且つ　陛下から稲垣君へ勅語を賜はつ
なことを引て
伊藤總理大臣にして若し佛國の感情を害せんことを恐れて、陛下が滿足に思
ふとの御賞詞を賜はつた所の功臣稲垣君を免官するが如き事あらば、我輩共は
君國の爲めに斷じて此内閣を其儘に捨て置くことは出來ない

と叫んだ、稲垣君も亦此の席で、諄々として日遥條約の功能を說き、大井君も亦激越
なる言語と、其の犯すべからざる威容とを以て、伊藤内閣の外交の軟弱なるを罵倒
し、稲垣君を免官とするが如き事が有つたら、決して承知しないと宣言したが此の
集會の記事が新聞に現はれて後、我輩が品川先生の所へ往くと、先生は伊藤に對し
て勅語に背くかとは、エラい急所を突いた者だと笑はれた、稲垣君は矢張り同じ論
法で大隈、山縣、松方の諸元勳を說き廻はり、到る所で勅語を持ち出したので、如何に
外務省の姑、小姑が反對しても、遂に之を動かすことが出來ず、其内に憲政黨が出來
て、伊藤内閣が轉覆した爲めに、稲垣君は再び磐谷へ歸ることが出來た
ローレン、ジャクミン氏は折角日本へ來て歡迎されると思ひの外、唯大隈伯爵の厚
意に依て早稲田大學に於て氏を招待して講演を聽いた外、何等の歡迎もなく、悄然
として日本を去り、稲垣君も之れには非常に閉口して居たが、ソレ所ではない其時
には自分の地位さへ危ふかつたのだから、如何とも仕方がなかつた
又此時稲垣君は日遥兩國の間に、通商貿易上の設備として緊要なる者、三十餘件を
携へ、澁澤男爵を始め重もなる實業家の間を說いたが、政府の外交方針が此の如く
冷淡で有ッたから、此の計畫は悉く水泡に歸した、若しも此時代に於て稲垣君の意

見が行はれて居たならば、日遥貿易の上には大なる利益が有ッたで有らうが、實に遺憾な次第で有る

特に伊藤内閣の後を承けた大隈内閣も、僅かに半年にして倒れ、山縣内閣の外務大臣青木周藏子が依然として歐洲外交を中心とする人で有ッたから、稲垣君に對しては最も冷淡なる態度を取り、爾來日遥兩國の親交を增進すべき何等の設備もないので日遥貿易は寧ろ政府に依て阻害せられた形跡が有る、是れは我輩が敢て我が國商會が十分の發達をなし得なかッた最大原因とする次第で有る

歸朝中の密談所

鐵膽が歸朝すると必ず宿所は京橋區數寄屋町の成瀨館に定めて居た、總べての書面は之に宛て、來客も大概此の旅宿に於て應接したが、彼れは此の宿所の外に、必ず別に一の靜養所を作ッた、而して商會の機密を書策する時は、多く此の靜養所に於て密議を凝らした

或る時深川の辨天の横の所に井上と云ふ人が居た、此の主人は鐵膽が知り合の人で有ッたが、此の人の二階を二間借りた、當時主人は不在で細君と小供ばかりで靜

かな奇麗な良い座敷で有ッた、我輩は屢此の座敷へ鐵膽と共に宿泊したが、朝早く起きて辨天社内を散歩し、近所の鹽湯に入り、それから蛤鍋を賣る家へ入て朝飯を食ふた、何しろ玄徳と孔明が、種々の謀略を講ずるのだから、二日も三日も此の井上氏の宅で暮らしたことが有る、そこで蛤鍋で朝飯を食ふて居た所を見附けた友人共の間で、石川と阿川が洲崎の遊廓に流連して居ると云ふ評判を立てたことが有る又目黒の橋和屋の一室を借りて隱謀の書策所としたことも有る、或る時、日蔭町の大塚靴店の前の西洋館を借りて、圓南商會の看板を揚げたが例の鐵膽一流で、下女も書生も置かず、唯一人で近所の辨當屋から辨當を運ばせて住んで居た、我輩が或る時之を訪問すると、戸締りがしてない「阿川君居るか」と階下で怒鳴ッて見たが、返事をしない、晝寢でもして居るだらふと思ふて、ドン〳〵二階へ上がッて見ると、虎の皮が引て有て、其の傍らに漢文の書物が三四冊と、正宗の瓶と大きな茶椀が置て有るが、鐵膽は居ない、便所へでも往て居るのだらうと思ふて、虎の皮に坐して、漢文の書物を見て居ると、暫らく立てから鐵膽が外から歸ッて來た「ヤア外出して居たのか、戸締りもせずに不用心ではないか」と云ふと、「ナアニ戸締りをして置くと、留守だと思ふて、小盜が入り込むが、コウして明け放して置けば、誰れも居ないとは思は

ないから盗人は入り得ない」と言ひながら、アッハアッハと豪傑笑ひに笑ふた

此の日蔭町に集まッた豪傑連が、或る時打ち連れ立ちて、鎌倉迄徒歩旅行をやッた
ことが有る、我輩は往かなかッたが、副島八十六君などは往ッた一人である
明治三十一年春の衆議院議員總選擧に我輩は友人降旗元太郎君の選擧を助ける
爲めに、信州松本へ往て居ると、突然電報を發して、鐵膽が遊びに來た、未だ雪の有る
時で、保福寺峠を雪を蹴て越したのは、如何にも愉快で有ッたとて、非常に喜んで居
た、淺間温泉の目の湯へ案内をして、何か急に相談の事でも起ッたのかと言ッたら
ソウではない、急に松本地方へ來て見たくなッたからだとて、三四日遊んで、プイと
往ッた、時々ヨッ云ふ風な旅行をして其の氣を轉ずることを好んだ者である

最後の告別

明治三十一年の八月、磐谷へ歸ると云ふので、東京を出發する際、少しく早く宿を引
揚ひ、我輩と兩人で新橋停車場前の有樂軒に於て、晩食をなし、種々の用談を濟まし
た後、彼れ曰く

僕は近年大に虎が好きになッた、磐谷に居る間も、能く虎を視に往くが、東京へ歸
てからは、度々上野や淺草の動物園へ虎を見に往ッた、虎がフーッと言つて向て
來る時の威風は、實に堂々たる雄姿ではないか、僕は之を見て居ると、頭腦が覺え
ず、スーッとして良い心地になる

我輩は此話を聞きながら、不圖彼れの顏を見ると、其の眼光の爛々たる所から、顏の
丸るい所から、聲音の莊々たる所が、ドウモ虎に似て居るので、ソウか、道理で君の顏
が近頃虎に似て來たぞと言ッたら、彼れは大口を開て、アッハアッハと笑ふた、然る
に其の笑ふ顏が又益々虎に似て居るので、我輩も覺えず一笑した
それから有樂軒を出でゝ、停車場に入る迄に、彼れが悠揚と歩む所が、如何にも虎歩
に似て居るから我輩は背後から鐵膽を呼びかけてヤア君の歩調迄が虎に似て居
るぞと言ッた、此の虎に似た顏と此の虎の如く歩いた後姿は、今尚眼底に殘て居て
忘れることが出來ない

東海探檢と馬來半島の探檢

鐵膽が東京に滯留中、或る時我輩が神田の青年會館に於て、青年の爲めに演說をし
て、大丈夫此世に生れた以上は、宜しく世界を震蕩する樣な大事業に着手して、芳名

を後世に傳へざる可らず、之に二法有る、一は一室を小天地として、科學の研究に從事し、ワットの如く、スチヴンソンの如く前人未發の發明をなす事で、他はレセップの如く世界的事業を行ふ事で有ると言ひ、其の世界的事業の例として、サワラ大砂漠の大開墾、亞細亞橫貫鐵道とそれから馬來半島切斷の事を引いたが、此演說會の聽衆の中には鐵膽も來て居た、而して其の翌日彼れに逢ふと、昨夜の演說中の馬來半島切斷とは、如何なる事か、詳かに聞かして呉れと云ふので、印度洋と支那海を通ずるが爲めに、此の半島を切斷すれば、航海日數がマラッカ海峽を廻航するよりも遙かに減少し、新嘉坡やピーナンに大影響を與へる事業だと說明したら、彼れは此の話に至大の興味を感じたと見えて、尙詳かに調査して呉れぬかと言ッた、そこで我輩は此の事業に關して我輩の知れる所を記し之に關する種々の記錄を寫して、彼れに與へた所が「圖南商會の事業も一段落を告げたら、少しく內地の探檢をして見ようと思ふ」と言ッた

明治三十二年の六月に至て、彼れは愈々此の事を決行し、先づ東沿海の探檢を試みた（書翰第三十六、第三十七參照）此の巡遊記は每日新聞へ寄せて來たので、之を連載した、それから其の冬に至て馬來半島の探檢を試み、大象を馳驅して、深く內地に突入したが、之れが爲めに終に不治の病を得た、或は鐵膽の此の旅行を以て、彼れが單に好奇心に驅られたる者の如く誤解して居る者も有るが、彼れの馬來半島を旅行すると稱して居た樣だが、其の眞意は、此の半島を橫斷する世界的大事業を起すべき準備をなさんとした者で有る、左れば彼れが中道に斃れたのは單に彼れの爲めに之を痛悼すべきのみならず、我輩は或る意味に於て世界の進步の爲めに甚だ遺憾とせざるを得ない

回顧すれば明治三十二年から翌三十三年へかけて、不幸な出來事が續いた、商會に對して最も多く力を致した千葉縣の富豪武井忠五郎君が、三十二年の冬、腦チブスに罹て永眠した、それから翌三十三年の春に至ると、品川彌二郎先生が長逝せられた、僅かに此の半年の間に我圖南商會の有力なる關係者を二人迄も亡ふたことは、商會に取て大なる打擊で有ッた、此時鐵膽は馬來半島探檢で病を獲て磐谷に歸り、殆んど半死半生の域に落ちて居たので有る、病床に在て品川先生と武井君の訃音を受取ッた彼れは、其の襟懷如何に寂しく感じたことで有らう、今想ひ出しても、眞に涙の滂々たるを禁ずることが出來ない

門司にて彼れの危篤を聽く

此年北清に義和團の變あり、我軍は筆を載せて、驀然として北清に赴いた、芝眾より次活に赴き、事志と違ひて、芝眾を去る頃、激烈なるコレラ病に罹り、七月十五日門司に歸着するや、其の夜病軀を德山行の滊船に搭じた、其頃は山陽鐵道が未だ完成せず、門司と德山の間は、滊船を以て連絡を取て居たので、之に乘り組むと、偶ま邂逅かゝら佛骨奉迎使の一行が歸て來たのに邂逅した、サルーンに於て一行中の舊友、忽滑谷快天君に會し、又邂逅として知られた山本安太郎君に會した、山本君曰く

君の親友阿川君は大患に罹り、今頃は最早や死んで居るだらうと思ひます

我輩は驚て其故を問ふと、山本君曰く

阿川君は昨冬馬來半島探檢の中途、大熱に罹り一時人事不省に陷ッたのです、何分旅行中の事で、言語は通ぜず、風俗は異なり、醫者はなし、最早や其儘半島に死するかと思ひましたが、幸びに土人に助けられ、漸く磐谷迄は歸ることを得ました、爾來著るしく健康を害し、佛國人の設立せる病院へ入て治療を受けましたが、醫師は到底回復の見込みがないと診斷しました、

山本君も鐵膽とは數年間の親交で有るから、滯留中屢々病院を見舞ふたが、嚮爰聊する一方で、流石に剛氣の鐵膽も骨と皮ばかりに痩せて居たことを語り且つ曰く

阿川君は新嘉坡に病院を開て居る中野光三君と懇意ですから、ドウかして中野君の所迄往きたいと言て船に乘る準備をしましたが、滊船會社はソンな大病人は途中で死ぬると厄介だと云ふので切符を賣りません、病氣は激烈なる肺炎で兩肺共に最早や腐敗し盡して居るさうです、多分モウ今頃は死んで居ましようと

我輩は之を聞て、非常に遺憾に思ひ、其の夜直ちに一書を裁して送くッた

山本氏より吾兄大患に罹れることを聞き、痛心に堪えず、往年吾兄上海に在るの日、僕書を發して「何事をも成さずして歸朝せんよりは、寧ろ上海灣頭に餓死せよ」と言ひしも、今は僕唯吾兄が萬事を一擲して無事に歸朝あらんことを不便の事あらば、宜しく稻垣公使に謀り、如何にもして無事に歸朝あらんことを一望む

別に一書を作て稻垣公使に宛て、鐵膽の一身に付て、能ふ限りの保護を加へんことを依頼したが、兩書共に効を奏せず、我輩の書の磐谷に達する頃には、彼れは既に新嘉坡に於て永眠して居た